神戸市東灘区

本　山　遺　跡

（第22次調査）

1998

神戸市教育委員会

神戸市東灘区

本　山　遺　跡

（第22次調査）

1 9 9 8

神 戸 市 教 育 委 員 会

第１号住居跡出土遺物

序

平成７年１月の阪神・淡路大震災から、すでに３年あまりが経過しました。神戸市では、住み慣れた地をはなれ仮設住宅や市外に住居を移された市民のみなさまが、安心して住める街を回復することを第一に、復旧・復興事業に努めてまいりました。

震災にともなう被害は、多くの埋蔵文化財にも及びました。文化の香る住みよい街づくりのためにも、被災した文化財の保護を進めることも、忘れることのできない復興事業の一つであります。

本書でご報告する本山遺跡第22次発掘調査の成果も、住宅供給と文化財保護事業によって得られたものです。本山遺跡のある東灘区周辺は、桜ケ丘遺跡をはじめ多数の青銅器を出土したことで知られています。本山遺跡においても平成２年度の調査で銅鐸が発見されたことは記憶に新しいところです。また、六甲山が海側へせりだす本山の地は、古来より交通の要衝として栄えてまいりました。今回の調査では、弥生時代の中心的な遺跡と考えられてきた当遺跡で、はじめて竪穴住居跡を検出し歴史的な発展の一端を知る貴重な資料とすることができました。

本書が、復興の足跡の記録として、また学術研究、教育・普及の資料として広く活用され、復興事業・埋蔵文化財保護へのご理解を深めていただく機会となれば幸いです。

また、本発掘調査は、震災復興事業支援のため全国から兵庫県に派遣された職員の支援をもって実施したものであります。本書を通じて、多くの事業で御協力いただいている派遣職員の方々の職務を、広く知っていただけることを期待いたしております。

最後になりましたが、調査ならびに本書の刊行にご協力いただいた兵庫県教育委員会、同埋蔵文化財調査事務所、ならびに関係各位に深く感謝いたします。

平成10年３月31日

神戸市教育委員会

教育長　鞍　本　昌　男

例　　言

1．本書は、兵庫県神戸市東灘区本山中町４丁目１－20他に所在する本山遺跡第22次調査の発掘調査報告書である。

2．遺跡の略号はMTYM-22である。

3．発掘調査は、阪神・淡路大震災の復興事業にともなう事前調査であり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の支援を受け、神戸市教育委員会が実施した。

4．発掘調査は、前期を平成８年７月15日から平成８年11月15日まで、後期を平成９年１月27日から平成９年１月30日まで実施した。前期の調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査第１班　調査専門員石田彰紀、主任岩田明広、技術職員石崎善久が、後期の調査は岩田が担当した。整理作業は、平成８年９月18日から平成９年１月31日まで主に発掘調査現場事務所内で実施し、岩田が担当した。発掘調査と整理作業の組織はⅠ－３に示した。

5．遺構の実測・作図・トレースは岩田が担当し、礒辺敦子・西田明子の補助を受けた。出土品の実測・作図・観察表・トレースは岩田・石崎が担当し、復興調査第１班　主査山田晃弘（宮城県教育委員会より派遣）、礒辺敦子・西田明子の補助を受けた。

6．発掘調査時の写真撮影は石田・岩田・石崎が、遺物写真撮影は楠本真紀子が、動植物遺体の写真撮影は千種浩が、それぞれが行った。

7．遺跡の基準点測量は(株)国際航業が行った。

8．動物遺体の鑑定は、松井章が行った。

9．本書の編集および執筆は岩田が担当した。

10．本書に掲載した資料は、平成８年度以降神戸市教育委員会が管理・保管する。

11．調査ならびに本書の執筆にあたって下記の方々および各機関よりご協力・ご助言を得た。記して謝意を表するものである。（敬称略）

浅岡俊夫、禰宜田佳男、山田晃弘、藤井　整、兵庫県埋蔵文化財調査事務所、兵庫県埋蔵文化財調査事務所復興調査第１・２班諸氏

凡　　例

1．図中の座標は、国家標準直角座標第Ⅴ系に基づく座標値を示す。方位は、すべて座標北を示す。

2．調査範囲には、国家標準直角座標第Ⅴ系に基づき５ｍグリッドを設定した。グリッドの名称は、北西杭の番号を用いた。

3．図の縮尺は、下記を基準とした。

　遺構全測図１/300、遺構図１/60・１/30、土器実測図１/４

　石器・金属器実測図１/２、拓本１/３

なお、例外は挿図中に示した。

4．全測図等に示す遺構表記の略号は、下のとおりである。

　SJ：竪穴式住居跡、SB：掘立柱建物跡、SD：溝跡、SK：土壙・土坑

　SN：水田跡、P：ピット

5．遺構図中に示した遺物の番号は、遺物実測図の番号と一致する。

6．遺構図中に示したスクリーントーンは、焼土分布範囲、被熱範囲、炭化物集中範囲のほか、柱痕跡を示す。

7．観察表の表記は以下によっている。

法量の単位はcmおよびｇで、（　）内の値は推定値である。

色調は、新版標準土色帳（農林水産省技術会議事務局監修1967）に準じて細別した。

残存率は残存部位の百分率で示した。

本　文　目　次

例　　言
凡　　例
目　　次
Ⅰ．発掘調査の概要 …… 1
　1．調査に至るまでの経過 …… 1
　2．発掘調査・報告書作成の経過 …… 2
　3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織 …… 4
Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 5
Ⅲ．遺跡の概観 …… 11
Ⅳ．遺構と遺物 …… 15
　1．第1遺構面の遺構と遺物 …… 15
　2．第2遺構面の遺構と遺物 …… 16
Ⅴ．結語 …… 52

表　目　次

第1表　第1号住居跡出土遺物観察表 …… 35
第2表　第1号住居跡直上包含層出土遺物観察表 …… 38

挿　図　目　次

第1図　東灘周辺の地形 …… 6
第2図　弥生時代の周辺の遺跡 …… 7
第3図　調査範囲位置 …… 8
第4図　周辺の旧地形 …… 9
第5図　基本層序 …… 12
第6図　第2遺構面全体測量図 …… 13
第7図　第1遺構面全体測量図 …… 14
第8図　水田跡 …… 15
第9図　第1号住居跡 …… 18
第10図　第2号住居跡および第1号・第2号住居跡中央土坑 …… 19
第11図　第1号・第2号住居跡掘り方 …… 20
第12図　第1号住居跡遺物出土状況 …… 21
第13図　第1号住居跡出土遺物（1） …… 25
第14図　第1号住居跡出土遺物（2） …… 26
第15図　第1号住居跡出土遺物（3） …… 27
第16図　第1号住居跡出土遺物（4） …… 28
第17図　第1号住居跡出土遺物（5） …… 29
第18図　第1号住居跡出土遺物（6） …… 30
第19図　第1号住居跡出土遺物（7） …… 31
第20図　第1号住居跡出土遺物（8） …… 32
第21図　第1号住居跡出土遺物（9） …… 33
第22図　第1号住居跡直上包含層出土遺物 …… 34
第23図　掘立柱建物跡および出土遺物 …… 41
第24図　ピット群 …… 43
第25図　第1・2・3・5号溝跡 …… 44
第26図　第4号溝跡および出土遺物 …… 46
第27図　溝跡出土遺物 …… 48
第28図　土坑 …… 49
第29図　グリッド・包含層出土遺物 …… 51
第30図　第1号住居跡出土の一括性の高い遺物 …… 54

図版目次

図版１　第Ⅰ期全景
第Ⅱ期全景
第Ⅱ・Ⅲ期全景
図版２　第１遺構面水田跡
大畦畔と水路跡
用水路底面の状況
図版３　第１・２号住居跡
第１・２号住居跡
第１・２号住居跡
図版４　第１・２号住居跡掘り方
第１号住居跡遺物出土状況
第１号住居跡上層の遺物出土状況
図版５　第１号住居跡遺物の出土単位
第１号住居跡下層の遺物出土状況
第１号住居跡下層の遺物出土状況
図版６　第１号住居跡下層の遺物出土状況
第１号住居跡中央土坑確認状況
第１号住居跡中央土坑遺物出土状況
図版７　第１号住居跡中央土坑
第１号住居跡中央土坑に切られた第２号住居跡中央土坑
第１号掘立柱建物跡と第１号溝跡
図版８　第２号掘立柱建物跡
第３号掘立柱建物跡
ピット群
図版９　第２号土坑
第３号土坑
第３・４・５号溝跡
図版10　第４号溝跡
第４号溝跡
第４号溝跡下層の遺物出土状況
図版11　第４号溝跡下層の遺物出土状況
倒木痕断面
発掘調査参加者
図版12　第１号住居跡22
第１号住居跡23
第１号住居跡16
第１号住居跡15
第１号住居跡48
図版13　第１号住居跡21
第１号住居跡６
第１号住居跡９
第４号溝跡４
溝跡出土遺物
図版14　第１号住居跡出土遺物
図版15　第１号住居跡出土遺物
図版16　第１号住居跡出土遺物
第１号住居跡直上包含層出土遺物
図版17　第１号住居跡出土石器
第１号住居跡出土石器・土製品
図版18　第１号住居跡出土石器
図版19　グリッド・包含層出土石器・土製品
グリッド・包含層出土石器
図版20　第１号住居跡中央土坑出土ムササビ左下顎骨
第１号住居跡中央土坑出土炭化米

Ⅰ．発掘調査の概要

１．調査に至るまでの経過

平成５年１月17日の阪神・淡路大震災では、神戸市内だけでも20万世帯の方々が住まいを失った。震災から２年を経た平成９年現在でも、３万人を越える方々が仮設住宅に仮住まいされている。

現在も不便を強いられている方々が、住み慣れた街にもどるためにも住宅の確保は依然急務となっている。これを受けて、民間・公共の共同住宅建設が数多く行われている。今回の発掘調査は、このような震災復興のための住宅建設・再建に先立って行われたものである。

当該地は旧来より市場として栄えていたが、震災によって家屋が倒壊したため、店舗付き共同住宅の建設が計画された。開発行為事前審査願が当教育委員会に提出されたが、計画地は本山遺跡として知られる遺跡の範囲内にあたるため、平成８年３月27日に試掘調査を実施した。試掘調査では３か所に設定した試掘坑において、弥生時代の遺物包含層が検出され、当該地に遺跡が存在することを確認した。試掘調査の結果と復興事業に係わる基本方針に基づき、住宅の建設工事によって破壊される部分のみを対象として、当該遺跡の発掘調査を行うことになった。

発掘調査は、平成８年７月15日から平成８年11月15日までと平成９年１月27日から１月30日まで、広島市教育委員会・埼玉県教育委員会・京都府教育委員会から兵庫県教育委員会へ復興調査支援のため派遣された職員が行った。

２．発掘調査・報告書作成の経過

本山遺跡第22次調査では、平成８年７月15日から11月15日までと平成９年１月27日から１月30日まで調査を実施した。発掘面積は共同住宅建設によって遺跡が破壊される部分の1212㎡で、前期に1160㎡を、後期に52㎡を対象とした。

調査範囲には、当初３棟の仮設住宅とこれにともなう物置・ユニットハウス３棟のほか、自家用車２台、震災直後の家屋解体によって生じた若干の瓦礫が残存していた。調査はこれらの残留建築物等の撤去を待って行ったため、調査対象範囲を５分割して行うことになった。このうち、Ｂ３グリッドを中心とした部分については、住宅の立ち退きが不可能であったため、調査時期を遅らせ、後期日程として、平成９年１月の調査となった。

その他の４つの部分については、平成８年７月から11月の日程で調査を行った。Ｚ６・Ｅ７グリッドを通るａ－ａ'から東側を第Ⅰ期、Ｄ２・Ｂ７グリッドを通るｂ－ｂ'から南側を第Ⅱ期、北側を第Ⅲ期とし、この順で調査を行ったが、他にＣ１・Ｃ２グリッドを通るｃ－ｃ'より北側を第Ⅰ期と平行して先行調査した。各々の調査区の表土掘削作業に先立ってプレハブ型物置の撤去・家財道具の運搬など、作業の進行と平行して、できるかぎり立ち退きに協力した。

調査範囲には５ｍを基準としたグリッドを設定した。北から南にＡからＦまで、西から東に１から11までである。グリッドの名称は、これらを組み合わせた北西杭の番号とした。なお、基準点測定が遅れたため、北側の一部についてグリッド設定ができず、整理作業段階でＡグリッドの北に向かいＺ・Ｙを付け加えた。

詳細については、下に調査日誌の概略を掲げるので、これに代えたい。

７月15日　第Ⅰ期調査区およびＢ１・２、Ｃ１・２グリッドについて、重機による表土掘削作業を開始した。現場事務所を設置し、器材の搬入を行った。

７月18日　重機による掘削を終了し、人力による遺構の確認作業に入る。

７月19日　Ｂ１・２、Ｃ１・２グリッドの表土直下５～10㎝程度の層で遺構面を確認した。その結果、第１・２・３号溝跡、第１・２号掘立柱建物跡を検出し、調査を開始した。

７月24日　第Ⅰ期調査区の表土下約70㎝程度の面から第１～３号土坑を検出し、調査を開始した。

７月25日　第１・２・３号溝跡、第１・２号掘立柱建物跡等の測量・撮影を終了し、下層に遺構面のないことを確認後、調査を終了した。

７月26日　第１・２・３号土坑の測量・撮影を行った。

７月29日　第Ⅰ期調査区の測量・全景撮影を行い、調査を終了した。第Ⅱ期調査区の重機による表土掘削、第Ⅰ期調査区への埋め戻しを開始した。

７月31日　第Ⅱ期調査区の表土掘削に平行して、人力による確認を開始した。その結果、表土下20㎝程度の第１遺構面で、江戸時代の水田跡を検出した。

８月１日　第Ⅱ期調査区の表土掘削を終了した。

８月５日　水田跡の測量・撮影を終了し、人力による下層への掘削作業を開始した。水田跡床土には多量の弥生時代遺物が包含されていた。

8月6日　基準点測定を行った。

8月8日　人力掘削の結果、表土下35㎝程度の第2遺構面から竪穴住居跡、ピット等を確認した。

8月21日　第4号溝跡を確認した。

8月22日　竪穴住居跡の調査を開始した。

9月9日　竪穴住居跡の測量・撮影を終了した。第4号溝跡の調査を開始した。

9月18日　竪穴住居跡床面から拡張前の竪穴住居跡を検出した。前者を第1号住居跡、後者を第2号住居跡とし、測量・撮影を行った。現地説明会の準備を開始した。同時に遺物の実測等、整理作業を開始した。

9月19日　住居跡周辺の確認を行った結果、第3号掘立柱建物跡を検出した。石田調査専門員が離任した。

9月24日　第3号掘立柱建物跡・第4号溝跡の撮影・測量を行い、下層に遺構面がないことを確認後、第Ⅱ期調査区の調査を終了した。第Ⅲ期調査区の重機による表土掘削を開始した。石崎技術職員が着任した。

9月25日　第Ⅲ期調査区の重機による表土掘削を終了し、人力による確認を開始した。第1遺構面における江戸時代の水田面は、平面的な掘削を受けており痕跡のみを検出した。このため、第2遺構面への掘削を行った。

9月27日　第3号溝跡の続きを検出し、調査を開始した。

10月4日　第4号溝跡の続きを検出し、調査を開始した。

10月8日　雨天ではあったが、現地説明会準備のため、屋外作業を行う。

10月10日　現地説明会を開催した。約90名の参加者を得た。

10月11日　第3・4号溝跡の測量・撮影を行い、調査を終了した。

10月16日　ピット群を確認した。

10月22日　ピット群の測量・撮影を行い、調査を終了した。

10月28日　住居跡の掘り方を確認し、測量・撮影後、調査を終了した。

10月31日　第Ⅲ期調査区下層の人力による確認を開始した。

11月6日　バックホウによる第Ⅲ期調査区の下層確認後、埋め戻しを行った。

11月7日　ガードフェンスの取外しなど後片付けを行った。

11月12日　器材の搬出を行い、図面類の確認を行った。

11月14日　遺物の搬出を行った。図面のトレースを開始した。

11月15日　現場事務所の撤去等を行い、すべての発掘調査を終了した。

平成9年（後期日程）

1月27日　仮設住宅立ち退き跡地の表土掘削を行い、柱穴4基を検出した。

1月30日　すべての調査を終了し、現場事務所等の撤去を行った。

整理および報告書の刊行作業は、現場作業と平行して、主に発掘調査現場事務所内で行った。期間は平成8年9月18日から平成9年1月31日までである。

3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織

(1) 前期調査・整理・報告書作成作業

神戸市文化財専門委員（埋蔵文化財部会）

檀上重光　神戸女子短期大学教授

和田晴吾　立命館大学文学部教授

神戸市教育委員会

教育長　鞍本昌男

社会教育部長　矢野栄一郎

文化財課長　杉田年章

社会教育部主幹　奥田哲通

埋蔵文化財係長　渡辺伸行

事務担当学芸員　松林宏典

調査担当者

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査専門員　石田彰紀（広島市教育委員会派遣職員）

主任　岩田明広（埼玉県教育委員会派遣職員）

技術職員　石崎善久（京都府教育委員会派遣職員）

(2) 後期調査・整理・報告書作成作業

神戸市文化財専門委員（埋蔵文化財部会）

檀上重光　神戸女子短期大学教授

和田晴吾　立命館大学文学部教授

神戸市教育委員会

教育長　鞍本昌男

社会教育部長　矢野栄一郎

文化財課長　杉田年章

社会教育部主幹　奥田哲通

埋蔵文化財係長　渡辺伸行

事務担当学芸員　松林宏典

調査担当者

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

主任　岩田明広（埼玉県教育委員会派遣職員）

Ⅱ．遺跡の立地と環境

遺跡の位置　本山遺跡が位置する神戸市東部の地形は、大きく３つに分けることができる。北から、深層風化した花崗岩によって形成された六甲山系からなる山地・丘陵部、六甲山系から流出した半固結状態の堆積物からなる河岸段丘面、洪水・土石流等によって形成された風化花崗岩を母体とする未固結の堆積物を基盤層とし、風化花崗岩の砕屑物「真砂土」と海岸堆積物を上層にのせた海岸平野である。これらの地形には急峻な六甲山系から幾筋もの河川が流下しており、段丘面から続く急傾斜の平野に流出する際、広汎な扇状地を形成している。海岸平野と段丘の境界は、現在の国道２号線にほぼ重なり、先般の震災による被災も、これより北側の比較的堅緻な基盤層をもつ地域に比べ、南側の軟弱な基盤層をもつ地域に目立っている。

本山遺跡は、段丘上面から海岸平野との境界付近にかけて広がる直径500ｍを越える遺跡で、現在のJR摂津本山駅付近から国道２号線南までが含まれる。今回の調査範囲は国道２号線の北側、縄文海進で浸食された段丘面末端付近にあたる。

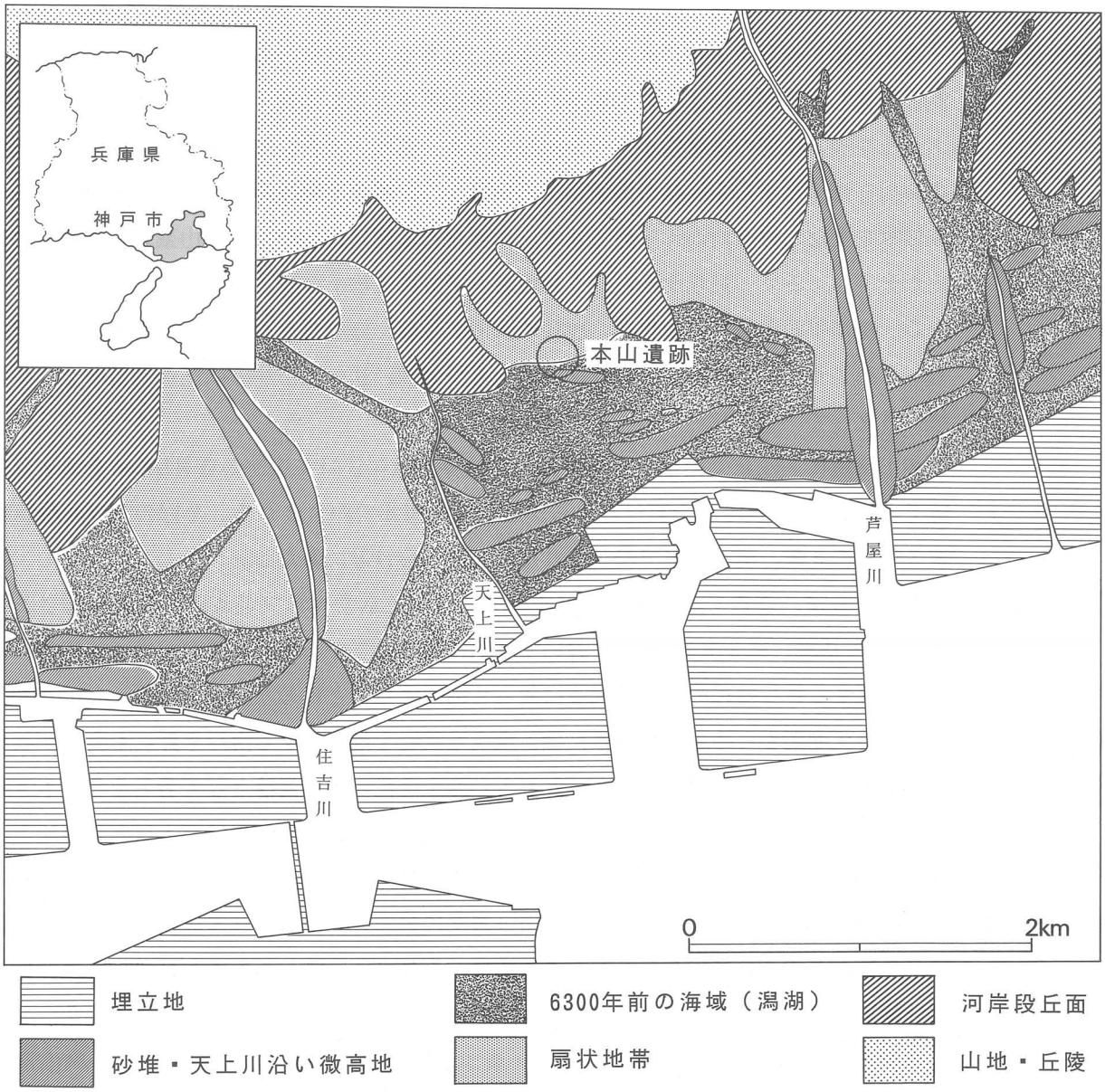
周辺の遺跡　本来ならば、ここで当地域の歴史的環境について示すべきであるが、先に刊行された『魚崎中町遺跡（第３次調査）』において詳細に記されているので、ここでは、本報告に密接に関連する弥生時代の歴史的環境に限って概観することにしたい。

弥生時代前期　縄文時代晩期から弥生時代初頭には、水成堆積物を地表とする海岸平野にも集落が散見されるようになる。周辺地区でもっとも古い弥生時代の集落遺跡として著名な北青木遺跡(16)・本庄町遺跡（14）が出現する。遺跡の立地は、河川の自然堤防および海岸砂堆上に限定されており、周囲の後背湿地を利用した水稲耕作を生活基盤にしたものと考えられる。

弥生時代中期　中期の遺跡は、丘陵上部および六甲山系端部に形成された三角洲末端面頂部などの山腹に、多数が確認されている。これらの遺跡は、少数の住居跡からなるもので、高地性集落に分類されるものもある。荒神山遺跡（２）・赤塚山遺跡（３）・金鳥山遺跡（７）・保久良神社遺跡（８）・森奥遺跡（10）・東山遺跡（11）・会下山遺跡（17）・城山遺跡(18) などである。こうした遺跡には、磐座をもつ保久良神社遺跡のように旧来から知られてきたものが多い。

従来、段丘面および平野部の状況は、調査例が少なく詳らかでなかったが、近年の開発にともなう調査によって、段丘面上の森北町遺跡（13）・岡本北遺跡（19）・本山北遺跡(20)、平野部の本山遺跡（１）・郡家遺跡（４）・住吉宮町遺跡（５）・本庄町遺跡(14) ・深江北町遺跡（15）などの存在が明らかになってきた。段丘上の遺跡は比較的小規模であるのに対して、平野部の遺跡の規模の大きさが注意される。これらの遺跡のほとんどが後期まで継続する。

なお、中期に属する遺跡のうち、特に平野部に立地する遺跡では、明瞭な生活痕跡や住居跡がほとんどみつかっていない。銅鐸の出土、土器・石器の出土量や包含層分布範囲の広がり、あるいは掘立柱建物跡、ピット群などから、本山遺跡を周辺の拠点集落とみる傾向があるが、明瞭な集落の姿はまったくわかっていないのが現状である。

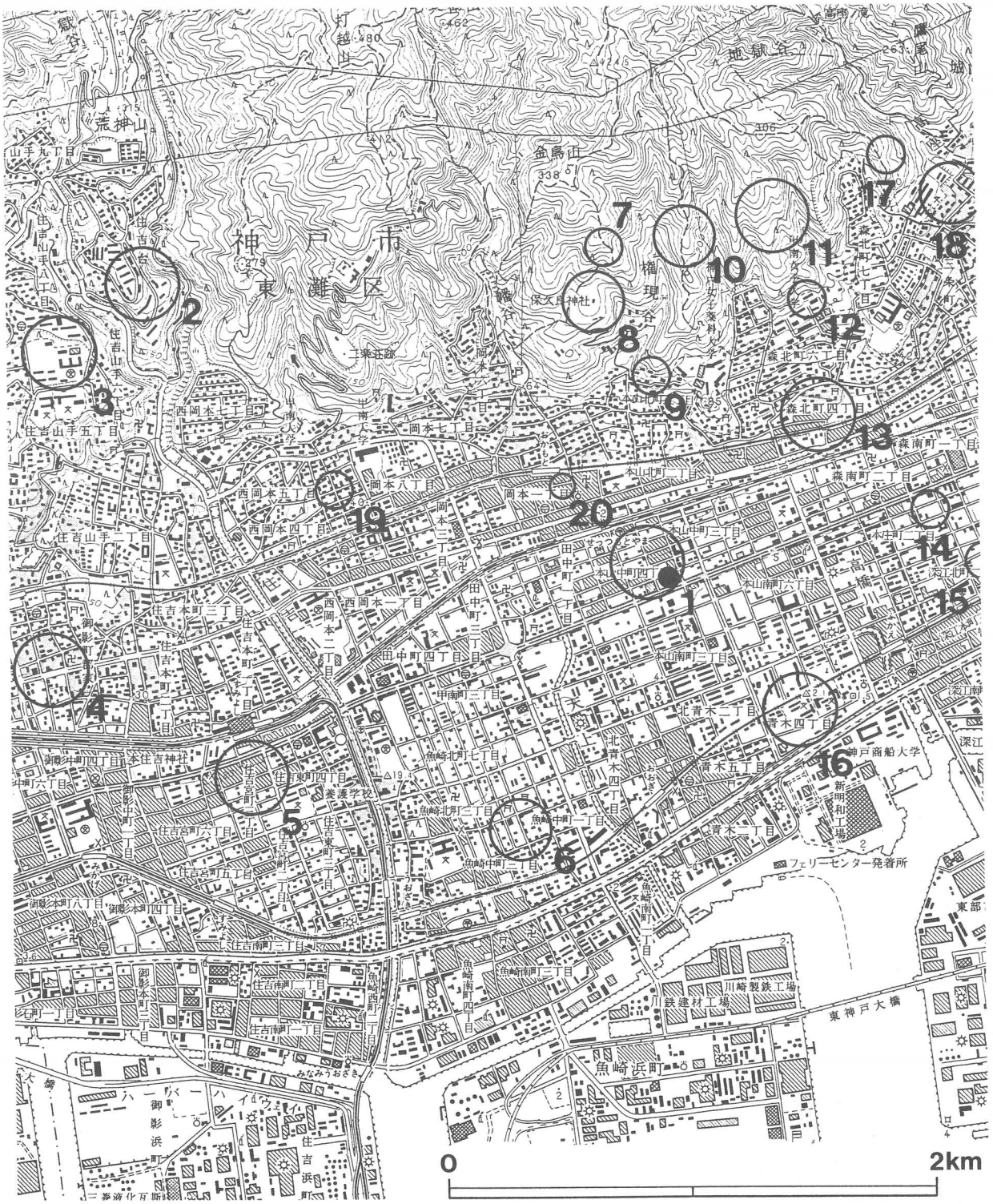


第１図　東灘周辺の地形

弥生時代後期　後期になると、方形および円形周溝墓を群集させた墓域が出現する。郡家遺跡（４）・住吉宮町遺跡（５）・深江北町遺跡（15）などが主要な遺跡であるが、平成８年度に行なわれた魚崎中町遺跡（６）第３次調査でも庄内期の円形周溝墓２基と方形周溝墓１基が確認され、東灘一帯が畿内地方でも有数の集中地域であることがわかってきた。

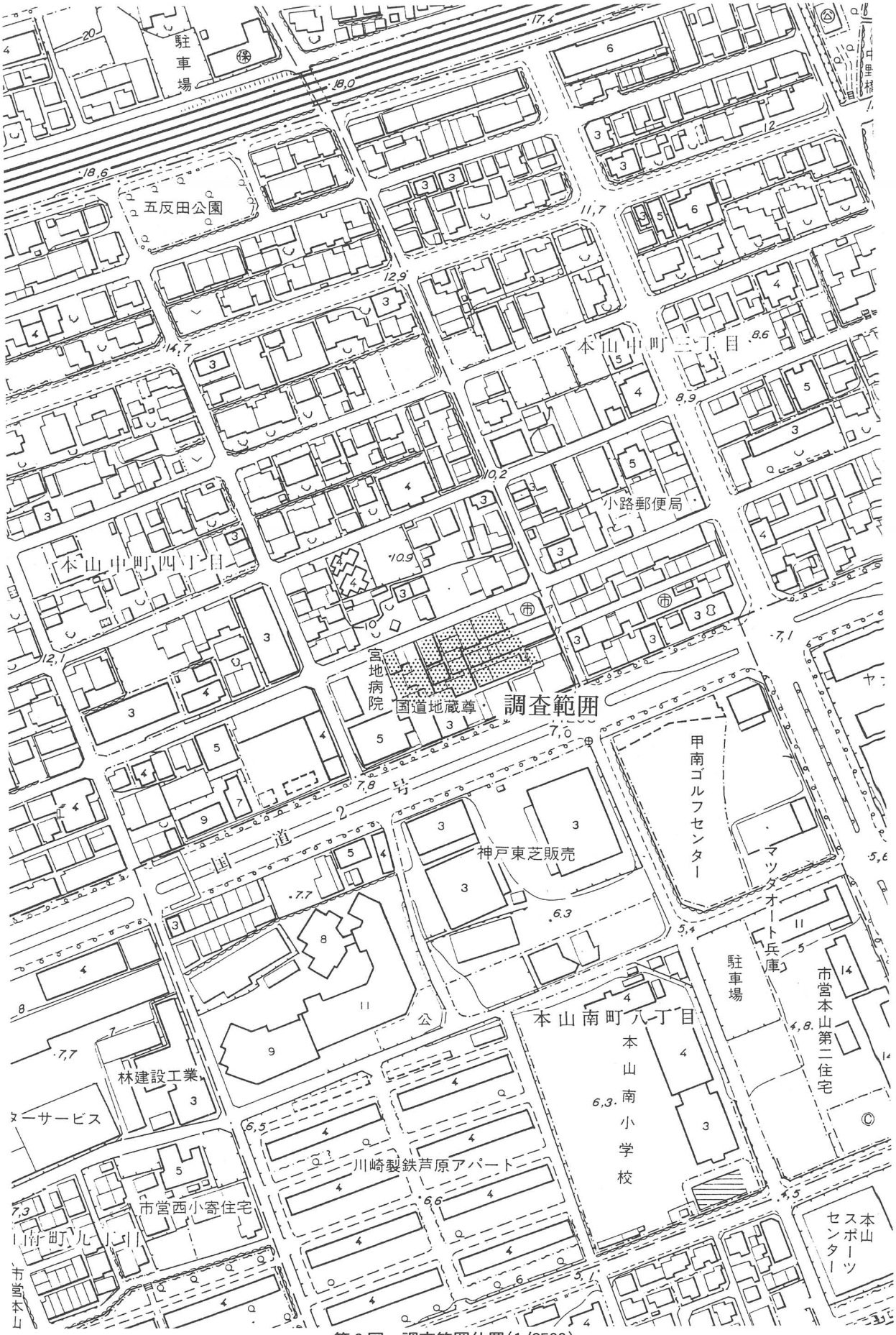
郡家遺跡（４）では、円形周溝墓と方形周溝墓が地点を異にして群在していた。住吉宮町遺跡（５）では方形周溝墓が、深江北町遺跡（15）では円形周溝墓が群集していた。これに対して、魚崎中町遺跡（６）では両者が切り合い関係をもちながら共存していた。

また、東灘地域は、多数の青銅器を出土することで知られている。桜ケ丘遺跡における銅鐸12口・銅戈７本を筆頭に、渦ケ森遺跡・生駒銅鐸出土地（９）・森銅鐸出土地（12）で銅鐸が、保久良神社遺跡（８）で大阪湾形銅戈、森北町遺跡（13）で前漢鏡片・銅鏃が



1 本山遺跡	2 荒神山遺跡	3 赤塚山遺跡	4 郡家遺跡	5 住吉宮町遺跡
6 魚崎中町遺跡	7 金鳥山遺跡	8 保久良神社遺跡	9 生駒銅鐸出土地	
10 森奥遺跡	11 東山遺跡	12 森銅鐸出土地	13 森北遺跡	14 本庄町遺跡
15 深江北町遺跡	16 北青木遺跡	17 会下山遺跡	18 城山遺跡	
19 岡本北遺跡	20 本山北遺跡			

第２図　弥生時代の周辺の遺跡



第３図　調査範囲位置(1/2500)

本山遺跡
調査地点
村本岡
村路小
田辺村
村中田
村吉住
村屋横
西青木村
村水青
村崎魚
村影御
村家郡
村江深
村株中
村屋
村畑北
村畑
村畑
村畑

出土している。本山遺跡（1）においても平成2年度の第12次調査において、高さ21.8cmの小形の銅鐸が出土した。

平成8年には、島根県加茂東遺跡において多量の銅鐸が出土して話題になったが、桜ケ丘遺跡出土の銅鐸には、同笵のものが含まれているという。日本書紀の記述などから出雲地方との関係を指摘される場合もあり、当地域の弥生時代の様相は今後さらに注目されるものとなるだろう。

山陰地方との密接な関係は、古墳時代前期にも認められ、東灘区の著名な前方後方墳である西求女塚古墳・処女塚古墳には、山陰系の土器が供献されている。

参考文献

浅岡俊夫・古川久雄　1995『神戸市東灘区郡家遺跡－篠坪地区第10次調査－』

岡田章一・渡辺昇　1990『坊ケ塚遺跡（住吉宮町遺跡群Ⅱ）』

岡田章一・別府洋二・中川　渉　1991『本庄町遺跡』

神戸市教育委員会　1990『本山遺跡第12次調査の概要』

高橋　学　1986「芦屋川・住吉川流域の地形環境Ⅰ」『北青木遺跡』

高橋　学　1987「芦屋川・住吉川流域の地形環境Ⅱ」『小路大町遺跡』

高橋　学　1988「芦屋川・住吉川流域の地形環境Ⅲ」『深江北町遺跡』

高橋　学　1990「Ⅵ．坊ケ塚遺跡の地形環境分析」『坊ケ塚遺跡（住吉宮町遺跡群Ⅱ）』

高橋　学　1990「郡家遺跡－御影中学校地区の地形環境」『郡家遺跡　神戸市東灘区所在御影中町地区第3次調査概報』

高橋　学　1991「第5節　六甲山南麓の地形環境分析―本庄町遺跡・西岡本1丁目遺跡の地形環境―」『本庄町遺跡』

Ⅲ．遺跡の概観

本山遺跡は、六甲山系から海岸に向かって広がる急傾斜の平野と段丘面の境界付近に位置する。東西にはそれぞれ芦屋川・住吉川によって形成された扇状地が広がり、遺跡がのる段丘末端面も扇状地性堆積物によって形成されていた。

遺跡の範囲は東西南北とも500ｍをこえ、現在のJR摂津本山駅から国道２号線の南に至る地区に広がっている。今回調査範囲となった部分は遺跡中心部より南東によった地点にあり、南東に傾斜している。現況の標高は8.5～9.2ｍである。

調査範囲は阪神・淡路大震災当時まで国道２号線北側に沿って東西に広がる市場となっており、幅員約３ｍの南北の市道によって東の小路市場と西の保久良市場に分かれていた。これらの市場は、小家屋付きの店舗が密集したもので、ほとんどの家屋が全壊した。震災時の空中写真では、倒壊した市場の様子がみてとれる。保久良市場側の国道際には国道地蔵尊が建てられているが、平成９年１月現在では震災時に倒壊したままの状態にあり、当時の状況をのこす建造物の一つとなっている。調査範囲は、このうち保久良市場跡地の1,212㎡である（第３図）。

本山遺跡は、今回の調査以前に21次におよぶ調査が行なわれてきた。本来ここで、それらの成果についてまとめておく必要があるが、復興の支援事業である今回の調査では、そこまでの余裕がなかった。概略をもってこれに代えたい。

本山遺跡は近年の再開発事業などにともなう分布調査の結果、発見された遺跡である。当初、中世の遺物包含層・掘立柱建物跡など若干の遺構が検出されたが、弥生時代中期の遺物を出すことがわかり、第12次調査で銅鐸が発見されるなどしたことから、該期の拠点的な集落であると想定されるようになった。弥生時代の遺物は多量のサヌカイト製石器と剥片・チップ類、第Ⅱ・第Ⅲ様式を中心とした土器群などが得られている。

平成８年度にも７次以上の調査が行なわれており、第18次調査にあたる小路市場跡の調査では、溝跡・土坑のほか多数のピットが検出された。土坑からは管玉のほか骨格器類がみつかった。また縄文時代早期の押型文をもつ土器群も検出された。

隣接する宮地病院は２階部分が崩壊したことで報道された。この跡地も平成７年度中に調査されており、掘立柱建物跡２棟と溝跡などが検出されている。

基本層序

調査範囲は、阪神・淡路大震災によって倒壊した建物基礎によって激しく撹乱されていた。

遺構面はこれらの撹乱層によって相当部分が破壊されていたが、表土下15㎝程度の位置で部分的に近世～近代の水田土壌（Ⅲ層）を検出することができた。これを第１遺構面とした。

水田床土であるⅢ層は、弥生時代中期から平安時代にかけての包含層となっており、Ⅳ層上面から掘りこまれた弥生時代前期・中期の遺構を予想以上に保存していた。表土下約40㎝程度のこの面を第２遺構面とした。

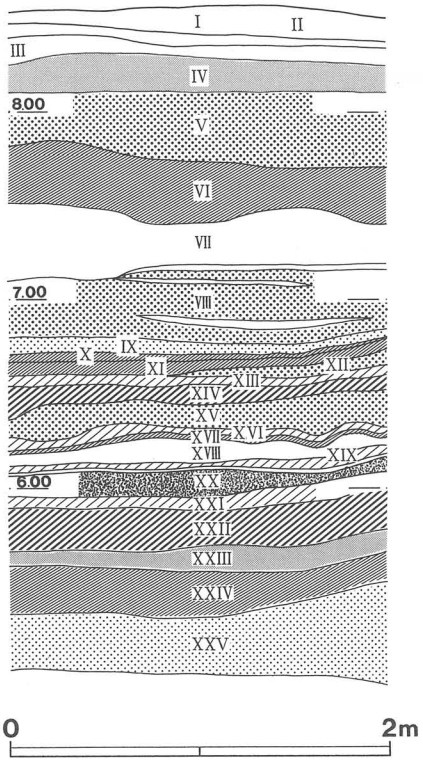
第２遺構面以下には遺構・遺物とも全く認められず、面的削剝など人為的な行為の痕跡

はなかった。基本層序の構成は、Ⅳ～Ⅶ層が土石流による堆積物で、河岸段丘面末端の扇状地形に堆積した層である。これ以下は、海岸地帯に形成された粗砂からなる堆積物で、粘土化したシルトとシルトのまじる砂によるラミナが発達している。ＸＸ層には、純度の高い粘土層が認められたが、これは淘汰のよい２次粘土である。

第１遺構面は、造成にともなう削平と撹乱のため調査区西側の一部分、Ｄ５グリッドより南側および西側の部分に限って認められた。検出できた遺構は、近世～近代を中心とした水田跡３筆、水路跡および大畦畔跡１条、牛馬耕にともなうものと思われる耕作痕14条であった。出土遺物は、水田耕作土にあたる基本層序Ⅱ層中より少量の陶磁器片、土師器片、須恵器片、弥生土器片、サヌカイト製石器・剥片等が出土した。

第２遺構面においても造成および建物基礎によるはげしい撹乱は影響を与えており、基本層序におけるⅣ層、あるいはⅣ層に連続するⅤ層が残存している部分は、Ｄ２グリッドとＣ10グリッドを結ぶラインより南に限られていた。これより北側の部分では、少数の掘立柱建物跡およびピット群に加え、南側から続く溝跡の他に明瞭な遺構を検出することはできなかった。

検出できた遺構は、弥生時代前期の溝跡１条、弥生時代中期の竪穴住居跡２軒（今回は

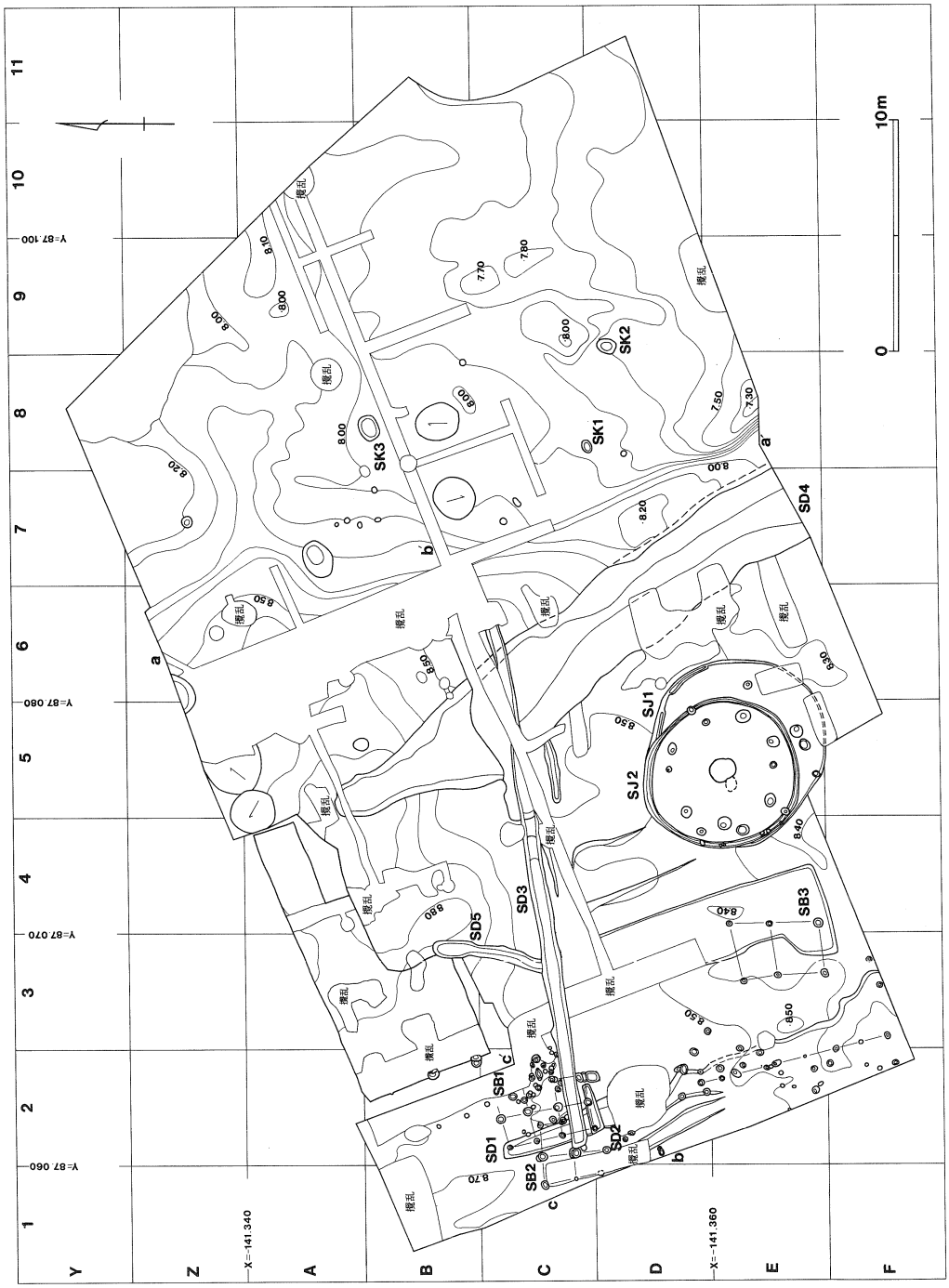


Ⅰ	中砂	10YR3/2 黒褐色　現代の攪乱層
Ⅱ	細砂	7.5YR7/4　にぶい橙　第２次大戦時の焼土層
Ⅲ	細砂質シルト	10YR3/3 暗褐色　江戸時代から戦前までの水田層、弥生包含層
Ⅳ	細砂質シルト	10YR2/1 黒色　弥生時代の遺構面
Ⅴ	砂礫	10YR2/2 黒褐色　土石流による堆積層、花崗岩屑多量
Ⅵ	砂礫	10YR4/4 褐色　土石流による堆積層、大形の花崗岩塊含む
Ⅶ	砂礫	10YR4/6 褐色　土石流による堆積層、下層にクロス・ラミナ
Ⅷ	砂礫	10YR5/4 にぶい黄褐色　洪水堆積物、クロス・ラミナ発達
Ⅸ	中砂	10YR5/6 黄褐色
Ⅹ	粘土まじり砂	10YR3/3 暗褐色
ⅩⅠ	粘土まじり砂	2.5Y4/3 オリーブ褐色
ⅩⅡ	砂礫	2.5GY5/1　オリーブ灰
ⅩⅢ	シルト質粘土	10TR2/2 黒褐色
ⅩⅣ	砂まじり粘土	2.5GY2/1　黒色
ⅩⅤ	砂礫	2.5GY5/1　オリーブ灰色
ⅩⅥ	シルト質粘土	2.5Y4/1 黄灰色
ⅩⅦ	砂まじり粘土	N1.5/0 黒色
ⅩⅧ	粘土まじり砂	2.5GY5/1　オリーブ灰色
ⅩⅨ	砂まじり粘土	N2/0 黒色
ⅩⅩ	粘土	2.5GY3/1　暗オリーブ灰色
ⅩⅩⅠ	シルト質粘土	5GY2/1　オリーブ黒色
ⅩⅩⅡ	砂まじり粘土	5GY2/1　オリーブ黒色
ⅩⅩⅢ	細砂質シルト	N1.5/0 黒色
ⅩⅩⅣ	細砂質シルト	N2/0 黒色
ⅩⅩⅤ	中砂	2.5GY5/1　オリーブ灰色

第５図　基本層序

拡張の認められる例であったため、拡張前を１軒、拡張後を１軒として調査した)、弥生時代のうち時期不明の溝跡１条、平安時代の溝跡１条、近世の溝跡１条、時期不明の掘立柱建物跡３棟、溝跡１条、ピット群１ヵ所（柱穴30基)、土坑３基であった。

出土遺物は竪穴住居跡から28リットル入りコンテナで15箱分の弥生土器・石器が得られたほか、２点の鉄製品が出土した。竪穴住居跡では焼却等によると思われる被熱の痕跡が



第６図　第２遺構面全体測量図

みられ、熱を受けた大形の壷形土器を含むセット関係が把握できた。また、弥生時代前期の溝跡からは、弥生土器・石器が少量得られた。ほかにピット群、溝跡および周囲のグリッドから多量の土器・石器が得られた。

第１遺構面、第２遺構面双方における遺物総量は、28リットル入りコンテナで30箱分となった。このうち石器類は２箱分である。

第７図　第１遺構面全体測量図

Ⅳ．遺構と遺物

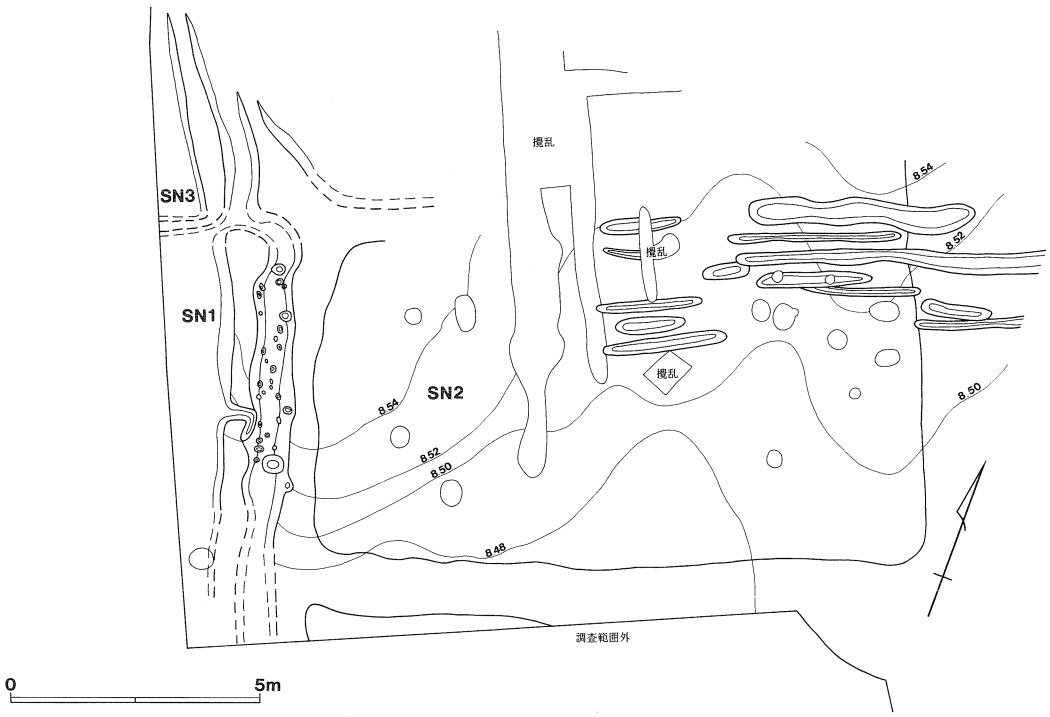
１．第１遺構面の遺構と遺物

第１遺構面はＣ４～６、Ｄ２～６、Ｅ２～６、Ｆ２～３グリッドにあたる第Ⅱ期調査範囲のほぼ全面で確認できた。検出した遺構は、基本層序Ⅱ層を耕作土、基本層序Ⅲ層を床土にもつ水田跡とこれに付属する畦畔と水路跡、他に床土上面にのこる東西方向の牛馬耕痕跡の鋤跡である。耕作土である基本層序Ⅱ層は江戸時代から明治時代の遺物を包含しており、床土である基本層序Ⅲ層は、弥生時代～平安時代の遺物を包含していた。床土には天地がえし等にともなう明瞭な撹乱痕跡が認められなかった。このことから、水田跡およびこれに付随する畦畔・水路、および耕作痕は近世から近代にかけてのものと判断した。

水田跡（第７・８・29図）

検出できた水田跡は３筆である。いずれも水田面上面は戦後の撹乱層によって失われており、床土となったオレンジ斑鉄層上面で形状を確認することができた。

SN １はＥ２・Ｆ２グリッドでみつかった。規模の詳細は不明である。SN ２からみて10㎝程度低くなっており、水田表面ではさらに大きな段差があったものと思われる。SN ２はＤ３・４、Ｅ３・４グリッドでみつかった。南北6.40ｍ、東西12.20ｍであった。SN １との間には中央に水路をもつ大畦畔がみとめられた。畦畔は基部で検出したもので、５㎝に満たない高まりが残っていた。水路底面には不規則な凹凸が多数認められ、SN １へ引水する水口があった。水路はＤ２・Ｅ２グリッド中央付近の畦畔交点でやや西側にずれるものの、Ｄ２グリッドのSN ３脇の大畦畔中央を通り、北側へ続いていた。大畦畔



第８図　水田跡

の幅は上面で1.70m、基部で2.10m程度で、中央の水路は幅60～80cm、深さ7cm程度であった。南側で検出できた畦畔は、基本層序Ⅳ層が土壌化せずにのこった部分であり、いわゆる疑似畦畔Bにあたる。幅は1.20m程度で、高まりはみられなかった。東側を画する畦畔についても疑似畦畔として検出したものであるが、これより東側では水田面につける段差のため、すでに上層の撹乱によって水田床土まで削平されており、水田跡の連続を確認することはできなかった。SN 3は大畦畔とオレンジ斑鉄層がわずかに遺存していたもので、区画の一部を検出することしかできなかった。SN 3東の境界は、南側から続く大畦畔によるが、これについても一部分を把握できたのみである。地割りの方向は、総じてN-13°-Wを指しており、現在の地割りのN-20°-Wとは異なっていた。

水田域は、本来東側から広がっていたものと考えられ、水配りも北東から南西であったと予想されるが、今回の調査ではこれを明らかにすることはできなった。

水田跡にともなう出土遺物はSN 2耕作土出土の第29図12の磁器と、SN 1床土下面出土の13のかわらけのほか、図示できない磁器の細片が数点である。第29図13のかわらけの出土層位からみて、当水田跡の開田時期は中世～近世初めに遡る可能性があり、今後、周辺地域の遺構との整合性が問題となるだろう。

2．第2遺構面の遺構と遺物

第2遺構面は基本層序Ⅳ層上面で確認した。検出した遺構は、弥生時代中期の竪穴住居跡2軒、弥生時代前期の溝跡1条、弥生時代に属する溝跡2条、平安時代の溝跡1条、中・近世の溝跡1条、時期不明の掘立柱建物跡3棟、時期不明のピット群である。

上層にあたる基本層序Ⅲ層は、第2遺構面で検出した遺構の遺物包含層となっており、基本層序Ⅴ層以下の層順に遺物および文化層は認められなかった。

第1号住居跡（第6・9～22図、第1表）

D 4～6・E 4～6グリッドでみつかった竪穴住居跡である。東西方向に長い不整な楕円形をなし、長径8.70m、短径7.45m、深さ0.25mであった。主軸方位は、N-56°-Wであった。

基本層序Ⅳ層上面で確認できたものだが、第1遺構面の水田床土である基本層序Ⅲ層中の住居跡上部に対応する範囲に多量の土器が分布しており、現状よりさらに深さがあったことがわかる。

覆土　覆土は4層からなり、壁際に初期の流入土と壁面からの崩落土の混合土が堆積していた。床面上に水平堆積する3層は、多量の木炭と焼土、炭化した木材片を含み、竪穴部の壁面下部および床面の一部にも多量の焼土が付着するなど、火を受けた痕跡が明瞭にのこっていた。

床面　床面はほぼ平坦であったが、踏みつけ等による硬化面は検出できなかった。竪穴部はⅣ層を掘り抜き、Ⅴ層中に掘り方の底面があった。Ⅴ層は多量の風化した花崗岩を含むためか、掘り方底面は激しい凹凸をもっていた。竪穴部の床面は、掘り方底面に細砂質シルトの貼床を施して仕上げていた。

壁面　壁面は上部が崩壊したため、やや傾斜していた。壁溝は住居の西側で明瞭で、東側では

部分的な窪みとして捉えられた場所もあったが、基本的には認められなかった。壁溝の幅は、30cm前後、深さは７～８cm程度で、壁溝内には複数の小さなピットが認められた。ピットは径約10～20cm、深さ約10cm程度で、炭化物を含む有機質のシルトで埋まっていた。板材をはじめとした壁面の保護施設を留めるための杭材跡と思われる。

柱穴　柱穴は６本で、いずれも掘り込みは浅い。最も深いＰ３でも30cmほどで、多くは15cmで平均化していた。断面観察の結果、有機質の腐食土による明瞭な柱痕跡が把握できた。柱材は丸木材で、径約15～20cmと推定される。柱は、掘り方内の一方の壁面に立てかけるように置かれ、やや打ち込まれたのち埋設土で固定されたものである。なお、図中にスクリーントーンで示したのは平面的に確認した柱痕跡である。

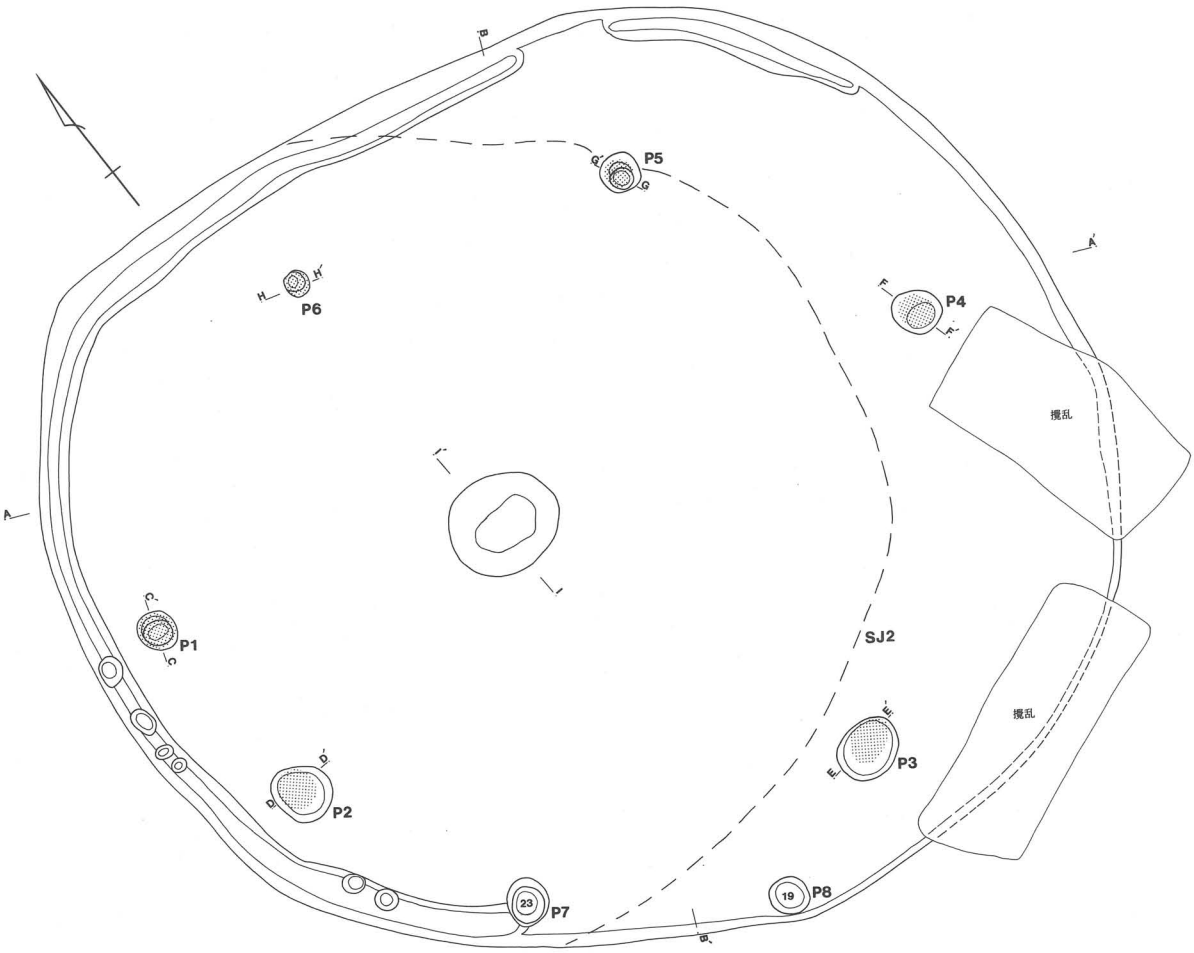
壁際に接して検出したＰ７とＰ８は、ともに有機質の暗灰色シルトで埋没していた。柱穴の位置関係は、径６ｍ程度の整った円を描くが、Ｐ７・Ｐ８はきわめて壁際によった位置に設けられており、竪穴部への入口が南向きとなる両者の間にあった可能性は高い。

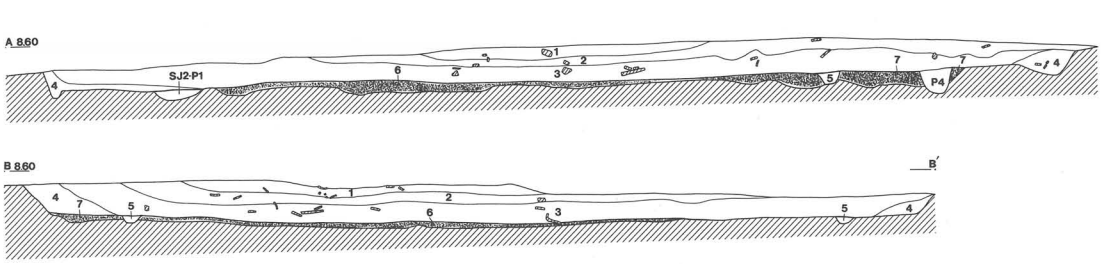
中央土坑　中央土坑、あるいは炉跡は、竪穴部中央よりやや西側へ寄った位置で検出できた。長径89cm、短径81cmの整った楕円形で、深さは30cmであった。壁面は緩やかで、周囲に被熱して焼土化した範囲が認められ、さらに西側に向かって長さ50cm、幅40cmの範囲には炭化物が集中する地点があった。覆土は１層からなり、炭化材、焼土粒を多く含んでいた。出土遺物は44の底部と54の蓋が得られたが、ともに欠損品で被熱の痕跡はなかった。遺物とともに花崗岩の礫４点が出土したが、これについても被熱の形跡はなかった。覆土を水洗選別した結果、７粒の炭化米とムササビの左下顎骨１点、鹿角片１点、他４点の骨片を検出した。骨片は、いずれも被熱しており、脱灰が進み白色から灰白色になっていた。

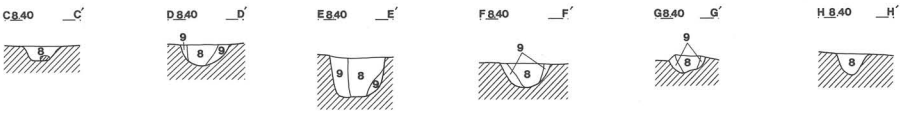
拡張・被熱　当住居跡は、第１号竪穴住居跡と第２号竪穴住居跡で共有される部分の壁溝がブロックを含まない自然堆積であるのに対し、第２号竪穴住居跡の壁溝がブロックを含む土で埋没していたことから、西側から南側にかけての竪穴部壁面を基準に、先行して建築されていた第２号竪穴住居跡を拡張したものと判断した。また、各柱穴の帰属は、位置および配列のほか、第１号住居跡に属する柱穴に比べ、第２号住居跡に属する柱穴の深さが著しく深いこと、上層に強く焼けた痕跡が認められ、柱穴内部にも焼土が入り込んでいたことから判断した。なお、第２号住居跡の柱穴にみられる強い被熱は、住居を拡張する際、上屋を焼却し第１号住居跡の焼却時に再度被熱したものと想定されるが、要因を特定する材料はない。

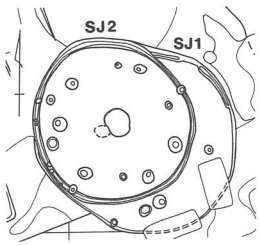
遺物出土状況　出土遺物は、覆土の全体から多量に得られたが、１～２層では土器細片と石器が径30cm程度の範囲に集中し単位をなす遺物群が主体であり、この単位が複数集まってより大きな単位となる出土状況が認められた。各単位は第12図に破線で囲んで示した。ａ・ｂ・ｄ・ｉ群は特徴的で、内部に複数の小単位が看取できる。これらの単位は住居跡埋没過程の一時期に外部からまとまって遺棄されたもの、あるいは流入したものと考えられ、遺棄・流入時の一括性を認めることはできるが、製作時および使用時についての一括性は保証できない。

３～４層では、強い被熱によって表面が剝離した完形の土器・石器が得られたが、１～２層に比べ個体数は多くなかった。３層上面に炭化材が落ち込んでいたことからみて、住





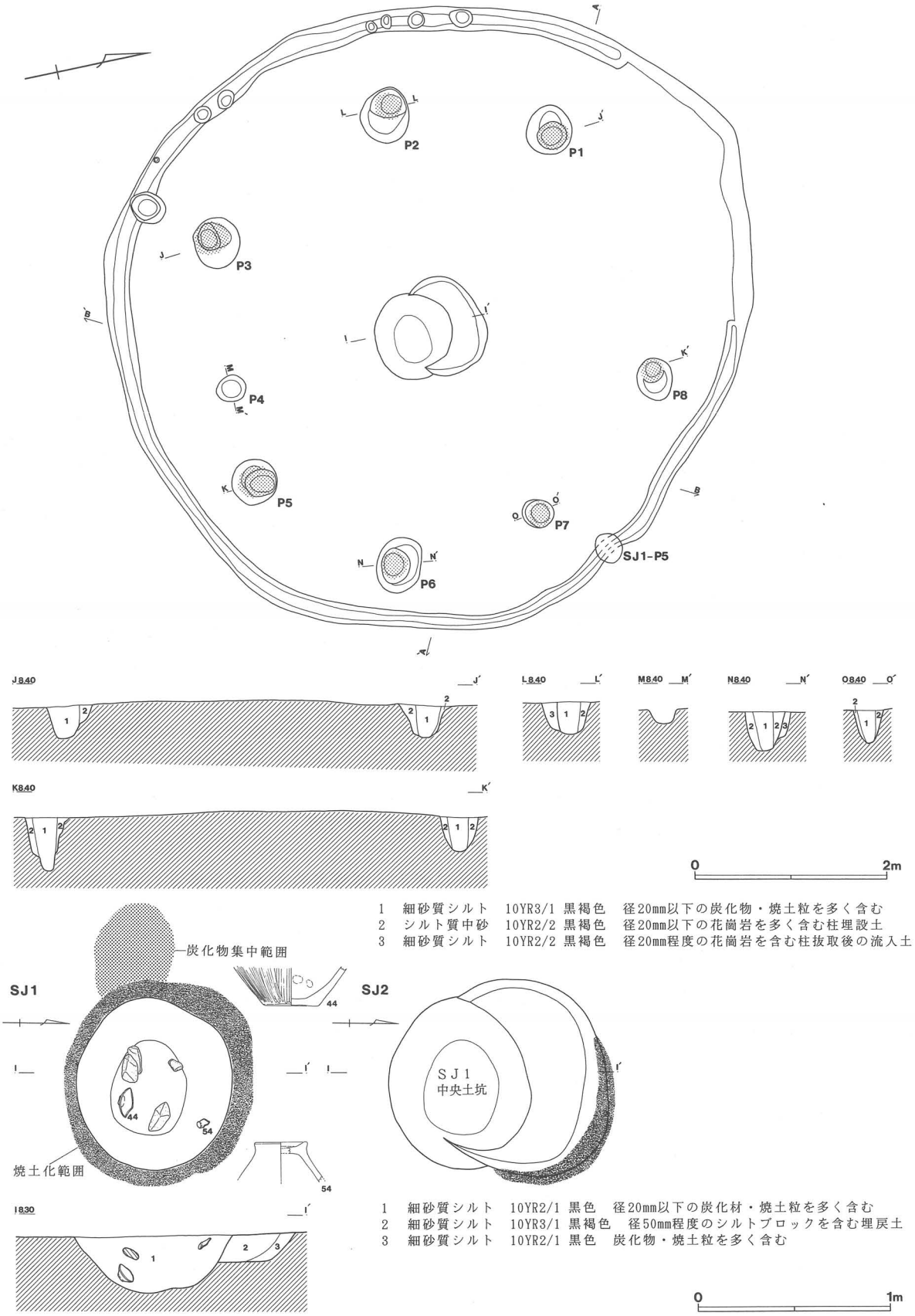




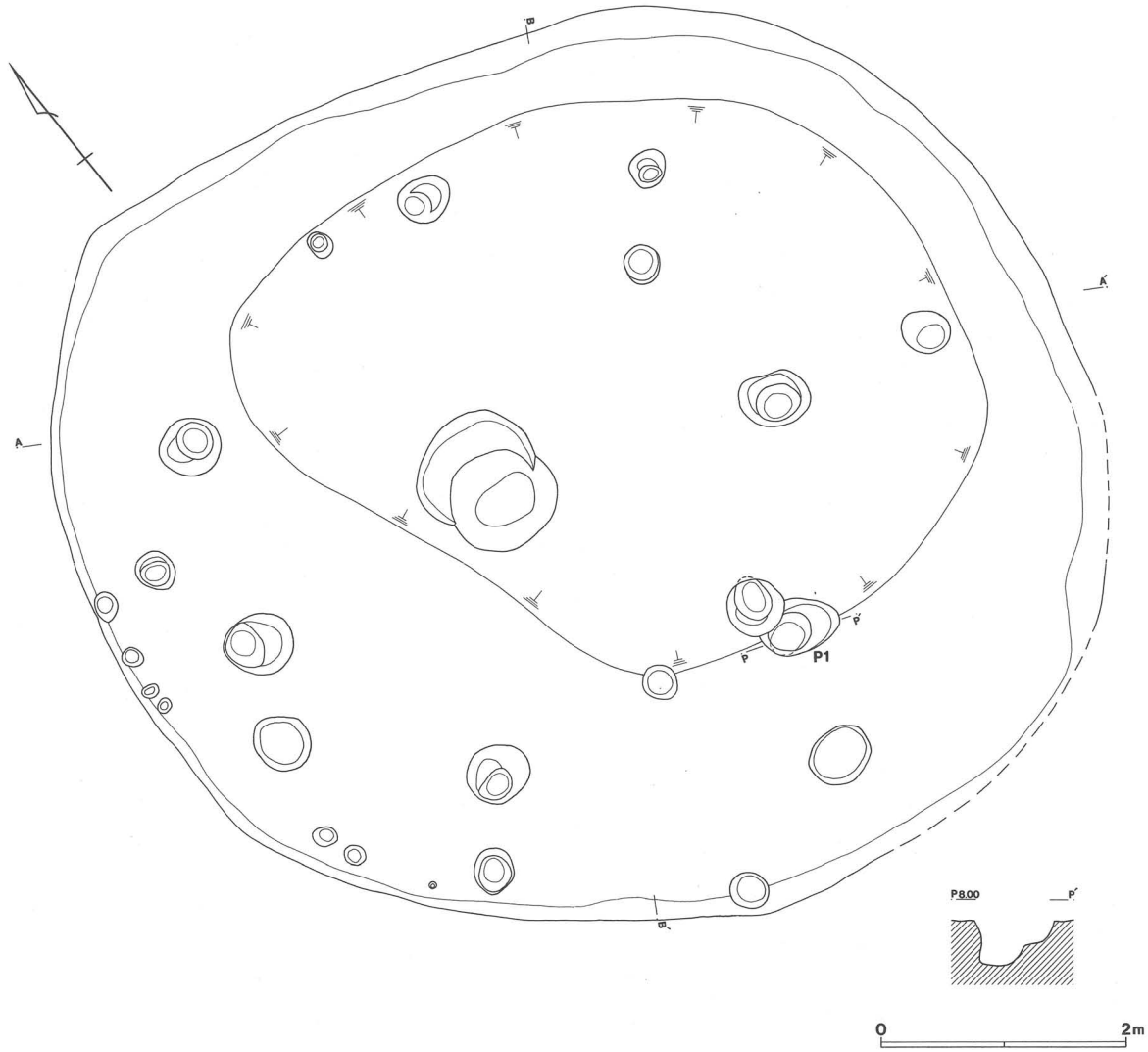
1　細砂質シルト　10YR2/2 黒褐色　大形の土器片・焼土粒を含む
2　細砂質シルト　10YR2/1 黒色　大形の土器片・焼土粒を多く含む
3　細砂質シルト　10YR1.7/1 黒色　炭化材・炭化物・焼土粒を多量に含む
4　細砂質シルト　10YR2/1 黒色　炭化物多量、土器片を少量含む
5　細砂質シルト　10YR2/1 黒色　炭化物多量に含む　埋戻し後、踏み固められた土、ＳＪ２壁溝
6　細砂質シルト　10YR2/1 黒色　径２mm以下の炭化物・焼土粒を多く含む貼床土
7　細砂質シルト　10YR2/2 黒褐色　径３mm以下の炭化物・焼土粒を含む貼床土
8　シルト質細砂　10YR3/1 黒褐色　径２mm以下の炭化物・焼土粒を含む柱腐食土
9　シルト質中砂　10YR3/2 黒褐色　径５mm以下の花崗岩を含む柱埋設土

0　2m

第９図　第１号住居跡



第10図　第２号住居跡および第１号・第２号住居跡中央土坑



第11回　第１号・第２号住居跡掘り方

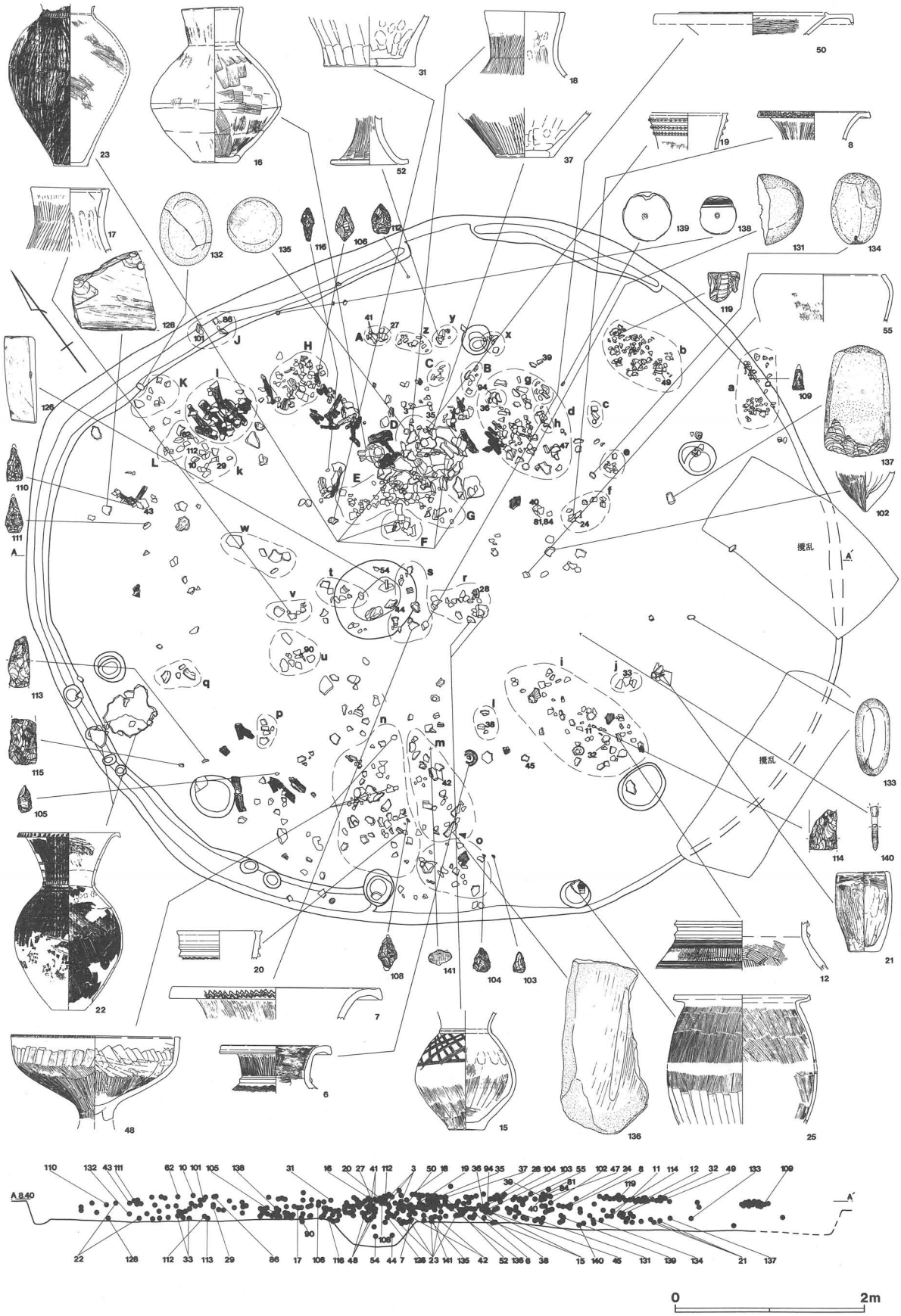
居跡遺棄後に残留していたか、焼却前に流入・遺棄されたものと考えられ、消極的な一括性を認めることができる。これらのうち、15・16・23など、特に床面上に残った遺物および焼却時に熱を受け破損した状態で出土したものと、132・138など、４層内から出土し壁上から住居内に流入したと思われるもの等については、住居跡廃絶時に遺留された可能性が高いものと考えられる。詳細については、Ⅴ．結語に記すこととし、ここでは事実記載のみにとどめたい。

出土遺物（第13～21図・第１表）

土器　図示した土器は、いずれも弥生時代中期に属するもので、異なる時代・時期の遺物はなかった。

１～３は有段口縁壺である。１は竹管文を縦位に施す。口唇部は面取りされ、口縁外面と同様の竹管文がめぐる。２は口唇部と口縁段部下の稜線上にハケ状工具によるキザミが施される。

７～15は壷形土器である。口縁部に櫛描波状文をいれるもの（７・８）、ハケ状工具に



第12図　第１号住居跡遺物出土状況

よるキザミをいれるもの（10・11）、口縁部上面に円形浮文と扇形文を交互に配置し、外面に円形浮文を１段めぐらせ、３個１単位の円形浮文を上段に付加するもの（４）、口縁部上面に扇形文と不連続な簾状文を各１段めぐらせ、口縁部外面には４個３段、計12個１単位の円形浮文を４単位めぐらすもの（５）など加飾の傾向がある。頚部には１～３段の断面三角形突帯・指頭圧痕突帯がつき、棒状浮文を加えるもの（13）もみられる。胴部は主にハケ状工具でタテナデされた後、櫛描直線文で加飾する。調整は基本的にハケ状工具によるナデによって仕上げられている。15は、体部上半に上部を突帯、下部を櫛描直線文で区画された斜格子文を施し、体部下半をハケ状工具によってナデつけて仕上げている。

16～20は短頚の壷形土器である。頚部をハケ状工具によってナデつけ、口唇部を面取りし、口唇内面端部が内側に尖ることが共通する。体部の調整および仕上げは、ハケ状工具によるナデ後、ヘラ状工具によるミガキが施されるもの（16）と、ハケ状工具によるナデによるものとがある。口縁部下部にハケ状工具によるキザミを施した断面三角形突帯をつけるもの（19）がある。

21は、外面をハケ状工具によるナデの後、丁寧に磨いており、コップ形の鉢形土器と考えるのがよいだろう。

22・23は大形の壷形土器である。22は第１号住居跡西側の壁付近で西側に倒れた状態でみつかった。遺構面上部を削平して作られた近世の水田によって、上方に膨れた半分以上が失われていた。頚部が長く大きく開く広口壷であるが、長大化の指向は極端ではない。口縁外面には右上から左方向にやや流れる櫛描半円形文が施され、頚部および体部上半は、ハケ状工具によるタテナデ後、３本を１単位とする櫛描直線文がおよそ３～５㎝間隔で施されている。頚部には指頭圧痕突帯が１条めぐる。明瞭な爪跡を上下２段に残すことから、２回に渡るつまみあげの工程が解かる。つまみ上げの順序は、突帯上部を先に下部を後に行っている。体部下半は、風化のため確認しづらいが、ヘラ状工具によるミガキが施されている。内面は、粗いハケ状工具によってナデつけられ、頚部下には指頭圧痕が認められる。

23は第１号住居跡中央土坑北側に、焼却による熱の影響で破細された状態でみつかった。22と同様に、竪穴住居跡上部に達していた部分が、近世の水田耕作によって失われていた。口縁部を欠損するが、複合口縁であった可能性が高い。頚部には爪跡ののこる指頭圧痕突帯が巡り、体部全体にハケ状工具によるナデつけが行われている。内面は被熱によって著しく剝離しているが、粗いハケ状工具によるナデの痕跡がみえる。

25～29は甕形土器である。緩い球形の胴部に、短く水平に開く口縁がつく。口唇部はつまみ上げによって直立するものと面取りされるものがある。後者にはキザミがほどこされる場合がある（26）。胴部は上半をハケ状工具によるナデ、下半をハケ状工具の痕跡をヘラ状工具によるケズリで消し、仕上げている。

底部付近は、外面をハケ状工具によってタテナデあるいはヨコナデされるもの、ヘラ状工具によってミガキ調整されるもの、ヘラ状工具によってケズリ調整されるものがある。内面は、指頭圧痕や指ナデの痕跡を明瞭に残す場合があり、ヘラ状工具によるナデもしくはハケ状工具によるナデによって仕上げられている。

48～51・56は高杯である。48は、ほぼ直立する杯部上半をもち、口縁部を面取りし、外面端部にキザミを施す。体部外面は板ナデの後、ヘラ状工具によるミガキ、内面はヘラ状工具もしくはナメシ皮、板などによるナデ後、ヘラ状工具によるミガキを施す。円盤充塡法によって作られている。56も同様の高杯と思われる。

52・53は高杯脚である。52はハケ状工具によるナデで調整されている。53は中実の脚部をもつ高杯でやや古い様相を備えているが、風化のため調整等は不明である。

49～51はいわゆる「水平口縁」の木製品模倣型高杯であり、ヘラ状工具によるミガキを仕上げ調整に採用している。51は口縁外面に3個1単位の円形浮文が4単位めぐり、矢羽状をなすキザミが施されている。

54は蓋と考えた。

55は鉢形土器と思われるが、極めて強く被熱しており、調整等は不明瞭である。

57～101は復元できなかった土器片のうち、文様をもつ等、図化可能だったものである。文様構成と機種から1～9群に分けることができる。このうち、第1群～第2群は口縁部形態による分類である。

第1群は壷形土器口縁部で、外反する頸部が水平面となり、ここから下方に口縁部が垂下する形態のものである。57・58は口縁外面と口縁上面に円形浮文がつく。58は上面にも櫛描波状文が認められる。59はこれに準ずるが、円形浮文は認められなかった。61は水平面がほとんどなく、口縁外面に矢羽状のキザミが施される。64は水平面から直角に垂下する口縁外面がつく。垂下部は丁寧に面取りされ、左上から右下、右上から左下にヘラ描きする「V」字形の刺突が2段にめぐる。

第2群は折り返し口縁をもつ壷形土器である。63は外面および頸部上部に2段の櫛描波状文がめぐる。62は折り返し口縁の下位に櫛描波状文がはいる。

第3群は凹線文を施す土器群である。今回の調査では、風化した細片6点を得たに過ぎず、図示できたものは60のみである。凹線文上にハケ状工具によるキザミ（またはタテナデか）が施され、口唇部上面には3個1単位の円形浮文がつく。

第4群は65～78の斜格子文をもつ壷形土器である。この土器群は、3つのグループにわけられる。第1は半截竹管によって施文されるグループで、65～69が該当する。文様帯下端は櫛描直線文によって区画されるが、69のように斜格子文上下端を櫛描直線文で区画し、上部に櫛描波状文帯がはいるものもある。小形の壷形土器では1帯、大形のものでは複数帯の文様帯が入るようである。第2グループは櫛描による多条直線によって斜格子文を描くものであるが、ここではこのうち3条の櫛描沈線によるもの（70～73・78）に限定する。基本的な文様構成は第1グループと同じであるが、71では斜格子文帯上端を区画する櫛描直線文下に竹管による円形刺突文が施されている。78は斜格子文帯上部に櫛描直線文帯をもつ。第3のグループは74～77にみられる多条の櫛描直線文による斜格子文をもつもので、第1号住居跡出土土器に限れば6条1単位のものがある。

第5群は櫛描直線文を複数帯、いわゆる複帯として施す壷形土器の一群で、79～91が該当する。第5群についても3つのグループに分けることができる。第1グループは79～82・84～88で、1～3㎝間隔で横位の櫛描直線文をめぐらせる。櫛描直線文間にはハケ状

工具によるタテナデが明瞭に認められるのが一般的で、タテハケをナデ消しているものやミガキを施すものは認められなかった。第2グループは89があたる。櫛描直線文間に扇形文をめぐらすものである。第3グループは円形浮文を付加するもので、変形壷形土器の肩部等と考えられる。

第6群は、壷形土器体部上半に簾状文が施されるもので、92に限られる。住居跡内全体の出土遺物中にも簾状文はほとんどみられなかった。

第7群は、櫛描波状文を体部上半にめぐらすもので、93は2帯の文様帯をもつ。

第8群は、体部上半に櫛描波状文と櫛描直線文を交互にめぐらす複帯の文様帯をもつ壷形土器の一群で、94～100がこれにあたる。94は頸部に指頭圧痕突帯がつく。95は櫛描直線文に区画された2帯の櫛描波状文帯下に円形浮文を付加し、さらに下方に多条の斜格子文帯がある。第4群第3グループに属するとする方がよいかもしれない。

第9群はヘラ状工具による多条の沈線をもつもので、83と101が該当する。83は体部上半に多条の沈線文帯を有するもので、101は頸部のくびれに3条の沈線が疎らにはいる。ともに弥生時代前期に属するものと考えられる。出土層位からみて流入したものであろう。

石器

石器には石鏃11点、打製石剣3点、大型石包丁1点・太型蛤刃石斧1点などをはじめ、石核・剥片が認められ、遺跡内の住居跡付近で石器の加工が行われたことを示すものと思われる。

石鏃は11点出土したが、すべてサヌカイト製である。形態から5類に分けることができる。1類は無茎凸基式で、横長の剥片に刃部をつけたものである（103～105）。2類は無茎凸基式で、菱形をなす（106～108）。3類は無茎平基式で、縦長の三角形をなし、基部の両端の角を落としている（111）。4類は凹基式である。全体に丸みを帯びた形状をなす（112）。5類は有茎凸基式で、茎の長いものである（116）。

打製石剣は3点出土した。サヌカイト製である。いずれも欠損しており使用にたえるものではない。113と115は近接して採取したものであるが、接合関係はなかった。

117はサヌカイト製スクレイパーである。

118・119はサヌカイト製小形石核である。

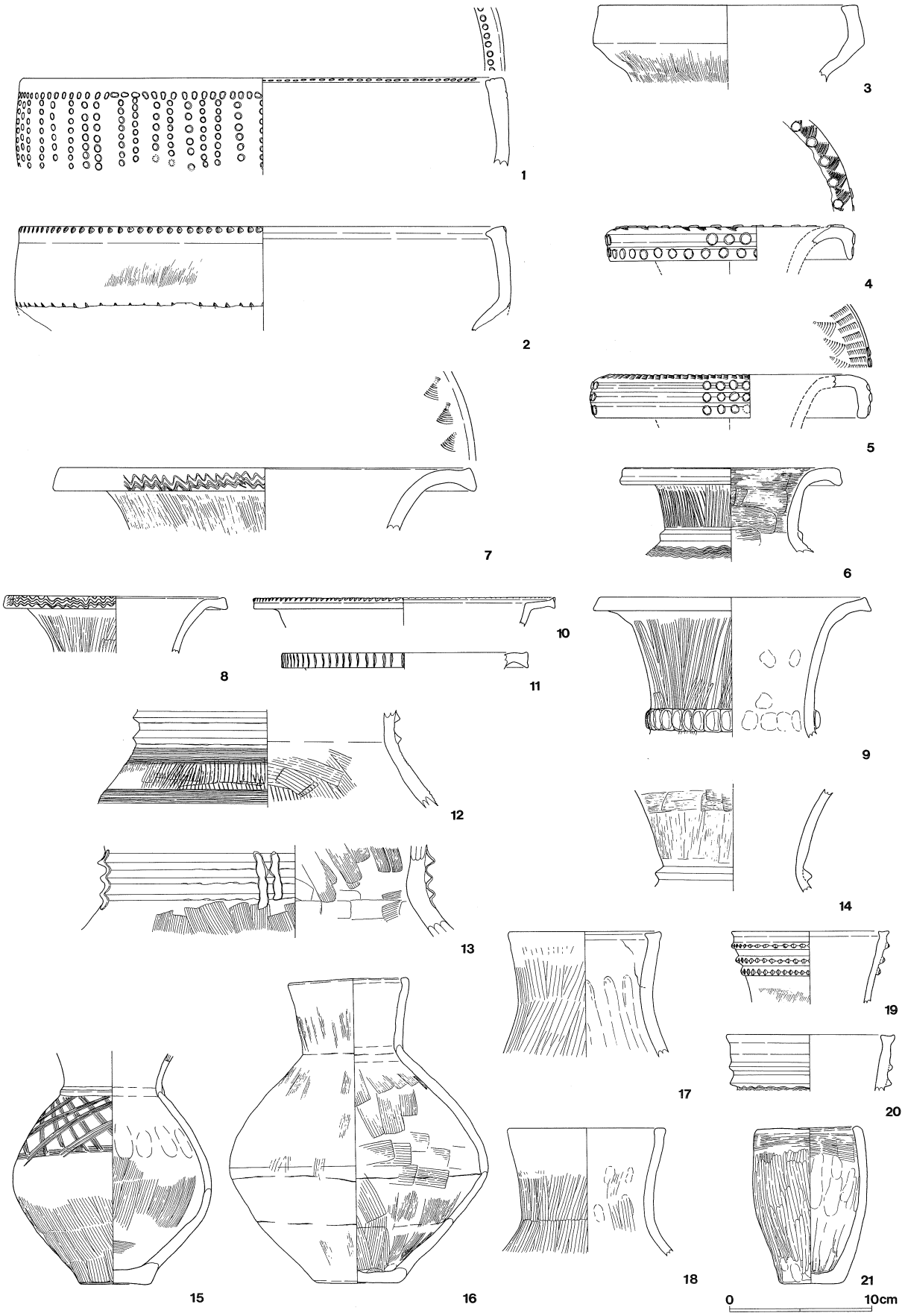
剥片は多量に出土したが、特徴的なものに限って図示した。120～124（122を除く）は横長の剥片で打点がある。122は縦長の剥片で打点がない。125は縦長の剥片で打点がある。

127は粘盤岩製石鑿である。小形の偏平片刃石斧を再利用したものと思われる。全面に縦位の研磨痕がある。

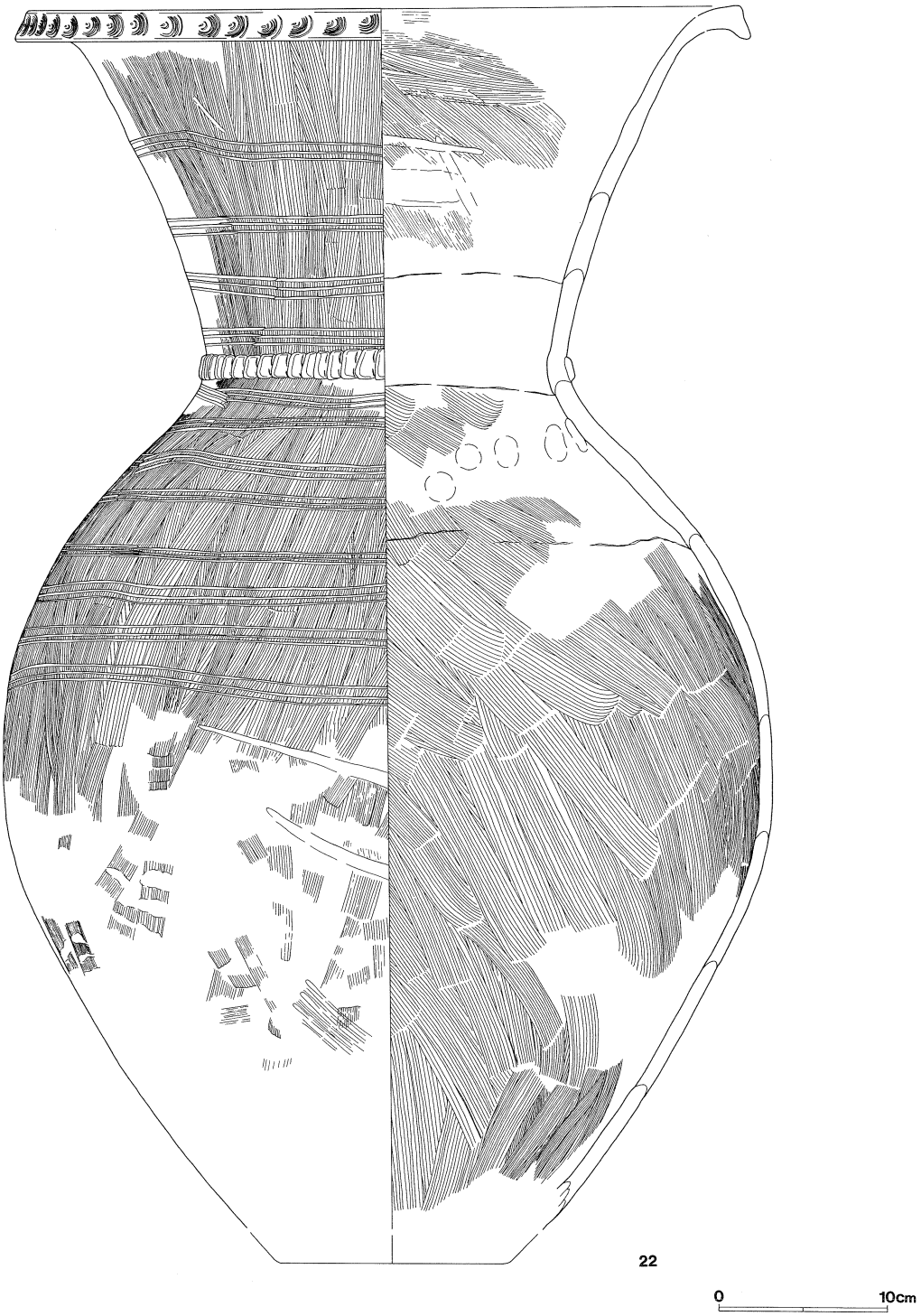
128～130は石包丁である。128は粘盤岩製と思われる大形石包丁で被熱しており、刃部付近には明瞭な光沢が認められる。129は石墨片岩製である。130は粘盤岩製である。石包丁の刃部はいずれも直刃である。

136は石皿、131～135は磨石、敲石である。食生活関連の石器である可能性が高いが、136の石皿は1層内の出土であり、磨石・敲石との関係を求めることはできない。131・134には明瞭な被熱の痕跡がある。131は形状から投弾の可能性もあるが、床面から破損しての単独の出土であり、支持できない。

137の太型蛤刃石斧は、本来磨製品であるが、刃部には大きな剥離痕が認められる。使



第13図　第１号住居跡出土遺物(1)



第14図　第１号住居跡出土遺物(2)

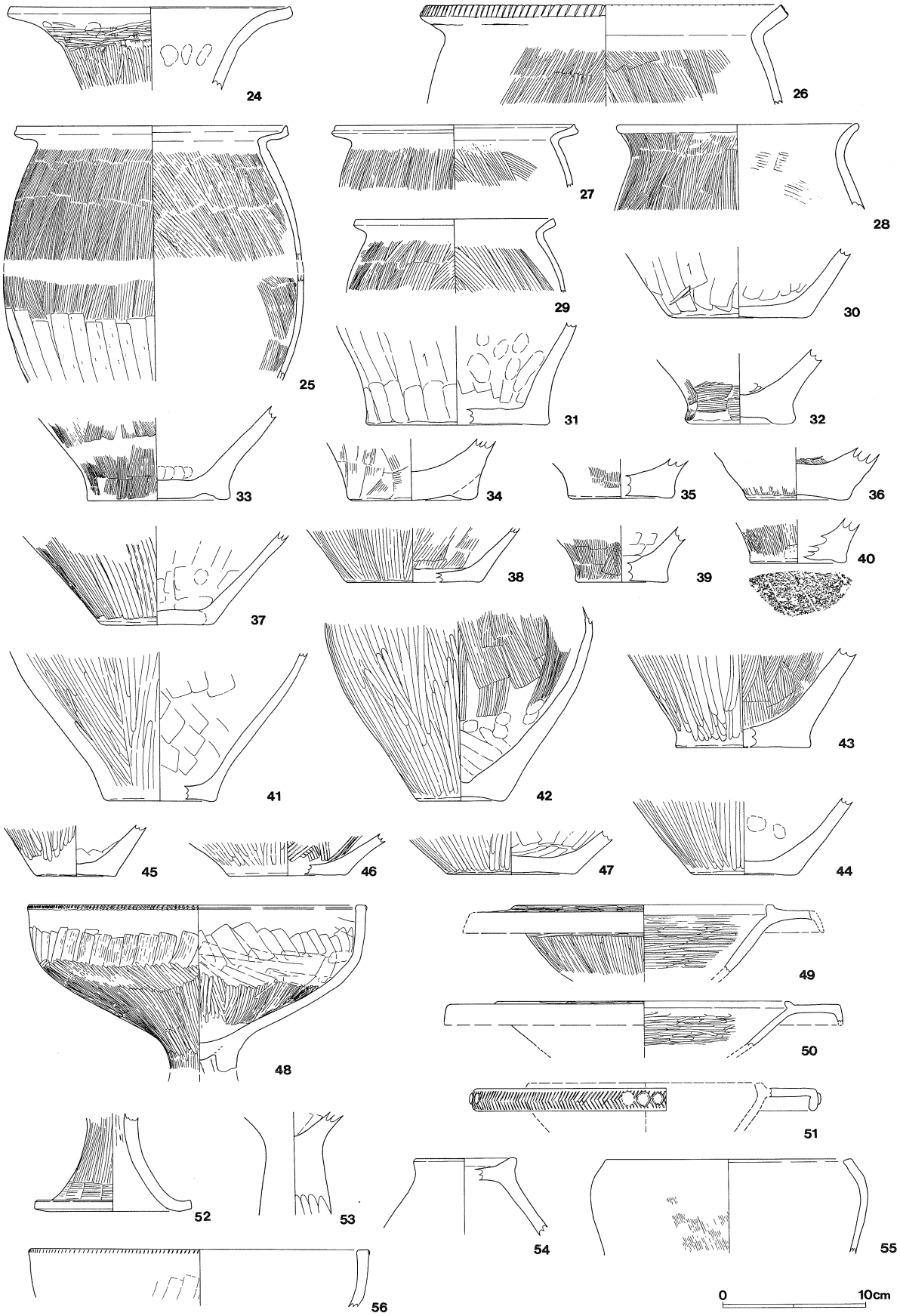
用痕、あるいは刃部欠損後の再加工の可能性もある。表面から両側面にかけて装着による磨耗がみられる。刃部付近には擦痕がある。上部は敲打による成形痕がみられる。

また、鉄製品２点（140・141）と鉄製利器を研磨するのに用いたと思われる微細な幅の傷をもつ砥石126が得られており、注目できる。鉄製品については、140が木質の付着した茎部をもち、141裏面にも木質が付着しており目釘状の突起が認められるが、Ｘ線透過による撮影結果を経ても、用途に関する情報は得られなかった。

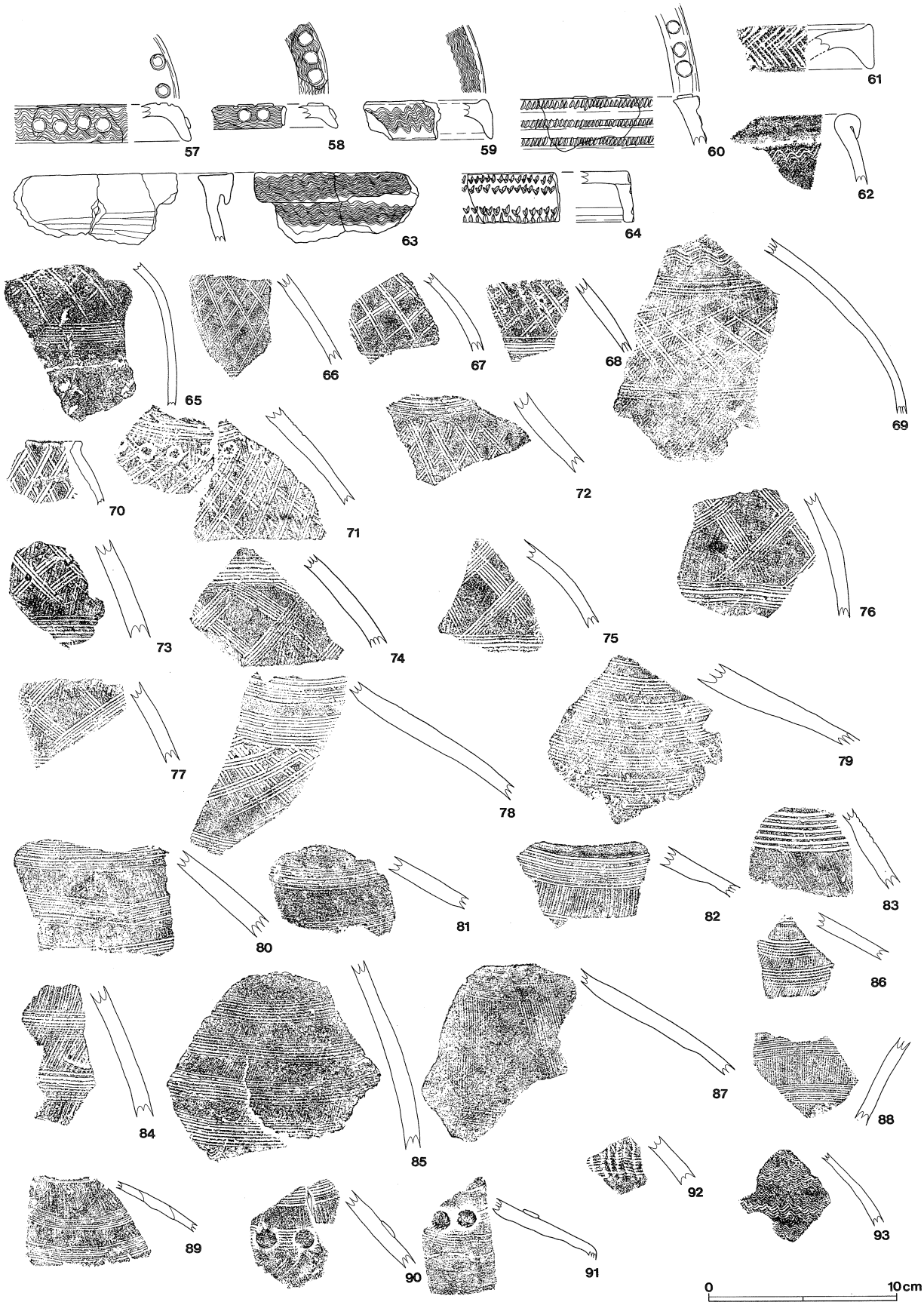
第15図　第１号住居跡出土遺物(3)

138・139は有孔円盤である。土器の破片を加工したもので、139は被熱のため表面が剝離している。

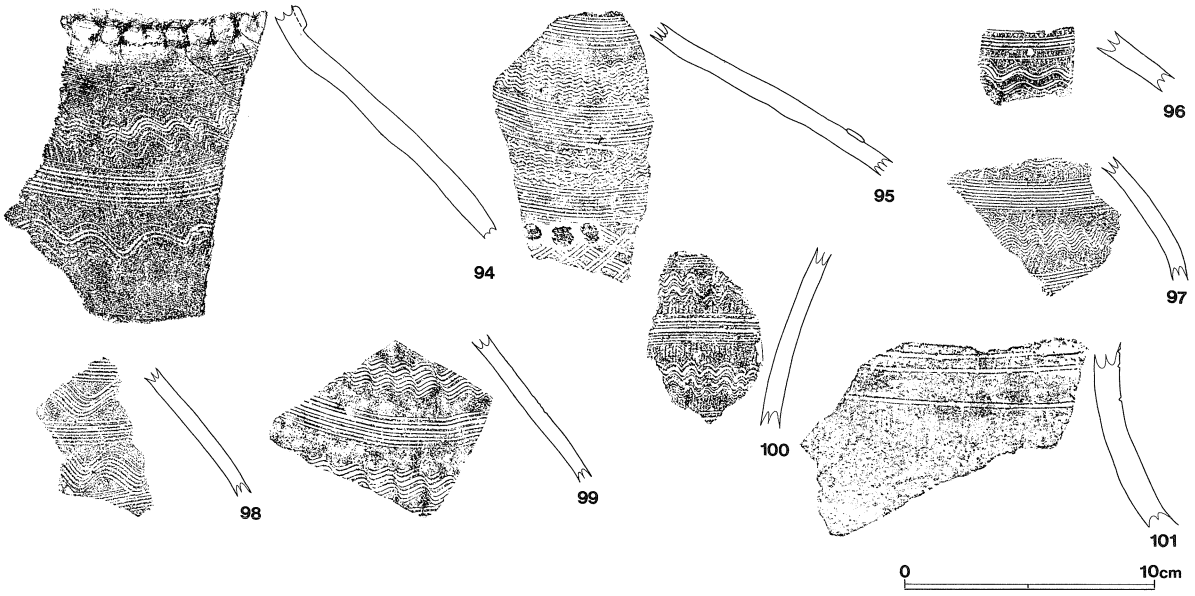
なお、出土遺物の詳細については第１表に掲げた。



第16図　第１号住居跡出土遺物(4)



第17図　第１号住居跡出土遺物(5)



第18図　第１号住居跡出土遺物(6)

直上層出土遺物（第22図・第２表）

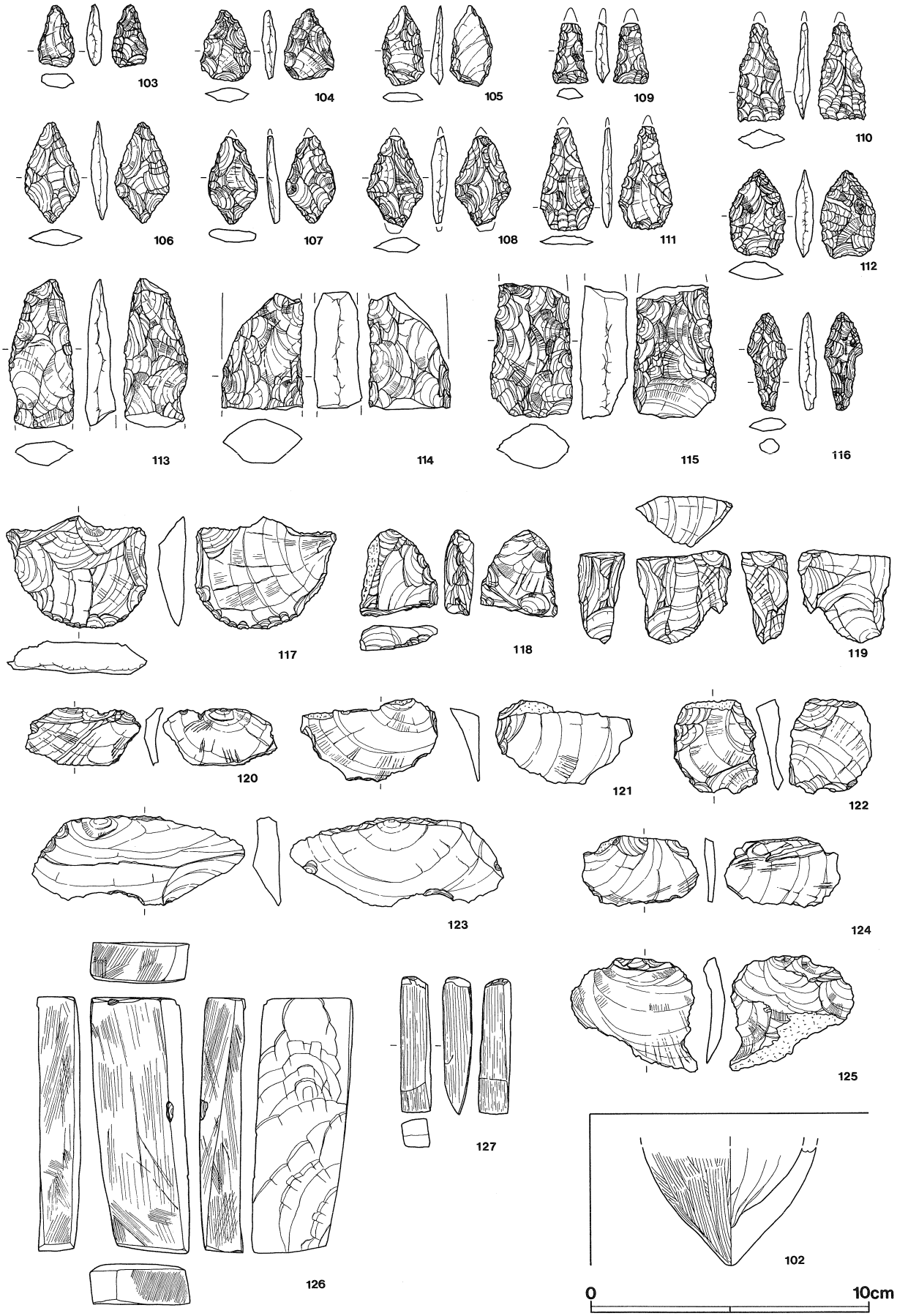
当住居跡は上部を近世以後の水田耕作によって破壊されていたが、床土となっていた基本層序Ⅲ層中には、当住居跡上部に対応する楕円形の範囲に限って濃密な遺物分布が認められた。これらは当住居跡覆土１層内もしくはこれより上層の覆土に所属するものと考えられる。土器は細片がほとんどで、図示できるものはなかったが、石器には完形品も認められた。

第22図の１～12は石鏃である。１・２は小形の無茎凹基式である。２は非常に小形で、チャート製であることや調査地付近に縄文時代早期の遺物散布が認められることから、縄文時代の所産である可能性もある。３～５・９は無茎平基式で、三角形状をなす縦長の剥片に刃部の調整を加えたものである。９は大形品で、3.6ｇである。６～８は長三角形をなすもので、無茎凹基式である。10は凸基式で柳葉形をなす。11は無茎凸基式で、縦長剥片を用いている。12は無茎凸基式で、肉厚の横長剥片を丁寧に調整している。最も大形の石鏃で重量は7.2ｇである。

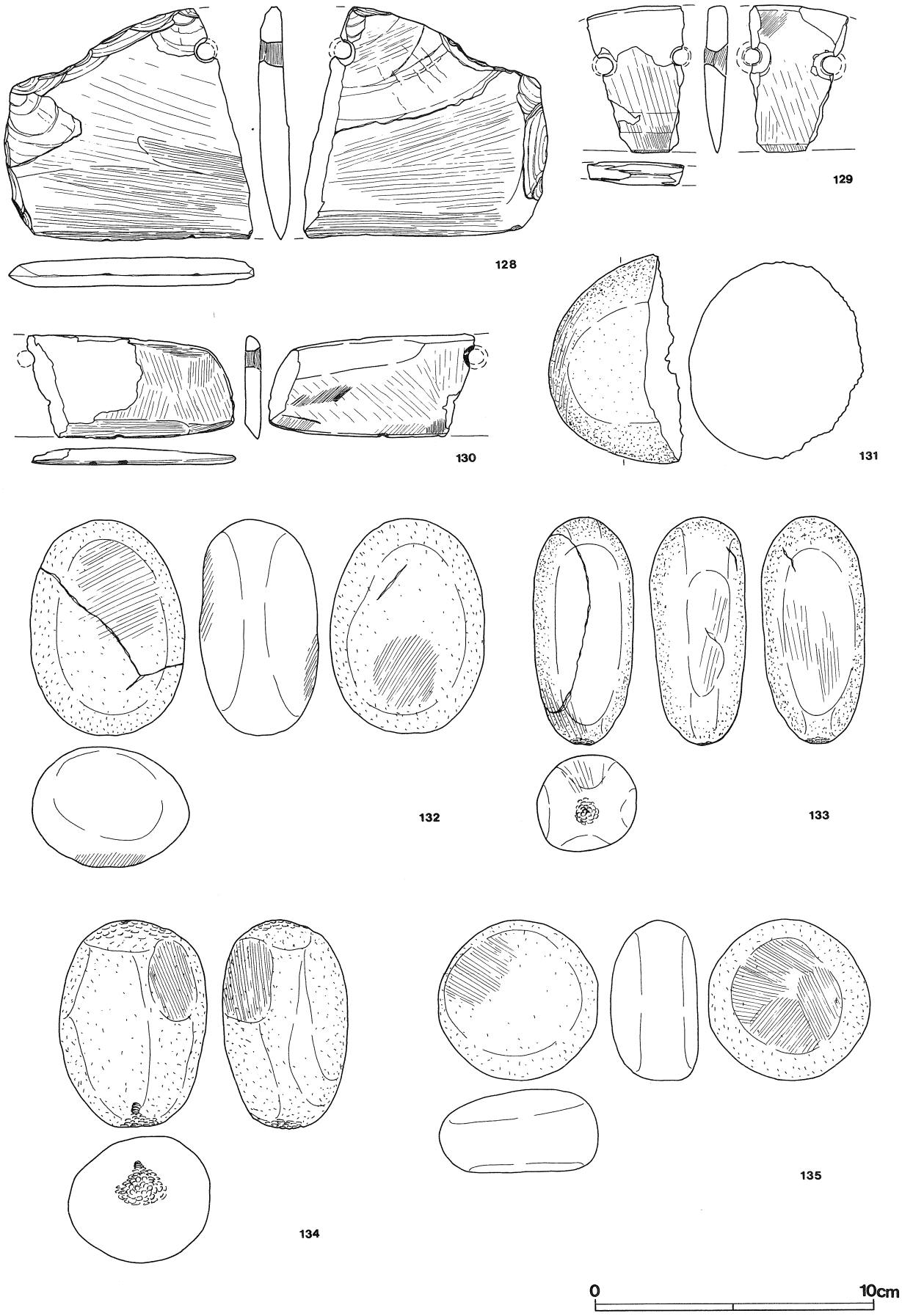
13～16は石錐である。肉厚の縦長剥片を調整する12・13と、三角形状の剥片の一端を利用する15・16がある。

剥片には横長のものと縦長のものがあり、縦長のものは背面に複数の剥離痕を有するものが多い。横長剥片の剥離によって石核を整形し、縦長剥片を製品用に剥離していたことが窺われる。

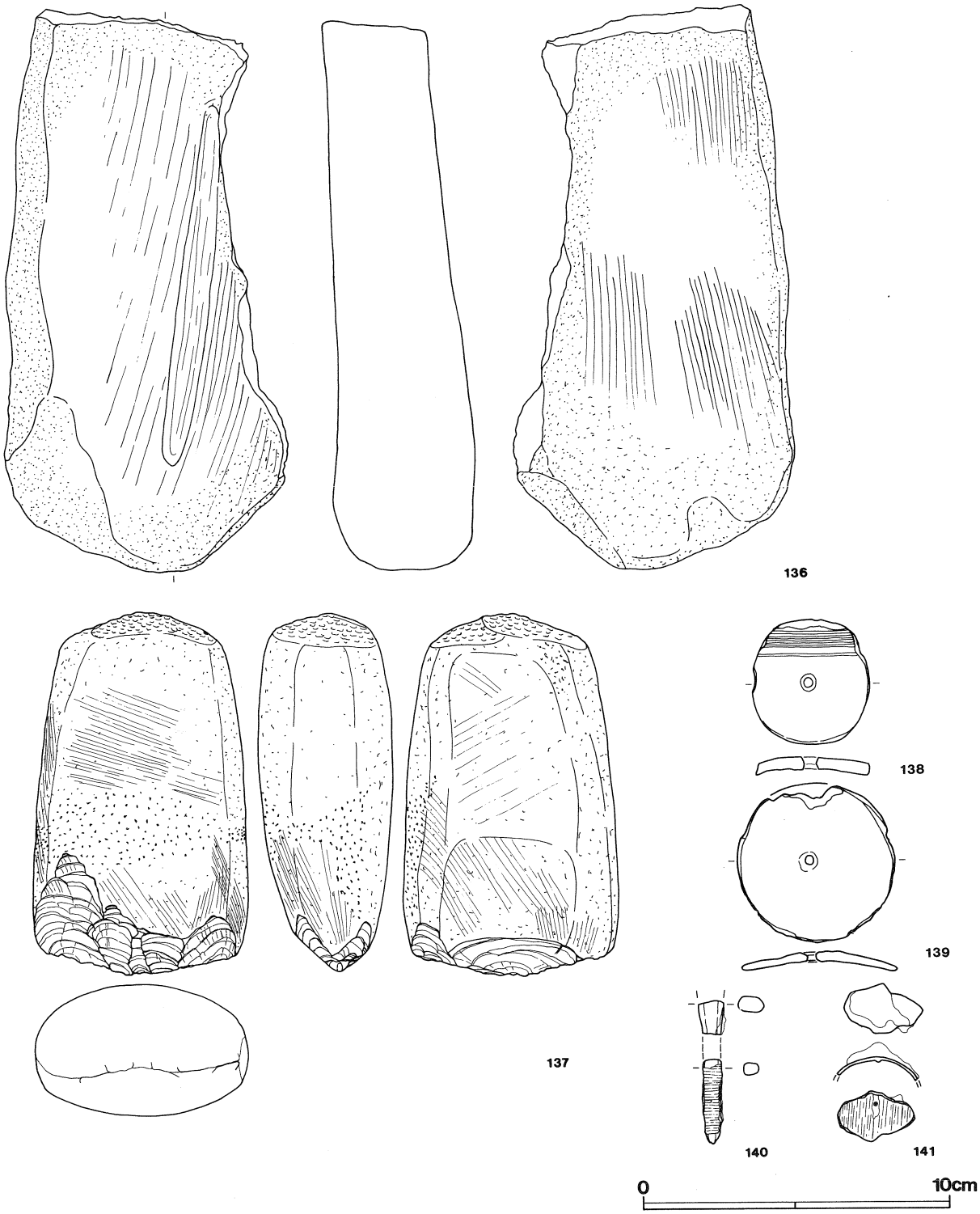
他に30は鉄釘、31は砥石であるが、中世以後のものであろう。



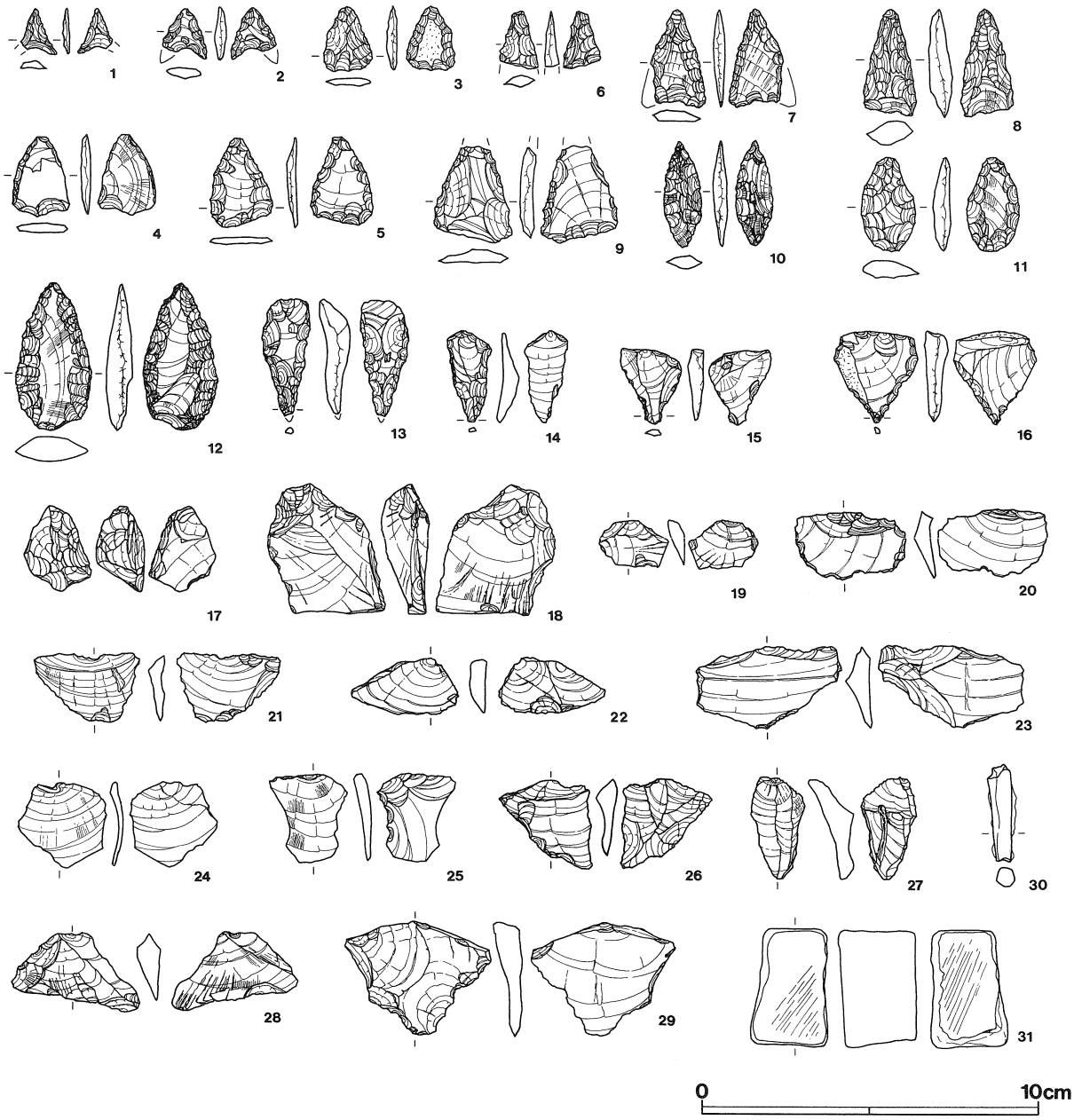
第19図　第１号住居跡出土遺物(7)



第20図　第１号住居跡出土遺物(8)



第21図　第１号住居跡出土遺物(9)



第22図　第１号住居跡直上包含層出土遺物

第１表（１）　第１号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	器高	口径	最大径	底径	内面調整	外面調整	残存率	胎土	色調	備考
1	広口壺（有段口縁）	(6.4)	(34.0)			ナデ	ナデ	８％	石英・長石	明燈褐色	
2	広口壺（有段口縁）	(7.5)	(34.2)			不明	ハケのちナデ	14％	石英・長石・赤色粒	明黄燈色	
3	広口壺（有段口縁）	(5.5)	(16.2)			ナデ	頚部縦方向ハケ	10％	石英・長石	灰黄褐色	
4	広口壺	(2.4)		口径(17.6)		ナデ	ナデ	20％	石英・長石・雲母	褐灰色	
5	広口壺	(3.1)	(20.0)				ナデ	14％	石英・長石・雲母・赤色粒	淡灰褐色	
6	広口壺	(6.5)	(16.0)			横方向微細なハケ→ナデ	縦方向ハケ＋ナデ	65％	石英・長石・雲母	にぶい黄燈色	
7	広口壺	(4.5)	(29.0)			ナデ	ハケのちナデ	11％	長石・石英	暗燈灰色	
8	広口壺	(4.0)	(15.6)			ナデ	縦方向ハケ＋ナデ	12％	石英・長石・雲母	暗灰褐色	
9	広口壺	(10.1)	(19.0)			指頭圧痕＋ナデ	縦方向ハケ	30％	石英・長石	暗灰褐色	
10	広口壺	(2.1)	(21.4)			ナデ(磨耗著しい)	ナデ(磨耗著しい)	10％	石英・長石・赤色粒	淡燈黄色	
11	壺	(1.2)	(16.6)					５％	石英・長石	灰黄褐色	
12	壺	(7.0)		頚部径(18.2)		ハケメ	ハケメ	15％	石英・長石	灰黄褐色	
13	壺	(6.5)		頚部径(22.6)		ハケ・ナデ	縦方向ハケ	20％	石英・長石	にぶい黄燈色	
14	壺			頚部径(10.0)		ナデ	縦方向ハケ＋横方向ハケ	35％	石英・長石	浅黄燈色	
15	壺	(17.5)		14.1	5.0	ハケメ→ナデ	縦方向ハケメ→ミガキ	85％	石英・長石・赤色粒	赤燈色	二次的加熱
16	短頚壷	21.8	8.7	18.4	5.8	ハケ	ハケ→ミガキ(磨耗著しい)	100％	石英・長石	灰黄褐色	
17	短頚壷	(9.0)	(10.8)			縦方向指によるナデ	縦方向ハケ＋口縁部ナデ	32％	石英・長石	暗灰褐色	
18	短頚壷	(5.1)	(11.2)			ナデ	ハケ	15％	石英・長石	にぶい黄燈色	
19	短頚壺	(9.2)	(10.0)			縦方向ハケのちナデ	縦方向ハケのち口縁端部ナデ	21％	石英・長石	淡灰燈色	
20	短頚壷	(4.0)	(10.0)			ナデ	ナデ	17％	石英・長石・雲母	淡燈灰色	
21	小形鉢？	11.2	7.7	8.0	4.3	縦方向ナデ・口縁部横方向ハケ・底部しぼり痕	縦方向ハケ→ヘラミガキ・底部指頭圧痕	100％	石英・黒色粒	にぶい黄燈色	二次的被熱
22	広口壺	(72.5)	(43.2)	(45.2)		ハケ・ナデ・指頭圧痕	ハケ・下半部に部分的にミガキ	40％	石英・長石	灰白色	
23	壺	(67.8)		(50.7)	(14.5)	ハケ	ハケ	60％	石英・長石・雲母	燈色	
24	壺	(5.9)	(19.6)			指頭圧痕→ナデ	縦方向ケズリ→縦方向ミガキ→横方向ミガキ	18％	石英・長石・雲母	暗灰褐色	
25	甕	(18.3)	(18.8)	(21.0)		縦方向ハケメ	縦方向ハケメ→下半部ヘラケズリ	15％	石英・長石	暗黄燈色	図上復元
26	甕	(7.1)	(25.0)			縦方向ハケ	縦方向ハケ	10％	２㎜以下の石英・長石	淡灰燈色	
27	甕	(4.3)	(16.8)			縦方向ハケ・ナデ	縦方向ハケ・ナデ	10％	石英・長石・雲母・赤色粒	明燈褐色	
28	甕	(6.1)	(17.0)			ハケのちナデ	縦方向ハケ	16％	石英・長石	暗燈褐色	
29	甕	(4.2)	(14.0)			縦方向ハケ	縦方向ハケ	20％	石英・長石・雲母	暗黄燈色	体部煤付着
30	甕？底部	(4.9)			10.0	ナデ・指頭圧痕	縦方向ケズリ	60％	石英・長石・雲母	にぶい黄褐色	
31	甕？底部	(7.0)			(12.8)	ナデ	縦方向ケズリ	40％	石英・長石・雲母	暗燈黄色	
32	甕？底部	(5.3)			9.4	ナデ	横方向ハケ	80％	石英・長石・赤色粒	赤褐色	
33	甕？底部	(6.6)			(9.6)	部分的に指押さえ	縦方向ハケ	100％	石英・長石・赤色粒	明燈色	
34	甕？底部	(4.3)			9.0		縦方向ハケ	80％	石英・長石・雲母	明黄褐色	
35	甕？底部	(2.6)			(7.0)	ナデ	縦方向ハケのちナデ	45％	石英・長石・赤色粒	燈色	
36	甕？底部	(3.7)			7.8	ハケ(磨耗著しい)	縦方向ハケ	100％	石英・長石	灰白色	
37	甕？底部	(6.5)			(8.2)	ナデ	縦方向ハケ	40％	石英・長石	浅灰燈色	
38	壺？底部	(3.8)			(9.4)	縦方向ハケ	縦方向ハケ	25％	石英・長石・雲母	灰黄褐色	
39	甕？底部	(3.9)			6.3	ナデ・指頭圧痕	縦方向ハケ	40％	石英・長石・雲母・赤色粒・輝石	にぶい黄燈色	
40	甕？底部	(3.2)			(6.8)	ナデ	縦方向ハケメ＋横方向ハケ	40％	石英・長石・赤色粒	浅黄燈色	底部木葉文
41	壺？底部	(10.5)			(7.6)	ナデ	縦方向ミガキ	25％	石英・長石・雲母	にぶい褐色	
42	壺？底部	(11.7)		(18.8)	6.0	ハケ・指押さえ・ナデ	縦方向ミガキ	40％	石英・長石・雲母	にぶい黄褐色	
43	壺？底部	(6.5)			(9.5)	縦方向ハケ	縦方向ミガキ	25％	石英・長石・雲母・輝石	にぶい黄燈色	
44	壺？底部	(5.2)			7.6	ナデ	縦方向ミガキ	30％	石英・長石・雲母	燈色	
45	壺？底部	(3.6)			(5.6)	指によるナデ	縦方向ミガキ	70％	石英・長石・雲母・輝石・赤色粒	にぶい燈色	
46	壺？底部	(2.4)			(9.0)	ハケ	縦方向ミガキ	20％	石英・長石・雲母	褐色	
47	壺？底部	(3.1)			9.0	ナデ	縦方向ミガキ	40％	石英・長石・雲母	明赤褐色	

No.	器種	器高	口径	最大径	底径	内面調整	外面調整	残存率	胎土	色調	備考
48	高杯	(11.7)	(23.9)			ミガキ＋ナデ	ミガキ＋ナデ	80%	石英・長石	にぶい黄燈色	脚部折りとりか？円盤充塡技法
49	高杯（木器模倣型）	(4.8)	(17.4)	水平口縁径(24以上)		横方向ミガキ＋ナデ	縦方向ミガキ＋横方向ミガキ	10%	石英・長石・赤色粒	淡黄褐色	
50	高杯（木器模倣型）	(3.2)	(20.0)	水平口縁径(28.0)		横方向ミガキ＋ナデ	磨耗著しく不明	30%	長石・石英・雲母・赤色粒	明黄褐色	
51	高杯（木器模倣型）	(1.6)		水平口縁径(24.2)		ヘラミガキ		9 %	石英・長石	暗燈褐色	
52	高杯脚部	(6.9)			(11.0)	ナデ・しぼり痕	縦方向ミガキ＋横方向ハケ(磨耗著しい)	35%	長石・石英・雲母	にぶい燈色	
53	高杯脚柱部	(7.0)				磨耗の為不明	磨耗の為不明		長石・石英・雲母	燈色	
54	蓋？	(5.6)		蓋頂部径(7.2)		ナデ	ナデ	30%	石英・長石	灰黄褐色	
55	鉢？	(6.7)	(16.2)	(19.6)		剝離の為不明	縦方向ハケ	30%	長石・石英・雲母	赤褐色	
56	高杯？	(3.9)	(24.0)				ナデ	25%	長石・石英・雲母	灰黄褐色	

第１表（２）　第１号住居跡出土遺物観察表（拓影）

No.	器種	文様構成	内面調整	外面調整	胎土	色調
57	壺口縁	竹管文／櫛描波状文＋円形浮文	ナデ	ナデ	石英・長石・赤色粒	にぶい燈色
58	壺口縁	櫛描波状文＋円形浮文／櫛描波状文＋円形浮文			石英・長石	燈色
59	壺口縁	櫛描波状文／櫛描波状文	ナデ	ナデ	石英・長石・雲母・輝石	灰黄燈色
60	鉢口縁	円形浮文／凹線＋キザミ	ナデ		石英・長石・赤色粒	にぶい黄燈色
61	壺口縁	斜行文	ナデ	ナデ	石英・長石・雲母・赤褐色	にぶい黄燈色
62	鉢口縁	櫛描波状文			砂礫をほとんど含まない	にぶい黄燈色
63	鉢口縁	櫛描波状文／櫛描波状文	ミガキ・ナデ		石英・長石・雲母・赤色粒	褐色
64	壺口縁	キザミ＋刺突文	ナデ		石英・長石・赤色粒	にぶい黄燈色
65	壺体部	櫛描斜格子文＋櫛描直線文	縦方向ハケ	縦方向ミガキのち部分的にナデ	石英・長石	燈色
66	壺体部	櫛描斜格子文＋櫛描直線文	ナデ		石英・長石・赤色粒	にぶい黄燈色
67	壺体部	櫛描斜格子文＋櫛描直線文	ナデ		石英・長石・赤色粒	褐灰色
68	壺体部	櫛描斜格子文＋櫛描直線文			石英・長石赤色粒	灰黄褐色
69	壺体部	櫛描波状文＋櫛描直線文＋櫛描斜格子文＋櫛描直線文	ハケ・ナデ	縦方向ハケ	石英・長石・雲母	にぶい黄褐色
70	無頸壺？	櫛描斜格子文	剝離の為不明	磨耗のため不明	石英・長石	にぶい黄燈色
No	器種	文様構成	内面調整	外面調整	胎土	色調
71	壺体部	櫛描直線文＋竹管文＋櫛描斜格子文	ナデ	縦方向ハケ	石英・長石・雲母・赤色粒	にぶい黄燈色
72	壺体部	櫛描直線文＋櫛描斜格子文	風化の為不明		石英・長石・赤色粒	浅黄燈色
73	壺体部	櫛描斜格子文＋櫛描直線文	ハケ	縦方向ハケ	石英・長石・赤色粒	褐色
74	壺体部	櫛描直線文＋櫛描斜格子文	ハケ		石英・容積・雲母	にぶい黄燈色
75	壺体部	櫛描斜格子文＋櫛描直線文	ナデ		石英・長石・雲母	にぶい黄褐色
76	壺体部	櫛描斜格子文＋櫛描直線文	ナデ	縦方向ハケ	石英・長石	灰褐色
77	壺体部	櫛描斜格子文＋櫛描直線文	ナデ	縦方向ハケ	石英・長石	浅黄燈色
78	壺体部	櫛描直線文＋斜格子文＋櫛描直線文	ナデ		石英・長石・雲母	にぶい黄褐色
79	壺体部	櫛描直線文	ナデ		石英・長石・雲母	明赤褐色
80	壺体部	櫛描直線文	ナデ	縦方向ハケ	石英・長石・雲母	明黄褐色
81	壺体部	櫛描直線文	ナデ		石英・長石・雲母	灰黄褐色
82	壺体部	櫛描直線文	剝離の為不明	縦方向ハケ	石英・長石・雲母	
83	壺体部	ヘラ描直線文	磨耗著しい	縦方向ハケのちナデ	石英・長石・赤色粒	灰黄褐色
84	壺体部	櫛描波状文		縦方向ハケ	石英・長石・輝石	にぶい黄燈色
85	壺体部	櫛描直線文＋櫛描波状文	磨耗の為不明	縦方向ハケ	石英・長石・赤色粒	にぶい黄燈色
86	壺体部	櫛描波状文	ナデ	縦方向ハケ	石英・長石・雲母	灰黄褐色
87	壺体部	櫛描直線文＋櫛描波状文＋櫛描直線文	剝離の為不明	縦方向ハケ	石英・長石・雲母	にぶい黄燈色
88	壺頸部	櫛描直線文	ハケのちナデ	縦方向ハケ	石英・長石	灰黄褐色
89	壺体部	櫛描直線文＋扇状文＋櫛描直線文＋櫛描直線文	ナデ		石英・長石・雲母	明赤褐色
90	壺体部	櫛描直線文＋円形浮文・櫛描直線文＋櫛描斜格子文	ナデ	縦方向ハケ	石英・長石	灰黄褐色
91	壺体部	円形浮文・櫛描直線文＋櫛描直線文	ナデ		石英・長石	赤褐色
92	壺体部	櫛描簾状文	ナデ		石英・長石	灰黄褐色
93	壺体部	櫛描波状文	磨耗の為不明		石英・長石	褐灰色
94	壺頸部～体部	指頭圧痕突帯＋櫛描直線文＋櫛描波状文＋櫛描直線文＋櫛描波状文＋櫛描直線文	ハケのちナデ	ハケ	石英・長石・雲母・赤色粒	にぶい黄燈色
95	壺体部	櫛描直線文＋櫛描波状文＋櫛描直線文＋櫛描波状文＋円形浮文・櫛描斜格子文	磨耗の為不明		石英・長石・雲母・赤色粒	燈色
96	壺体部	櫛描直線文＋櫛描波状文	ナデ		石英・長石	にぶい黄燈色
97	壺体部	櫛描波状文＋櫛描直線文＋櫛描波状文＋櫛描直線文	ハケ		石英・長石・赤色粒	にぶい黄燈色
98	壺体部	櫛描直線文＋櫛描波状文＋櫛描直線文＋櫛描波状文＋櫛描直線文	ハケ		石英・長石・赤色粒	にぶい褐色
99	壺体部	櫛描波状文＋櫛描直線文＋櫛描波状文＋櫛描直線文	ナデ		石英・長石・雲母	燈色
100	壺頸部	櫛描直線文＋櫛描波状文＋櫛描直線文＋櫛描波状文＋櫛描直線文	ナデ	縦方向ハケ	石英・長石・雲母	灰黄褐色
101	壺頸部	ヘラ描直線文	ナデ	ハケのちナデ	石英・長石・赤色粒	にぶい黄燈色
102	不明土製品		ナデ	ハケ	石英・長石	暗褐色

第１表（３）　第１号住居跡出土遺物観察表（石器類）

No.	器種	長	幅	厚	その他	石材	備考	残存率
103	打製石鏃	2.28	1.34	0.55	1.7ｇ	サヌカイト		完形
104	打製石鏃	2.58	1.83	0.54	2.1ｇ	サヌカイト		完形
105	打製石鏃	2.90	1.50	0.40	1.8ｇ	サヌカイト		完形
106	打製石鏃	3.65	1.95	0.60	3.5ｇ	サヌカイト		完形
107	打製石鏃	2.17	1.80	0.48	2.7ｇ	サヌカイト		完形
108	打製石鏃	(3.26)	2.03	0.56	3.7ｇ	サヌカイト		先端部基部欠損
109	打製石鏃	(2.17)	1.28	0.43	1.1ｇ	サヌカイト		先端部欠損
110	打製石鏃	3.55	1.70	0.65	3.1ｇ	サヌカイト		先端部欠損
111	打製石鏃	(3.7)	1.90	0.35	2.3ｇ	サヌカイト		先端部欠損
112	打製石鏃	3.20	2.05	0.65	3.7ｇ	サヌカイト		完形
113	打製石槍	(5.38)	2.33	1.08	11.7ｇ	サヌカイト		基部欠損
114	打製石槍	(4.23)	2.96	1.59	26.1ｇ	サヌカイト		基部先端部欠損
115	打製石槍	(4.79)	2.95	1.63	30.2ｇ	サヌカイト		先端部欠損
116	打製石鏃	3.53	1.42	0.62	2.5ｇ	サヌカイト		完形
117	スクレーパー(掻器)	3.00	5.10	1.15	25.3ｇ	サヌカイト		完形
118	石核	3.16	2.82	1.04	10.1ｇ	サヌカイト		
119	石核	3.50	3.40	1.70	16.3ｇ	サヌカイト		
120	剥片	4.17	2.08	0.45		サヌカイト		
121	剥片	2.94	4.91	1.10	11.3ｇ	サヌカイト		
122	剥片	3.30	3.00	0.80	9.1ｇ	サヌカイト		
123	剥片	3.20	9.00	1.00	20.1ｇ	サヌカイト		
124	剥片	2.60	4.15	0.40		サヌカイト		
125	剥片	4.14	4.53	0.48	9.2ｇ	サヌカイト		
126	砥石	9.26	3.23	1.49	81.6ｇ	粘盤岩		
127	石のみ	4.92	1.13	1.12	10.5ｇ	粘盤岩	扁平片刃石斧転用	完形
128	石包丁	(8.78)	8.36	1.03	102.2ｇ・孔径0.6	粘盤岩？	二次的被熱	50％
129	磨製石包丁	(3.54)	5.33	0.86	20.6ｇ・孔径0.5	石墨片岩		両端欠損
130	石包丁	(7.44)	3.74	0.61	29.5ｇ・孔径0.6	粘盤岩		40％
131	磨石	(7.55)			224.3ｇ			50％
132	磨石	7.80	5.50	4.30	242.1ｇ			完形
133	敲石	8.20	3.50	3.40	159.8ｇ			完形
134	敲石	7.47	5.28	4.62	244.0ｇ	花崗岩	二次的被熱	完形
135	磨石	5.80	5.70	3.20	161.8ｇ			完形
136	石皿	18.50	9.20	4.60				
137	太型蛤刃石斧	11.89	7.03	4.32		中粒砂岩		
138	有孔円盤	径4.0×3.8cm・孔径0.2cm・厚さ0.4cm・重さ9.0ｇ					土器片転用、紡錘車か？	
139	有孔円盤	径4.8×5.1cm・孔径0.25cm・厚さ0.2cm・重さ9.0ｇ					土器片転用、紡錘車か？	
140	不明鉄製品	現存長4.4cm・厚さ0.8～0.4cm					木質付着	
141	不明鉄製品	現存径1.6×2.4cm・厚さ0.1cm					木質付着	

第２表　第１号住居跡直上包含層出土遺物観察表

No.	器種	長	幅	厚	その他	石材	備考	残存率
1	打製石鏃	1.31	(1.02)	2.30	0.3ｇ	サヌカイト		かえり欠損
2	打製石鏃	1.58	(1.28)	0.36	0.5ｇ	チャート	縄文時代のものか？	かえり欠損
3	打製石鏃	1.92	1.43	0.40	1.0ｇ	サヌカイト		完形
4	打製石鏃	2.42	1.68	0.24	1.4ｇ	サヌカイト		完形
5	打製石鏃	2.66	1.79	0.27	1.5ｇ	サヌカイト		完形
6	打製石鏃	(1.71)	1.15	0.42	0.6ｇ	サヌカイト		基部欠損
7	打製石鏃	2.96	(1.74)	0.37	1.1ｇ	サヌカイト		かえり欠損
8	打製石鏃	3.17	1.57	0.65	3.1ｇ	サヌカイト		完形
9	打製石鏃	(2.96)	2.18	0.38	3.6ｇ	サヌカイト		先端部欠損
10	打製石鏃	3.19	1.12	0.43	1.1ｇ	サヌカイト		完形
11	打製石鏃	2.81	1.57	0.48	1.5ｇ	サヌカイト		完形
12	打製石鏃	4.46	2.20	0.76	7.2ｇ	サヌカイト		完形
13	打製石錐	3.59	1.45	0.76	3.8ｇ	サヌカイト		先端部欠損
14	打製石錐	2.78	1.28	0.46	2.0ｇ	サヌカイト		完形
15	打製石錐	2.33	1.84	0.46	1.7ｇ	サヌカイト		先端部欠損？
16	打製石錐	2.75	2.48	0.67	1.7ｇ	サヌカイト		完形
17	石核	2.57	1.96	1.46	6.5ｇ	サヌカイト		
18	石核	3.88	3.47	1.44	19.2ｇ	サヌカイト		
19	剥片	1.38	2.06	0.38	1.0ｇ	サヌカイト		
20	剥片	2.03	3.31	0.47	3.8ｇ	サヌカイト		
21	剥片	2.00	3.13	0.37	3.0ｇ	サヌカイト		
22	剥片	1.63	3.16	0.46	3.2ｇ	サヌカイト		
23	剥片	2.46	4.37	0.67	6.7ｇ	サヌカイト		
24	剥片	2.53	2.62	0.22	2.0ｇ	サヌカイト		
25	剥片	2.60	2.37	0.36	2.2ｇ	サヌカイト		
26	剥片	2.65	2.72	0.63	3.7ｇ	サヌカイト		
27	剥片	3.07	1.64	0.82	3.6ｇ	サヌカイト		
28	剥片	2.48	3.74	0.78	3.8ｇ	サヌカイト		
29	剥片	3.42	4.34	0.78	9.3ｇ	サヌカイト		
30	不明鉄製品	長2.8cm、径0.5cm			2.2ｇ			
31	砥石	3.60	2.42	2.23	33.7ｇ	細粒砂岩		擦痕あり

第２号住居跡（第６・10・11図）

Ｄ４～５・Ｅ４～５グリッドでみつかった竪穴住居跡である。北側でやや歪むものの、ほぼ円形をなし、南北6.80ｍ、東西6.55ｍ、深さ0.25ｍであった。もっとも壁際によったＰ６を主軸上の一辺にあると考えれば、主軸はN-81°-Wであった。

拡張　当住居跡は、第１号住居跡床面の精査にともなって検出した壁溝によって、形態を把握した。北東側壁溝を切って第１号住居跡のＰ７が掘り込まれていること、Ｐ３付近の西側の壁溝上部が外側に拡張されていたこと、第１号住居跡床面で検出した壁溝覆土に硬化の形跡があり、埋め戻された可能性があることなどから、当住居跡を拡張して第１号住居跡を構築したものと判断した。

覆土　当住居跡竪穴部に固有の覆土は認められなかったが、貼床土は第１号住居跡部分より焼土・炭化物を多く含んでいた。柱穴覆土にも炭化物・焼土が多く含まれており、廃絶時あるいは拡張時に焼却された可能性が高いが、第１号住居跡焼却時にも再度被熱しているため、焼土や炭化物の形成時期は明確でない。

床面　床面はほぼ平坦であったが、踏みつけ等による硬化面は検出できなかった。竪穴部はⅤ層まで掘り抜いた後、貼床しており、貼床は粘性の高い細砂質シルトで行われていた。

壁溝　西側壁面は第１号住居跡に共有されており、東側の立ち上がりはすべて破壊されていた。壁溝は本来全周していたと思われるが、北側の一部は当住居跡の外形を第１号住居跡床面の精査で確認する際、失ったものである。土質の違いでは、第１号住居跡との重複は確認できなかった。床面のレヴェルが共通していた可能性が高い。壁溝の幅は、15～30㎝程度、深さは５㎝程度であった。壁溝内に確認した複数の小ピットは、炭化材の遺存状態からみて、第１号住居跡にともなうものとしてよいだろう。

柱穴　柱穴は７本で、掘り込みが30～40㎝と第１号住居跡に比べて著しく深い。いずれも柱痕跡の有機質土が認められ、掘り方下方に柱材先端のあたりがあった。またＰ４・Ｐ７を除く柱穴掘り方には柱痕跡と重複する柱材の抜き取り跡が認められた。上屋の建て替えがあったと考えられる。柱穴覆土の３層は、抜き取り痕跡のないＰ７にはみられない土層で、抜き取り後に流入した柱穴壁面の崩落土と柱埋設土が混合したものと考えられる。柱材は丸木材で、径約15～20㎝と推定される。柱は、掘り方内の一方の壁面に立てかけるように置かれ、やや打ち込まれたのち埋設土で固定されたものである。図中にスクリーントーンで示したのは平面的に確認した柱痕跡である。柱間はＰ１とＰ８間が極端に離れるが、他は180㎝を前後する距離である。Ｐ４は焼土を非常に多く含む細砂質シルトで埋没していたピットであり、柱痕跡はなかった。柱穴とする根拠はない。

梯子穴・貯蔵穴は検出できなかった。

中央土坑　中央土坑ははじめ検出できなかったが、掘り方確認時に第１号住居跡中央土坑北側に重複してみつけることができた。住居跡のほぼ中央に位置し、第１号住居跡中央土坑が西側によっていた原因が、拡張後も掘り直しながら同じ土坑を利用したためであることがわかった。南側を第１号住居跡中央土坑に切られているため全体の形状は不明であるが、長径102㎝、短径90㎝程度の楕円形であったとみられ、深さは15㎝程度であった。壁面は緩やかで、周囲に被熱して焼土化した範囲が認められた。覆土は２層で構成され、壁付近に

は炭化物・焼土を多く含む層があったが、ほとんどの部分がシルト・ブロックを含む細砂質シルトで埋め戻された痕跡があった。中央土坑からの出土遺物はなかった。

出土遺物　出土遺物は、ほとんど認められなかったが、柱穴覆土内および第１号住居跡床下に埋没していた東側壁溝内から少量の土器細片を得た。しかし、図示することはできなかった。

掘り方　掘り方は住居跡中央から東側にかけて不整な掘り下げ部分が確認されたが、周囲は均一に掘り込まれていた。Ｐ３付近に抜き取り痕跡のある床下柱穴を確認したが、Ｐ５との重複があり、当住居跡に属するものと考えられる。柱穴の掘り方に柱痕跡と重複関係にある抜き取り跡が認められたことから考えて、拡張以前の上屋建て替え時に抜き取られた可能性が高い。

第１号掘立柱建物跡（第23図）

Ｃ２グリッドでみつかった。２間×３間、総柱の掘立柱建物跡である。北東の２つの柱穴は震災前の建物基礎によって削平されていた。柱間は1.30ｍ前後であった。柱穴は上端の径20～40㎝、深さ15～25㎝程度で、柱痕跡が残っていた。柱痕跡からみて、柱材は丸木材で、太さ15～20㎝と考えられる。主軸方位はN-11°-Wであった。

出土遺物は柱穴内の柱材埋設土（２層）から、弥生土器の細片およびサヌカイト剝片が少量得られたが、図示できたのはＰ８の２層より出土した第23図２のみで、1.7ｇであった。出土遺物は風化が激しく、細片であり、周囲の包含層の遺物密度の高さからみて、柱埋設土に混入する可能性が高い。これらの遺物をもって当掘立柱建物跡の時期を示すものとは断定できない。また、方位が第１遺構面の水田跡等に近く、弥生時代の住居跡である第１号住居跡と比較しても著しく異なっていた。前回までの調査成果では、掘立柱建物跡を弥生時代の所産とする向きもあるようだが、これを弥生時代の遺構と考える根拠はない。

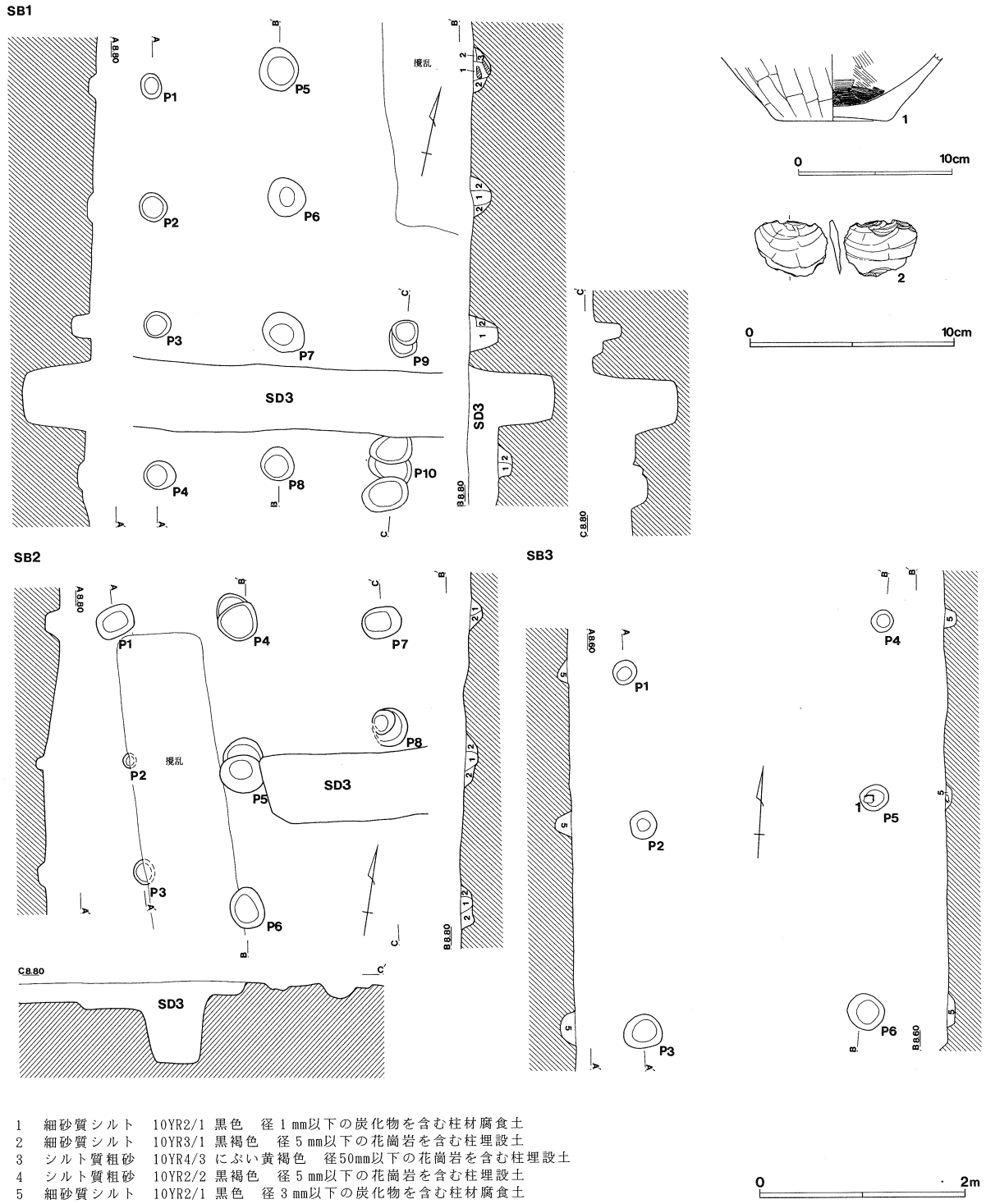
なお、当掘立柱建物跡の周囲は、遺構面であるⅣ層が削平されており、確認面が表土直下のⅥ層であった。本来は今回の調査範囲におけるⅣ・Ⅴ層の層厚20～40㎝程度を加えた柱穴の深さを想定すべきであろう。

第２号掘立柱建物跡（第23図）

Ｃ２・Ｄ２グリッドでみつかった。２間×２間、総柱の掘立柱建物跡である。南西のＰ２・Ｐ３は調査時の表土除去によって欠損した。南東端の柱穴はSD２による撹乱で検出できなかった。柱間は1.40ｍ前後であった。柱穴は上端の径20～40㎝、深さ10～15㎝程度で、柱痕跡が残っていた。柱痕跡からみて、柱材は丸木材で、太さ15～20㎝と考えられる。主軸方位はN-14°-Wであった。

出土遺物は柱穴内の柱材埋設土（２層）から、弥生土器の細片が少量得られたが、図示できるものはなかった。出土遺物は風化が激しく、細片であり、周囲の包含層の遺物密度の高さからみて、柱埋設土に混入する可能性が高い。これらの遺物をもって当掘立柱建物跡の時期を示すものとは断定できない。

なお、当掘立柱建物跡の周囲は、遺構面であるⅣ層が削平されており、確認面が表土直下のⅥ層であった。本来は今回の調査範囲におけるⅣ・Ⅴ層の層厚20～40㎝程度を加えた柱穴の深さを想定すべきであろう。



1　細砂質シルト　10YR2/1 黒色　径１mm以下の炭化物を含む柱材腐食土
2　細砂質シルト　10YR3/1 黒褐色　径５mm以下の花崗岩を含む柱埋設土
3　シルト質粗砂　10YR4/3 にぶい黄褐色　径50mm以下の花崗岩を含む柱埋設土
4　シルト質粗砂　10YR2/2 黒褐色　径５mm以下の花崗岩を含む柱埋設土
5　細砂質シルト　10YR2/1 黒色　径３mm以下の炭化物を含む柱材腐食土

第23図　掘立柱建物跡および出土遺物

第３号掘立柱建物跡（第23図）

Ｅ３・４グリッドでみつかった。１間×２間の掘立柱建物跡である。北西のＰ１の位置がややずれているが、周囲に他の柱穴を検出することはできなかった。柱間は2.10ｍ前後であった。柱穴は上端の径20～35㎝、深さ５～15㎝程度で、柱痕跡が残っていた。柱痕跡からみて、柱材は丸木材で、太さ20㎝前後と考えられる。主軸方位はN-1°-Wであった。出土遺物はＰ５上から、弥生土器第23図１が得られた。底径7.3㎝。胎土には石英・長

石・輝石・雲母・赤色粒を含み、色調はにぶい黄橙色であった。周囲の包含層の遺物密度の高さからみて、柱埋設土に混入する可能性が高く、これをもって当掘立柱建物跡の時期を示すものとは断定できない。

なお、当掘立柱建物跡の周囲は、遺構面であるⅣ層が削平されており、確認面がⅢ層直下のⅥ層であった。本来は今回の調査範囲におけるⅣ・Ⅴ層の層厚20～40㎝程度を加えた柱穴の深さを想定すべきであろう。

ピット群（第24図）

Ｄ２～３、Ｅ２～３、Ｆ２～３グリッドでみつかった。付近は遺構面を形成する基本層序Ⅳ・Ⅴ層が削平されており、同Ⅲ層下にⅥ層が露出していた。このため、ピット群の確認面はⅥ層となった。

他に、散在的に検出されたピットや、Ｃ２グリッドの東側およびＣ３グリッド付近に集中地点があったが、撹乱にともなうピットが多く、明瞭に人為的な遺構とわかるものは図示したものに限られる。

Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ６・Ｐ７は柱痕跡と柱材埋設土からなる共通の覆土をもつ柱穴が列状に並んだもので、柱間は120㎝に統一されていた。列の方位はN-11°-Wであり、柵列もしくは柱立ちの板塀などと考えられる。

その他のピットの配列関係は不明であるが、柱材の腐食土を含む覆土をもつなど、木材を用いた杭・柱等の樹物があった形跡を認めることができた。

出土遺物は柱痕跡部および柱埋設土内から少量の弥生土器の細片が得られているが、図示できるものはなかった。

出土遺物は風化が激しく、包含層との関連も削平のため明瞭にできなかった。方位が掘立柱建物跡および水田跡に近く、出土遺物をもってこの遺構の所属年代を決めることはできない。

第１号溝跡（第25・27図）

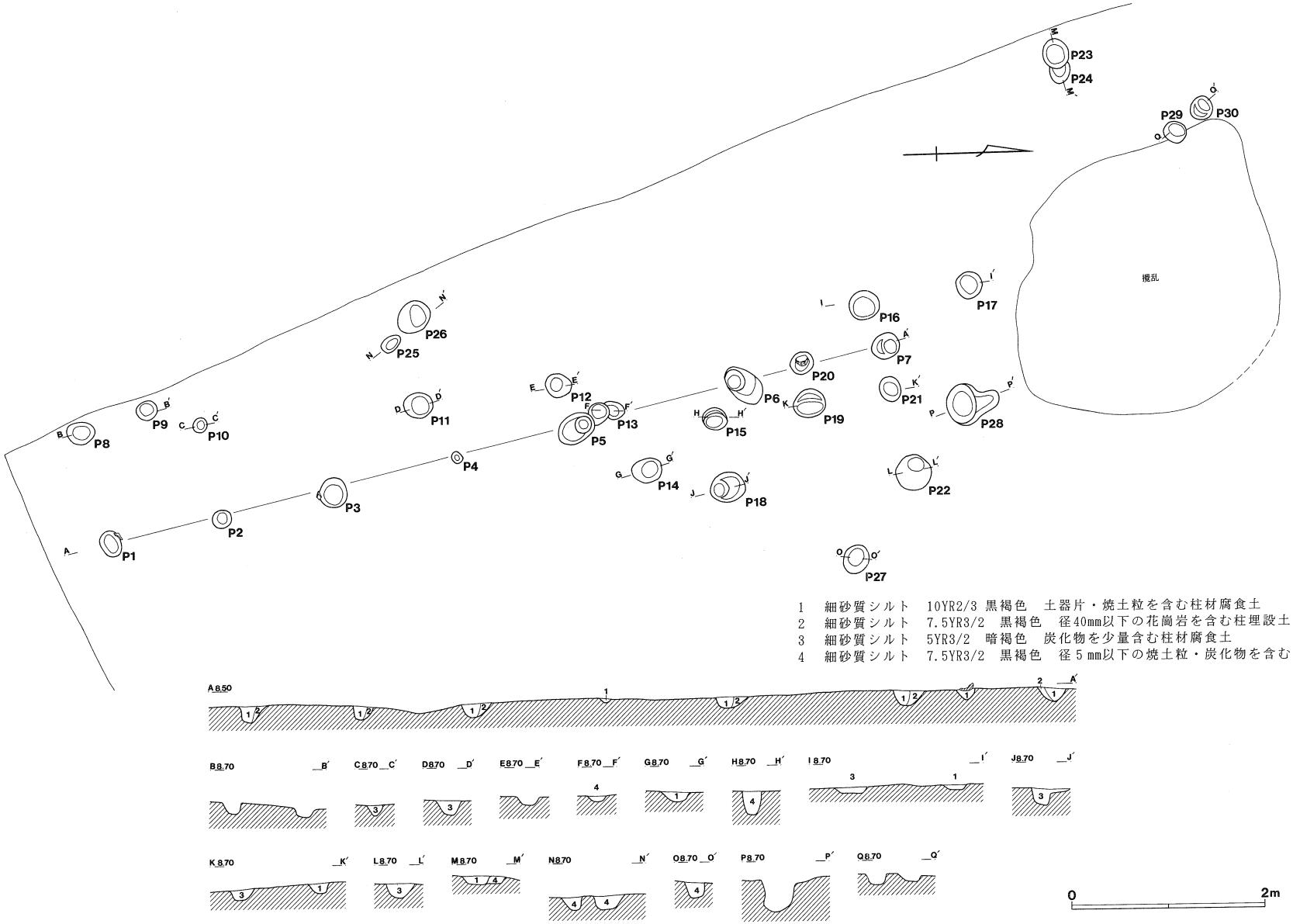
Ｃ２・Ｄ２グリッドでみつかった。本来遺構面をなす基本層序Ⅳ・Ⅴ層が削平されており、確認面はⅢ層下のⅥ層であった。現状での規模は、長さ５ｍ、上端の最大幅1.60ｍ、下端の最大幅0.80ｍ、深さ0.20ｍであったが、掘削当時の規模はさらに大きかったものと思われる。方位はN-16°-Wであった。

立ち上がりは非常に緩やかで、底面には若干の凹凸が認められた。水流の痕跡と思われる。

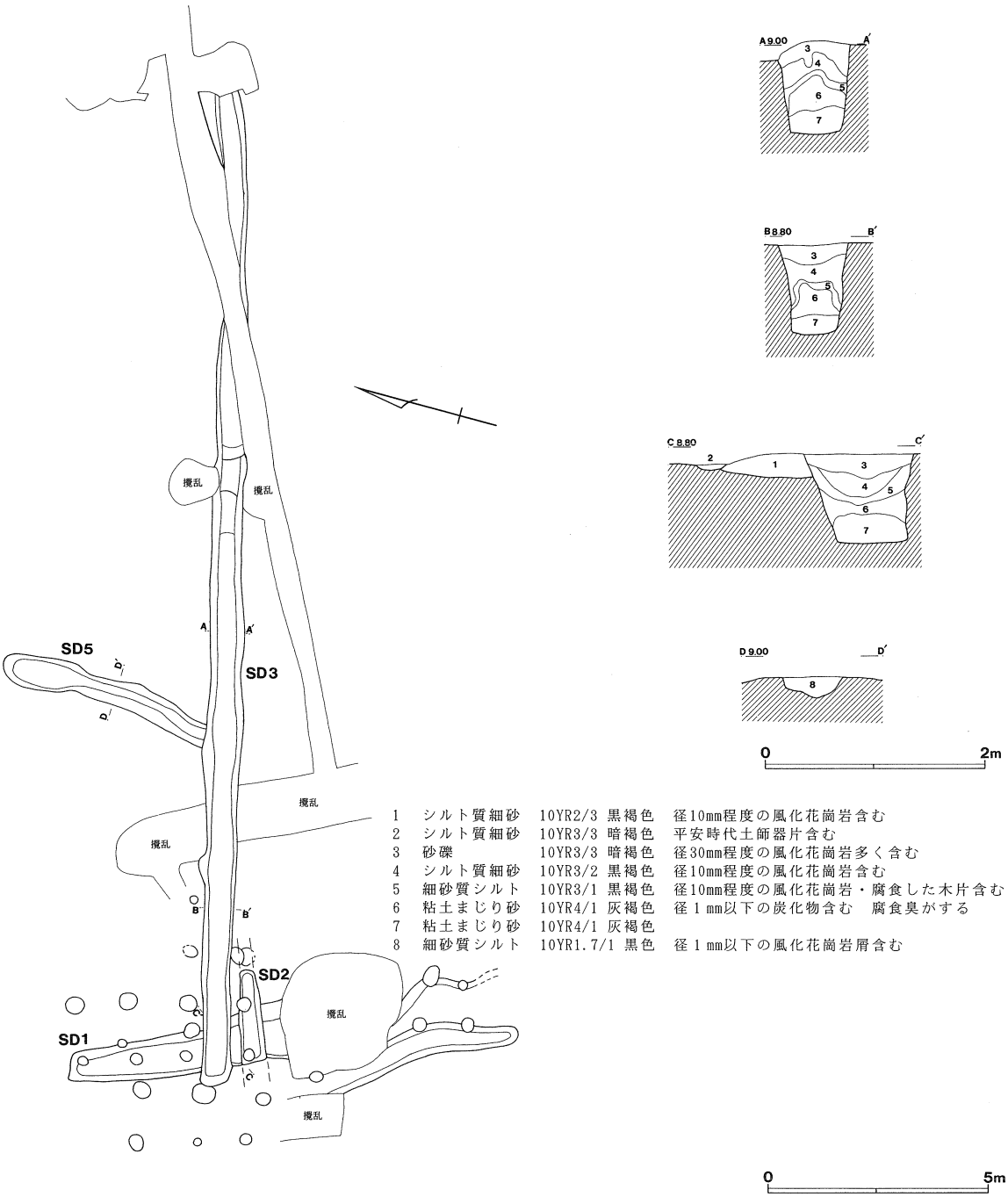
現代の井戸による撹乱を挟んで南側水田跡下層に延びていたものと思われるが、水田による削平のため南側の延長部分は不明である。また、北側の延長部分は震災前の家屋建設にかかわる造成による削平のため不明である。

当溝跡は第１・２号掘立柱建物跡、第３号溝跡と重複関係にあり、第１・２号掘立柱建物跡より遅れ、第３号溝跡に先行する。

覆土は基本層序Ⅴ層に類似した、風化花崗岩屑を多く含む黒褐色のシルト質細砂で、弥生時代中期の土器片およびサヌカイト剥片等を少量含んでいた。出土遺物のうち図示できたのは第27図１の剥片に限られる。サヌカイト製剥片で、全長3.66㎝、最大幅3.54㎝、最


P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
P27
P28
P29
P30
攪乱
1　細砂質シルト　10YR2/3 黒褐色　土器片・焼土粒を含む柱材腐食土
2　細砂質シルト　7.5YR3/2　黒褐色　径40mm以下の花崗岩を含む柱埋設土
3　細砂質シルト　5YR3/2　暗褐色　炭化物を少量含む柱材腐食土
4　細砂質シルト　7.5YR3/2　黒褐色　径５mm以下の焼土粒・炭化物を含む
A 8.50
B 8.70
C 8.70
D 8.70
E 8.70
F 8.70
G 8.70
H 8.70
I 8.70
J 8.70
K 8.70
L 8.70
M 8.70
N 8.70
O 8.70
P 8.70
Q 8.70
0
2m

第24図　ピット群



1	シルト質細砂	10YR2/3	黒褐色	径10mm程度の風化花崗岩含む
2	シルト質細砂	10YR3/3	暗褐色	平安時代土師器片含む
3	砂礫	10YR3/3	暗褐色	径30mm程度の風化花崗岩多く含む
4	シルト質細砂	10YR3/2	黒褐色	径10mm程度の風化花崗岩含む
5	細砂質シルト	10YR3/1	黒褐色	径10mm程度の風化花崗岩・腐食した木片含む
6	粘土まじり砂	10YR4/1	灰褐色	径１mm以下の炭化物含む　腐食臭がする
7	粘土まじり砂	10YR4/1	灰褐色	
8	細砂質シルト	10YR1.7/1	黒色	径１mm以下の風化花崗岩屑含む

第25図　第１・２・３・５号溝跡

大厚0.82㎝、重さ12.3ｇである。

掘削時期は明確にできないが、水田跡との重複関係からみて、水田跡下層出土のかわらけに先立つものと考えるのが妥当だろう。一方で、水田跡の方位、区画との類似は、開田期からさほど逆上らない可能性を示唆するが、断定する根拠はない。

第２号溝跡（第25図）

Ｃ２・Ｄ２グリッドでみつかった。震災前の建物基礎による撹乱下から底面付近の一部を検出できたもので、東西方向に延びていたものと考えられるが、東西両延長とも現代の削平によって失われており、明らかにできたのは長さ２ｍ、幅0.5ｍあまりにすぎない。方位はN-75°-Eであった。長方形の土坑の可能性もある。立ち上がりは緩やかで、底面はほぼ平坦であった。

当溝跡は第１・２号掘立柱建物跡と重複しており、第１・２号掘立柱建物跡に遅れるものである。

覆土は暗褐色のシルト質細砂で、粘性が高く、平安時代の土師器細片を少量含んでいた。出土遺物は風化が進み、非常に細かい破片に限られ、図示できるものはなかった。また、明瞭な形態を把握できるものもなかった。調査範囲では、平安時代の遺物を包含する層は他に認められなかったため、時期の詳細を類推することはできないが、各層位の状況からみて、当遺構の掘削年代が平安時代の範疇から大きく外れることはないと思われる。

第３号溝跡（第25図）

Ｃ２～６グリッドでみつかった。確認面は、Ｃ２グリッドでは基本層序Ⅳ・Ⅴ層が削平されていたためⅥ層上面となったが、その他のグリッドではⅡ層直下がⅣ層となっており、この上面であった。

上端付近が削平された可能性があるが、現状での規模は長さ23ｍ、上端の幅0.6～0.7ｍ、下端の幅0.4～0.5ｍ、深さ0.8ｍであった。方位はN-81°-Eであった。

ほぼ垂直な壁面と平坦な底面が特徴的で、基本層序Ⅶ層の砂礫層まで丁寧に掘り込んでいた。西側はＣ２グリッドで垂直な立ち上がりをなして終わっており、東側へは直線的に延びるが、戦前の建物基礎による削平と撹乱によって底面まで失われ、延長は不明であった。

当溝跡は第１・２号掘立柱建物跡、第１号溝跡と重複関係にあり、第１・２号掘立柱建物跡、および第１号溝跡より遅れるものである。

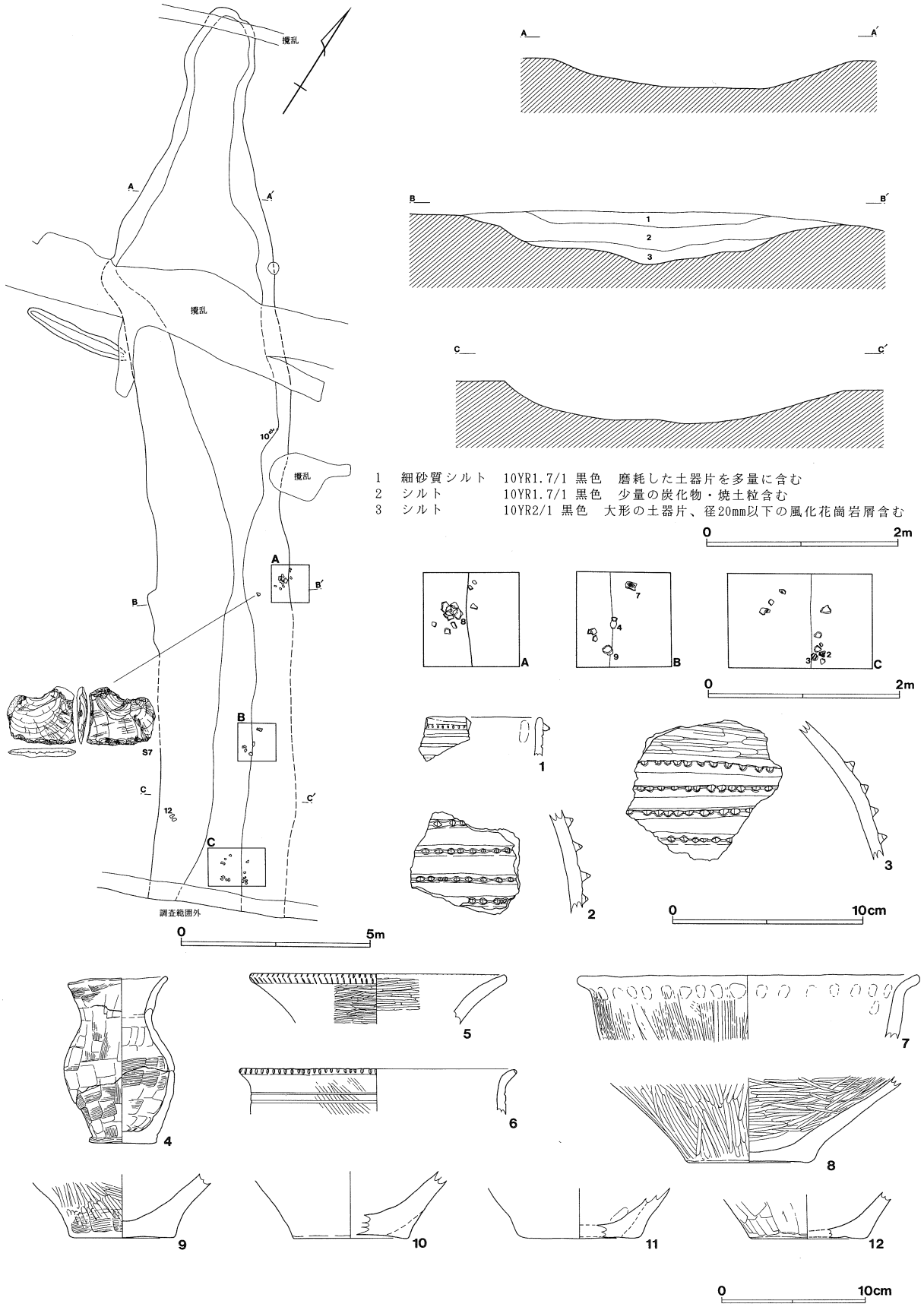
覆土は５層からなり、下層ほど粘性が高く、掘削時には腐敗臭がした。５層は木質が多く混入する層で、壁面付近から上方に立ち上がり、上面は平坦をなす部分が多かった。木樋等の痕跡の可能性がある。

出土遺物は近世後期の陶磁器片が少量得られたが、図示できるものはなかった。

覆土は基本層序Ⅱ層に対応する土壌と思われ、出土遺物からみて近世末期から近代・現代の所産と考えられる。

第４号溝跡（第26・27図）

Ａ５・Ｂ５・Ｃ５～６・Ｄ６～７・Ｅ７グリッドでみつかった。確認面は基本層序Ⅳ層であった。北側の延長部分は、震災前の家屋建設にかかわる削平のため不明である。また、南側は調査範囲外に延びていた。南側調査範囲境界断面において確認した結果、上端付近に削平された形跡はなく、Ｄグリッド以南では遺構形成時の表土付近で把握することができた。現状での規模は、長さ24.1ｍ、上端の幅3.4～4.1ｍ、下端の幅0.25～1.2ｍ、深さ約0.55ｍであった。芯々の方位はN-36°-Wであった。



第26図　第４号溝跡および出土遺物

立ち上がりは緩やかで、底面には大きく緩やかな凹凸が認められた。

覆土は３層からなり、基本的に粘性の強い黒色シルトで埋没していた。基本層序Ⅳ層に対応するものと思われる。１層内には溝跡総延長に弥生時代中期の土器細片・石器が多量に分布し、２層の無遺物層をはさんで３層には弥生時代前期の土器の完形品・大形破片が含まれていた。

出土遺物は１・５・６・11が１層、他は３層出土である。

１は直立する口縁部外面に、キザミを施した突帯が１条めぐり、下位にはヘラ描沈線文が施される。内面には指頭圧痕が認められる。胎土には石英・長石・石英質小礫を含み、明橙褐色である。

２・３は、頂部にキザミをもつ断面三角形突帯が、胴部最大径上部に４条程度貼りつけられる大形の壷形土器胴部片で、突帯文より上部はヘラ状工具によって横位に磨かれている。内面は細かい横位のハケ状工具あるいは板によるナデによって仕上げられている。胎土は石英・長石・白雲母・中細砂を含み、外面はにぶい橙色、内面は黒褐色である。胎土・出土状態からみて同一個体の可能性が高い。

４はミニチュアの壷形土器である。口径7.0㎝、器高12.7㎝、底径4.7㎝で、口縁部を一部欠損する。内外面とも細かいハケ状工具によるナデで調整されており、器面の仕上げは雑である。胎土は石英・長石・石英質小礫・中細砂を含み、にぶい黄橙色である。ほぼ完形である。底面付近で採集されたもので、周囲には７・９のほか複数の遺物が集中していた。

５は口径18.0㎝程度の壷形土器口縁部である。口唇部には上下２段にキザミがめぐり、内外面とも丁寧に横位のミガキが施されている。胎土は石英・長石・石英質小礫を含む。明橙褐色である。部分残存率は５％である。

６は口径19.4㎝程度の甕形土器口縁部である。口唇部にはキザミが施され、口縁部下には２条のヘラ描沈線文がめぐる。外面はハケ状工具によるナデで仕上げられている。胎土は石英・長石・石英質小礫を含む。明灰橙色である。部分残存率は５％である。

７は口径24.0㎝程度の土器口縁部である。口縁部下位には内外面に指頭圧痕が認められる。外面はハケ状工具によってナデつけられている。胎土は石英・長石・石英質小礫を含む。にぶい黄橙色である。部分残存率は10％である。

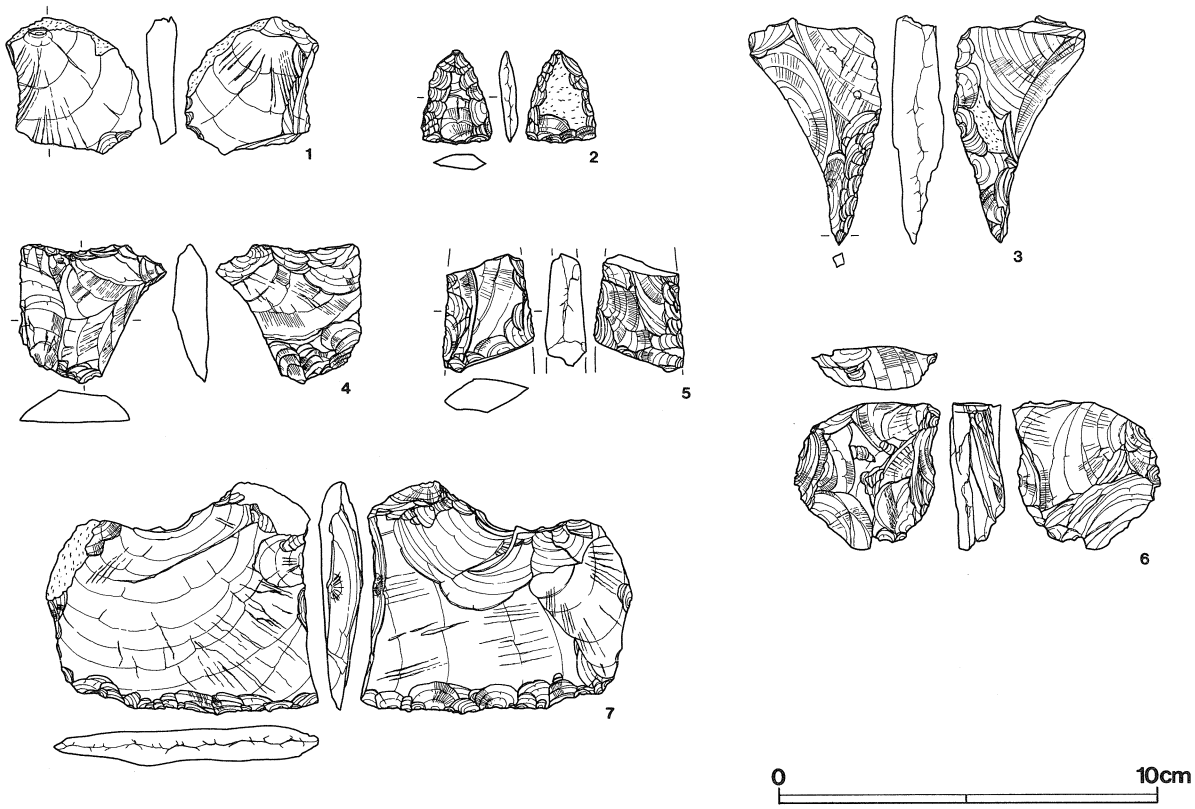
８は底径9.0㎝の土器底部である。外面は縦位、内面は横位のミガキが施されている。胎土は石英・長石・白雲母を含む。橙色である。部分残存率は85％である。

９は底径7.4㎝の土器底部である。外面は斜位のミガキ後、底部付近をハケ状工具によって横位にナデつけている。胎土は石英・長石・白雲母・赤色粒・細砂を含む。にぶい褐色である。部分残存率は50％である。

10は底径8.0㎝の土器底部である。調整は不明である。胎土は石英・長石・白雲母・細砂を含む。橙色である。部分残存率は45％である。

11は底径8.8㎝の土器底部である。内面はヘラ状工具によるナデで仕上げられている。胎土は石英・長石・赤色粒・細砂を含む。淡橙白色である。部分残存率は15％である。

12は底径8.2㎝の土器底部である。外面はヘラ状工具によるケズリ、内面は指ナデに



第27図　溝跡出土遺物

よって仕上げられている。胎土は石英・長石・石英質小礫・赤色粒・細砂を含む。赤色粒が多い。にぶい黄橙色である。部分残存率は35％である。

石器はすべて１層内から出土した。

第27図２はサヌカイト製石鏃である。全長3.46㎝、最大幅1.83㎝、最大厚0.43㎝、重さ1.7ｇである。

第27図３はサヌカイト製石錐である。全長6.04㎝、最大幅3.46㎝、最大厚1.37㎝、重さ18.3ｇ、最大回転径は0.4㎝程度である。

第27図４はサヌカイト製不定形石器である。全長3.68㎝、最大幅3.89㎝、最大厚0.95㎝、重さ11.3ｇである。

第27図５はサヌカイト製石剣である。上下を欠くが、刃部中央より先端側部分である。現存部分の全長3.12㎝、最大幅2.34㎝、最大厚1.03㎝、重さ8.0ｇである。

第27図６はサヌカイト製石核である。全長3.91㎝、最大幅3.89㎝、最大厚1.33㎝、重さ19.0ｇである。

第27図７はサヌカイト製の大形の刃部をもつ石器である。刃部は丁寧に調整され、やや外湾するが直線的に作りだされている。背面の一部に自然面を残す。３分の１程度を欠くが、現存部分での法量は全長7.12㎝、最大幅6.14㎝、最大厚1.15㎝、刃部長6.71㎝、重さ52.0ｇである。

遺物の出土状態からみて、遺構の形成時期は弥生時代前期に逆上ると想定される。溝底に水流の痕跡はみられなかった。また区画溝あるいは環濠としての機能を想定する根拠もない。溝跡下部を確認した結果、弥生時代以前の土石流による流路がほぼ重なって検出で

きた。このことは、溝跡が人為的なものではなく自然の落ち込みである可能性を示唆するものである。しかし、幅が一定することや、底面付近で得られたミニチュア壷などは、人間の行為があったことを示している。この意味で、人工の溝跡の可能性は残されている。

第５号溝跡（第25図）

Ｂ３・Ｃ３グリッドでみつかった。確認面は、基本層序Ⅳ層上面であった。本来は南北に延びるものと思われるが、北側は震災前の建物造成にともなう削平によって失われており、SD ３より南側では水田跡 SN ２による耕作でⅣ層上面が削平されていたため、失われていた。現状での規模は、長さ4.90ｍ、上端の幅0.5～0.75ｍ、下端の幅0.2～0.6ｍ、深さ0.2ｍであった。方位は N-13°-E であった。立ち上がりは急で、底面には不規則な凹凸が認められた。

当溝跡は第３号溝跡と重複関係にあり、第３号溝跡に先行する。

覆土は基本層序Ⅳ層に類似し、風化花崗岩屑を多く含む黒色の細砂質シルトで、弥生時代の土器片を少量含んでいた。出土遺物に図示できるものはなかった。

第１号土坑（第28図）

Ｃ８グリッドでみつかった。確認面は基本層序Ⅴ層上面であった。平面形は不正な楕円形であった。規模は、長径54㎝、短径40㎝、深さ19㎝、長軸方位 N-71°-E であった。立ち上がりはほぼ垂直で、底面はすり鉢状であった。底面に凹凸は認められなかった。覆土は基本層序Ⅳ層に類似し、大形の礫が混入することが特徴的であった。出土遺物は認められなかった。

性格および遺構の掘削時期は不明である。

第２号土坑（第28図）

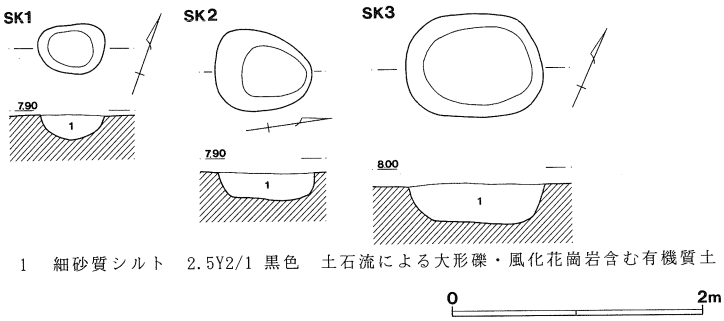
Ｄ９グリッドでみつかった。確認面は基本層序Ⅴ層内であった。平面形は南側で広がる不正な楕円形であった。規模は、長径77㎝、短径66㎝、深さ23㎝、長軸方位 N-９°-E であった。立ち上がりは急で、底面はほぼ平坦であった。底面には若干の凹凸が認められた。覆土は SK １に共通で、大形の礫の混入があった。出土遺物は認められなかった。

性格および遺構の掘削時期は不明である。

第３号土坑（第28図）

Ａ８グリッドでみつかった。当遺構周辺は震災前の建物建設にともなう造成によって遺構面をなすⅣ層が削平されていた。確認面は基本層序Ⅴ層内であった。平面形は整った楕円形であった。規模は、長径110㎝、短径83㎝、深さ32㎝、長軸方位 N-67°-E であった。立ち上がりはやや急で、底面はほぼ平坦であった。底面に凹凸は認められなかった。覆土は SK １に共通で、大形の礫の混入があった。出土遺物は認められなかった。

性格および遺構の掘削時期は不明である。



第28図　土坑

グリッド・包含層出土遺物（第29図）

包含層は基本層序Ⅲ層を形成する水田跡床土が主体であったが、第１・２号竪穴住居跡および第４号溝跡周辺を除き、出土遺物は極端に少なかった。ピット群周辺を中心とした調査範囲西側で少数の石器が得られたが、その他の部分では図示できるものはなかった。

１・２はサヌカイト製石鏃である。１は下部を欠くが、現存部分の全長1.93㎝、最大幅1.53㎝、最大厚0.66㎝、重さ1.8ｇである。２は下部を欠くが、現存部分の全長1.58㎝、最大幅0.84㎝、最大厚0.43㎝、重さ0.4ｇである。

３はサヌカイト製の刃器で、スクレイパーと思われる。刃部は素材剝片端部全体に作り出されているが、調整は粗い。全長8.87㎝、最大幅5.54㎝、最大厚1.36㎝、重さ65.3ｇである。

４はサヌカイト製石剣である。切先および下方刃部・基部を欠く。現存部分の全長7.51㎝、最大幅2.42㎝、最大厚1.38㎝、重さ26.6ｇである。刃部は両側縁からの丁寧な調整で作りだされている。

５は中粒砂岩製太型蛤刃石斧である。上部２分の１程度を欠く。刃部付近に研磨痕が、刃部に使用時に起こった剝離痕が、また側面には装着痕と考えられる磨耗痕が認められる。現存部分の全長6.94㎝、最大幅4.81㎝、最大厚3.08㎝、重さ157.6ｇである。

６は細粒砂岩製石斧とみられるが、明瞭な刃部をもたず、剝離痕と形状からみて敲石とも考えられる。上端には成形時の敲打痕、刃部付近には研磨痕が認められる。上部を欠く。現存部分の全長10.16㎝、最大幅4.82㎝、最大厚2.23㎝、重さ196.5ｇである。

７は花崗岩製磨石である。全長8.30㎝、最大幅3.01㎝、最大厚4.73㎝、重さ215.7ｇである。

８～11は土錘である。８は全長4.00㎝、最大径1.15㎝、孔径0.30㎝、重さ5.0ｇである。９は全長3.90㎝、最大径1.20㎝、孔径0.40㎝、重さ4.2ｇである。10は下半部を欠くが、現存部分で全長2.90㎝、最大径1.10㎝、孔径0.40㎝、重さ3.0ｇである。11は下半部を欠くが、現存部分で全長1.80㎝、最大径1.00㎝、孔径0.30㎝、重さ1.3ｇである。

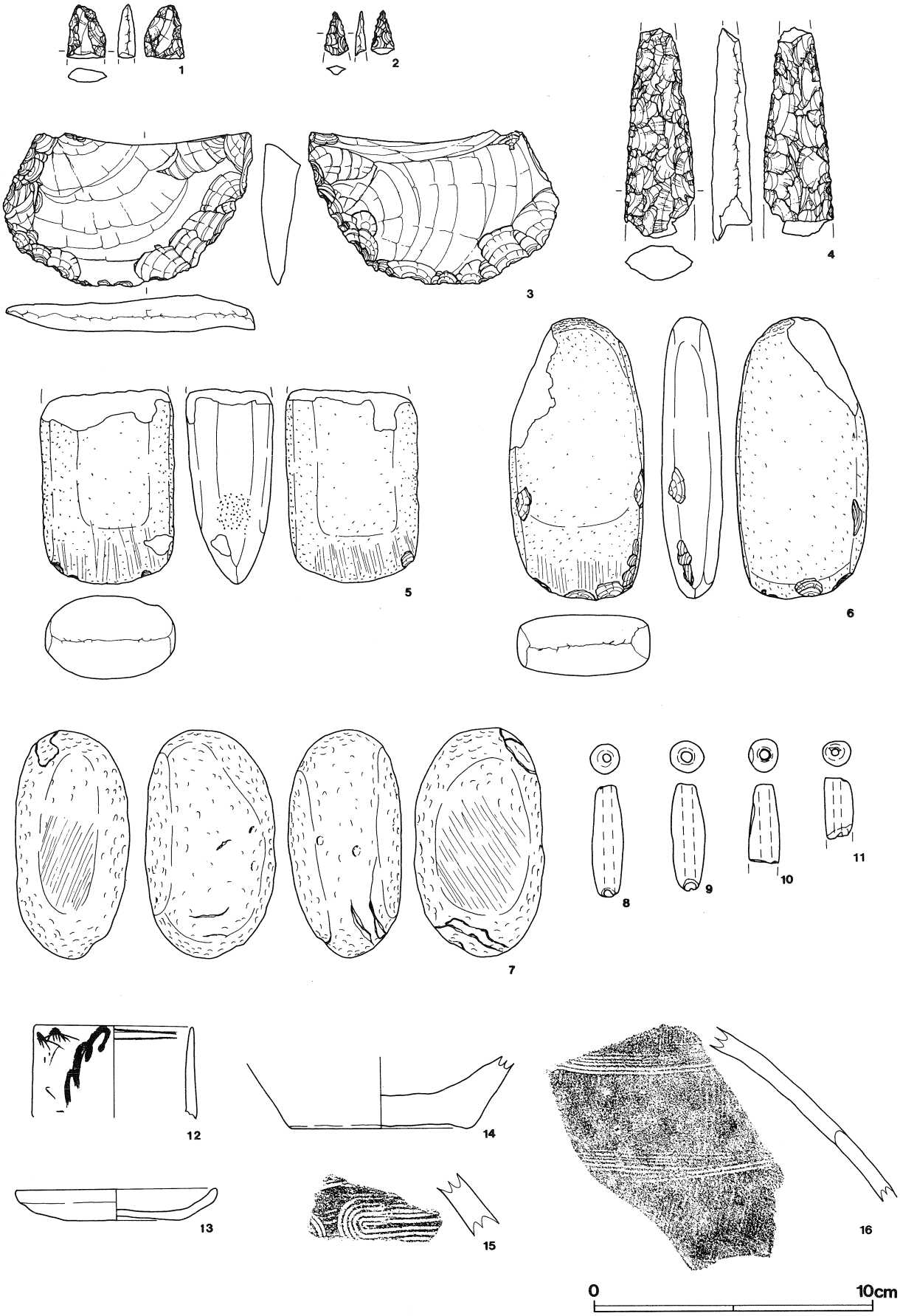
12は染付猪口である。口径7.4㎝、部分残存率15％である。

13はかわらけである。口径9.4㎝、器高1.5㎝、底径5.3㎝、残存率80％である。胎土に石英・長石・細砂を含み、内外面ともににぶい黄橙色である。水田跡水路下から出土した。中世から近世初め頃のものと思われ、水田跡の開田時期上限を示す遺物である。

14は弥生土器底部である。底径8.6㎝である。胎土に石英・長石・白雲母・細砂を含み、内外面ともににぶい黄橙色である。

15は弥生土器片である。７条１単位の櫛描流水紋が施される。胎土に石英・長石・石英質小礫・中砂を含み、内外面ともに橙色である。

16は弥生土器片である。縦位のハケ状工具によるナデの後、６条１単位の櫛描直線文が施される。胎土に石英・長石・細砂を含み、外面が浅黄色、内面が灰白色である。



第29図　グリッド包含層出土遺物

Ⅴ．結語

今回の調査では、本山遺跡ではじめての明瞭な竪穴住居跡を検出することができた。住居跡には被熱した痕跡があり、焼却時に床面にあった遺物群を把握することができた。また流入した、もしくは投棄された遺物の単位を捉えることができた。ここでは、弥生時代の成果について整理することで調査のまとめとしたい。

(1) 住居跡の廃絶形態について

今回の調査で検出した第１号竪穴住居跡は、先行する第２号竪穴住居跡の廃絶後に建築されたものであった。第２号住居跡は整った円形竪穴に７本の柱をもつもので、柱穴断面にみられる抜き取り痕および床下にあった柱穴から１回以上の上屋の建て替えが行われたことがわかった。柱穴覆土内、特に上面には多量の焼土が認められた。焼土は後に建てられる第１号住居跡の廃絶にともなって形成されたものもあり、第２号住居跡柱穴の焼土の形成時期を明確にすることは難しいが、第１号住居跡のものと判断できた柱穴より明瞭に焼土ブロックが多く、明らかに強い熱を受けたことがわかるものであった。現状では、両者の被熱時における酸化の状況が異なっていたことは確実で、第２号住居跡が第１号住居跡とは別に火を受けたと考えてよいだろう。被熱の機会は第２号住居跡の廃絶時、第１号住居跡建築にともなう古家（第２号住居跡の廃絶された上屋）の撤去などが考えられる。

第１号住居跡は、壁溝の形状、住居跡覆土全体に均等分布する遺物の出土状態、覆土の層位、柱穴の区別などから、第２号住居跡に遅れるものであることは明らかで、西側の壁および壁溝の重なりからみて、第２号住居跡を拡張したものと考えるのが自然である。

第１号住居跡は床面のほとんどに焼土および炭化物の分布が認められ、北西部分には垂木とみられる炭化材も検出できた。第２号住居跡の範囲外にも焼土は分布しており、第１号住居跡に火がかけられたことがわかる。第１号住居跡の床面には後で記す遺物群が存在していたが、量的にも器種的にも少量で、破損しているものが多く、散漫な出土位置からも「生の」生活状況を推し量れない状態であった。被熱した時点において第１号住居跡が生活の舞台となっていたとは考えがたい。第１号住居跡は廃絶後のある時期に火をかけられたことになる。

第２号住居跡との違いは、建て替えが行われていないことと拡張が行われていないことである。

上の条件から、２軒の住居跡の被熱経緯について、次のように捉えることにしたい。

第２号住居跡は、廃絶時から拡張時に至る間に遺存していた上屋に火をかけられた。契機は、建て替えもしくは拡張にともなう上屋の焼却による撤去、または廃絶にともなう焼却の２通りが考えられる。前者の場合、柱穴内に明瞭に遺った柱痕跡が問題である。柱材が芯まで燃え尽きるか、焼け残った芯を折り取る必要がある。後者の場合、第１号住居跡との時期差が問題になる。土器の内容には明瞭な時期差はない。第１号住居跡の住人がどのような経緯で第２号住居跡跡地を居住地に選定し、再利用したかが、重要な点である。

第１号住居跡は、廃絶後に遺存していた上屋に火をかけられた。契機は廃絶にともなう焼却である。焼却の時期については明確にできないが、覆土上層に投棄された土器群に凹線文をもつ土器群が客体的にしか含まれない点（28リットル入りコンテナ10箱近くのうち小片６片）からみて時期差を考えることは難しく、廃屋に火をかけたと考えるより廃絶時に火をかけたとする方が理解しやすい。

さて、共通するのは廃絶時に火をかける場合であるが、ここには調査結果に反映する合理的・機能的な理由は存在しない。命題的な意味合いが介在していると考えるべきである。これを祭祀・儀礼とする場合もあるが、注意が必要であろう。

第１・２号住居跡の被熱の原因については、拡張を含む建て直しにともなう上屋の焼却、廃絶時の焼却の可能性が高いが、廃屋の焼却をふくめ、今後の調査結果の増加をまって結論づける必要がある。安易に焼失住居という語を用いることは避けたい。

(2) 遺物の出土状態と一括性について（第30図）

今回の調査では、１軒の住居跡出土遺物としてはきわめて多量の土器・石器が得られた。これらの遺物には、凹線文をもちいた土器がほとんどみられず、ほぼ同一時期のものと判断できる。しかし、出土状態からみて一括性を保証できるものは非常に少ない。

遺物を出土した住居跡は基本的に第１号住居跡に限られる。第２号住居跡は拡張によって床面レヴェルで再利用されているため、本来的に第２号住居跡に帰属する遺物は不明である。第１号住居跡の遺物は主に４種類の出土状況に分けられる。

第１は、覆土１～２層内に特定の小単位をもって出土するまとまりである。これらは一部の石器を除き、すべて土器の破片を中心とした本来的な器種の機能を果たさないものに限られていた。出土状況は、外部から同時にもたらされたことを示し、第12図のａやｂなどの単位では住居中央方向への流入傾向もみてとれた。これらは部分的に炭化物・焼土を含む３層内に食い込んでおり、３層の薄い部分では床面付近にも同様の分布が認められた。特定の運搬条件のもとで運んだのち、焼却廃屋となり窪地となった住居跡竪穴部に不用品を投棄したものと考えたい。完形の石鏃の混入原因は不明である。

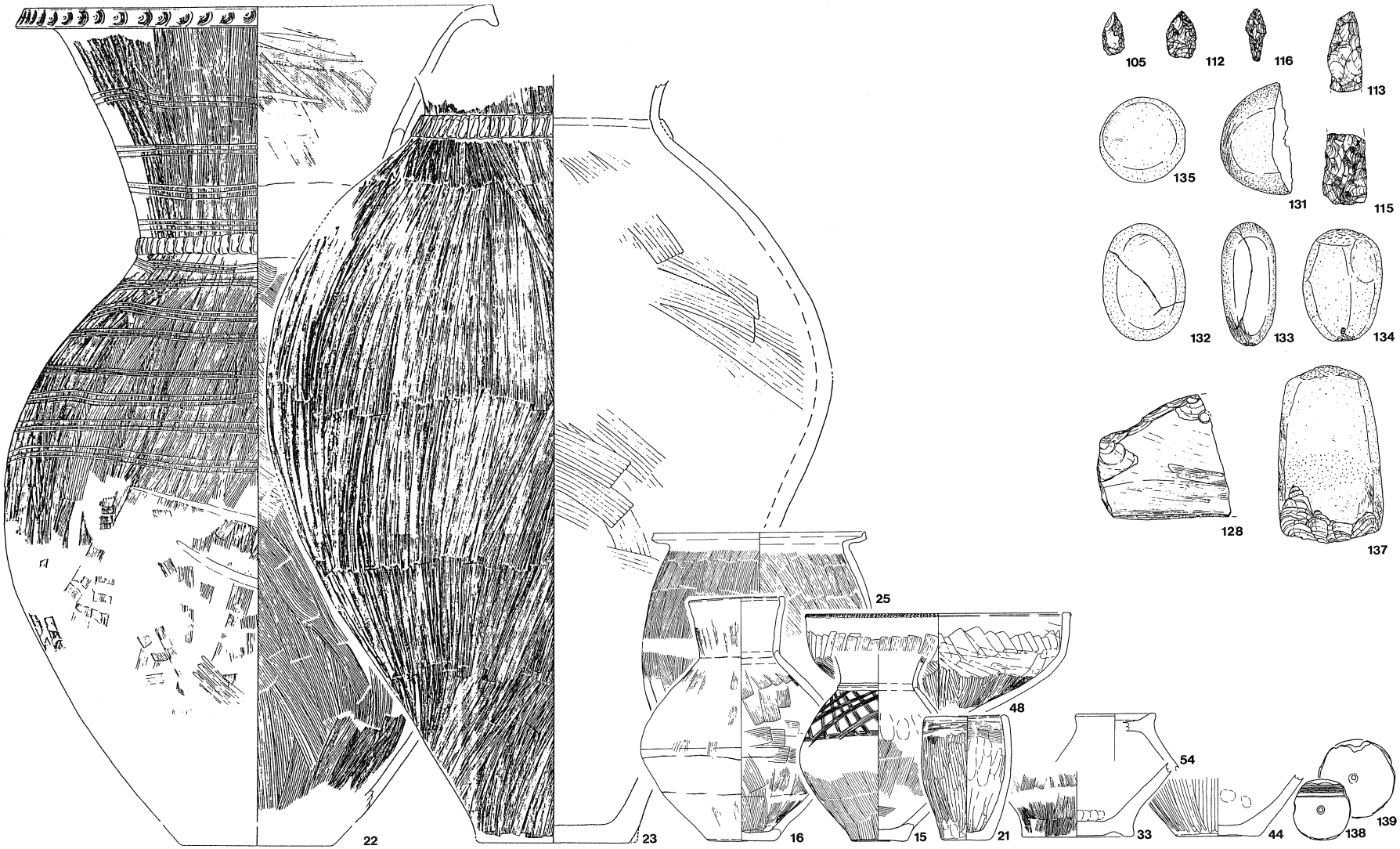
第２は、炭化物と焼土の混入する３層下で出土するものである。特に垂木とみられる炭化材下、もしくは炭化材に接して出土する遺物には被熱によって表面が剝離しているものがあり、石器も例外ではなかった。しかし、被熱が弱く、３層の焼土・炭化物形成が未発達な南東側では、明瞭な被熱のない遺物も認められた。

第３は、柱穴や中央土坑・壁溝内の小ピットなどに入り込んでいたもので、柱痕跡の層内で検出されたものなどは元来床面に遺存していた可能性がある。

第４は、壁際堆積層である４層内の出土遺物であり、竪穴部周囲の壁上から落ち込んだ状態で検出したものである。

出土遺物のうち、ほとんどのものは１の状況でみつかっており、明らかに住居跡にともなわないものであることがわかる。

住居の廃絶およびこれにともなう焼却の状況については、すでに上で検討した。第１号住居跡は、廃絶にともなう焼却を受けた可能性が高かった。２～４の状況で検出された遺



第30図　第１住居跡出土の一括性の高い遺物（Ｓ＝3/8，石器Ｓ＝1/4）

物群でも、廃絶以後に遺留していた可能性があるという意味での住居跡にともなう遺物に過ぎない。

これらのことから、以下の条件を満たすものについて、本来的に第１号住居跡にともなうものと認め、一括性の高い遺物群と考えることにして、第30図に示した。

条件は次の通りである。焼却痕跡をのこす覆土３層以下の出土遺物であること。垂木とみられる炭化材の下位にある、またはこれと混在すること。被熱の痕跡があること。ただし、被熱の痕跡については住居跡南東側床面にはほとんどみられないことから、この付近で採取した遺物については例外とした。具体的には48の高杯形土器、21の小形鉢形土器、137の石斧、Ｐ８出土の25の甕形土器、中央土坑出土の33・54の底部・蓋である。

繰り返すことになるが、第30図に示した遺物群は住居跡廃絶時に持ち去られることなく遺された遺物群である。したがって、廃棄物として存在していたため持ち去る際に選択からもれた可能性もある。生活レヴェルにおける一括遺物ではなく、一括性の高い遺物としたのはこのためで、扱いには相応の注意が必要である。

(3) 土器群の編年的位置づけ

今回の調査で得られた弥生時代の土器は、２大別することができる。１つは第４号溝跡３層内出土土器群であり、もう１つは第１・２号住居跡、第４号溝跡１層、掘立柱建物跡、ピット群、包含層出土土器群である。ここでは２つの土器群の編年的位置づけについて若干の検討をするが、後者の土器群については、いずれも様相が類似していること、第１号住居跡以外の遺構および包含層出土土器は状態がわるく量的に少ないことから、第１号住居跡出土土器の検討に限ることにしたい。

第４号溝跡３層内出土土器群は、断面三角形の突帯文が特徴的である。出土量が少ないこともありプロポーションは不明であるが、胴部最大径上部付近にキザミ目をもつ突帯文を４条以上施す壷形土器片が認められた。甕形土器は胴の張らないもので、口縁部が短く屈曲する。器種構成などは不明である。他にミニチュアの壷形土器が出土した。全面を細かくハケ状工具によって調整するが、手間のわりに調整手法は雑である。これらの土器群は、最新の成果ではⅠ－４様式（森田1990）にあたるものと考えられる。

第１号住居跡出土土器群は、出土状態から２つに分けて考えたい。一つは覆土上層を中心に出土する住居跡にともなわない土器群で、もう一つは住居跡にともなう一括性の高い土器群である。

覆土出土土器は、櫛描文を多用し、著しく加飾する傾向が認められる。全体のプロポーションがわかる例がないので、文様構成を中心に概略を記そう。

壷形土器は大形の広口壷、小形の広口壷、短頸壷が認められる。大形の広口壷には有段口縁をもつものがあり、口唇にハケ状工具によるキザミや竹管による刺突を施し、口縁下部を同様の文様で装飾する。また、体部上半には櫛描直線文と櫛描波状文を交互に配する複数の文様帯を施すものや、ハケ状工具によるタテナデを地紋として用い櫛描直線文の文様帯を複数施すものが多く、他に櫛描直線文間に斜格子文を施紋する構成を複数文様帯中に配置するものもみられる。小形の広口壷のうち、口縁が垂下するものでは、口縁外面に

ついて櫛描波状文を地紋とした多数の円形浮文で、内面について櫛描波状文を地紋とした円形浮文・櫛描扇形文等で飾るものがある。体部上半は、上下を櫛描直線文で区画し半截竹管をもちいた斜格子文で充塡するものが多い。短頸壷を除き、壷形土器は頸部に指頭圧痕突帯もしくは3条程度の突帯を施すものが多い。短頸壷には、口縁外面下部に突帯を施す場合もある

甕形土器は、口縁端部が肥厚したのち面取りするものが主体をなす。口唇部外面の面取り部にキザミを施す例もある。高杯形土器は、水平口縁で口縁端部が垂直に垂下するものが主体であるが、中実の脚部も出土している。鉢形土器には良好な資料がないが、口縁の内傾するものがある。

次に、住居跡にともなう一括性の高い一群を概観しよう。

壷形土器は大形の広口壷A、小形の広口壷、短頸壷が認められる。大形の広口壷Aの22は頸部が上方に大きく延びるものであるが、極端な大形化は認められない。頸部には指頭圧痕突帯が施され、頸部および体部上半にはハケ状工具によるタテナデを地紋とし、櫛描直線文帯を複数施している。広口壺Bと思われる23は有段口縁の可能性が高いが不明である。頸部には指頭圧痕突帯が施され、体部は非常に細かいハケ状工具によるタテナデによって調整されている。小形の広口壷には、口縁が垂下するものの存在は不明であるが、体部上半には上下を櫛描直線文で区画し櫛描斜格子文で充塡する15がある。短頸壷はハケ状工具によるタテナデが施され、体部下半にミガキの痕跡が認められるが、詳細は被熱のため不明である。小形の壷形土器は、体部中央やや下に最大径がある。

25の甕形土器は口縁端部が「く」字状に屈曲するもので、体部上半はハケ状工具によるナデが、下半はヘラナデまたは弱いヘラケズリが施されている。

高杯形土器は、杯部が直線的に大きく開き、湾曲したのち垂直に口縁が立ち上がるもので、丁寧にミガキ調整され、口唇部にはキザミが施されている。円盤充塡手法によるものである。

鉢形土器にはコップ状のもの（21）がある。非常に丁寧にミガキ調整されている。調整は粗いが類似の形状の土器は、中期の播磨地域に散見される。

これらの土器はいわゆる第Ⅲ様式のうち、凹線文発生直前で円盤充塡法出現後の段階に対応する。第Ⅲ・Ⅳ様式第1段階（井藤1987）、あるいはⅢ－2様式（森田1990）に該当するものとしてよい。

広口壷に顕著な加飾の傾向は非常に強く、一方で大形の広口壷の口縁部の肥大化は収まりをみせている。文様帯の複数化の傾向も顕著で、西摂を中心とした近畿北西部に共通する文様構成を反映している。播磨地域の影響下に現れるとされ（森田1990）、西摂に顕著な分布をみせる棒状浮文の存在（13）もこれに対応する。

文様構成・器形をみる限り、住居跡出土土器の2群に明確な型式的区別はない。遺跡の構成を考える際、第4号溝跡3層出土土器群と上層の土器群の間にある無遺物の2層の存在は大きい。集落は、中期を中心に展開したと考える方がよいだろう。

(4) 石器について

第１号住居跡から出土した石器には、住居廃絶時に遺されたと考えられるものが非常に少ない。本来、住居跡に帰属する一括性の高い石器群について検討すべきであるが、土器群に明確な時期差がないこと、流通事情などは単独の住居で生活した集団より遺跡単位の集団活動に関わると思われること、第１号住居跡覆土内に投棄されたとみられる遺物群も当調査区付近の生活痕跡に帰属するものと考えられることなどから、ここでは第１号住居跡出土石器全般について簡単に整理して、今後の本山遺跡における基礎的な情報としたい。なお、第１号住居跡覆土が耕作によって破壊されたため、住居跡そのものにはともなわなかったが、第１号住居跡上にその輪郭を表すように分布していた基本層序Ⅲ層内出土の石器もこれに含めることにする。

第１号住居跡から出土した石器は、打製石鏃11、打製石剣３、スクレイパー１、磨製石包丁３、砥石１、石鑿１、太型蛤刃石斧１、石皿１、磨石・敲石５、石核２、外に剥片多数がある。このうち、住居廃絶時のものは第30図に示した打製石鏃３、打製石剣２、磨製石包丁１、太型蛤刃石斧１、磨石・敲石５である。また、打製石剣には完形品はなく、いずれも長さ５㎝程度の欠損品で、出土位置からみて113・115は同一品の可能性もある。第１号住居跡上のⅢ層内から出土した石器は、打製石鏃12、打製石錐４、石核２、剥片多数である。このうち、第22図２の石鏃は縄文時代の遺物の可能性があるため除外すると、第１号住居跡に関連する出土石器は、打製石鏃22、打製石錐４、打製石剣３、スクレイパー１、磨製石包丁３、砥石１、石鑿１、太型蛤刃石斧１、石皿１、磨石・敲石５、石核４、剥片多数となる。

石鏃は完形品もしくは微細な欠損をもつが使用可能な品であった。石錐は先端部を欠損していた。石剣は欠損品であった。スクレイパーは完形品であった。石包丁は欠損品で使用は不可能であった。砥石・石鑿は完形品、太型蛤刃石斧は刃部に著しい剥離痕があり、装着痕から刃部までが短く、通常の使用には不向きであろう。石皿・磨石・敲石はいずれも完形であった。

住居跡廃絶時に遺されたものに関しては、機能に障害のある程度に欠損した石包丁・石剣・石斧のほか、比較的入手が簡単で加工の必要がない磨石・敲石が主体で、少量の石鏃を除き、置き去りにされたものと考えてよいだろう。

石包丁のうち、今回の調査で住居跡にともなうと確認できたものは、欠損した大形の磨製品１点であったが、小形の欠損品２点が覆土内および撹乱層内から出土している。大形の刃部をもつ石器を「大形直縁刃石器」として検討した斉野裕彦は、磨製の大形石包丁と小形石包丁がセット関係にあることを指摘し（斉野1994）、各々の機能として小形石包丁に穂摘具、大形石包丁に収穫後の稲藁刈り取りや雑草除去を与えている。今回検出した石包丁は大形品であり、覆土および撹乱層中から出土した小形の石包丁のいずれかがともなう可能性が高い。欠損品とはいえ、小形品の存在は明確で、第12次調査の一括出土と合わせて、当遺跡内で両者が共存していたことは明らかである。

一方、石鏃・砥石・石鑿など、覆土中には使用可能な石器もある。

石鏃を除く使用可能な石器はすべて単独であるが、石鏃は複数の出土があった。形態・

製作技法を検討するには数量的に不十分であるが、使用可能な石器の廃棄状況の基礎的な情報を提供することを目的に、以下に整理しておこう。

石鏃は基部形態・茎部形態・全体特徴から、無茎凹基式で短い三角形のもの（2）、無茎凹基式で長い三角形のもの（7・8）、無茎平基式で短い三角形のもの（3・5・9）、無茎凹基式で刃部の張るもの（112）、無茎平基式で長い三角形のもの（109・110・111）、凸基式で基部が茎状をなす菱形のもの（有茎式としてもよいが境界が明瞭でないもの）（106・107・108）、凸基式で基部が茎状をなす柳葉形のもの（10）、有茎式のもの（116）、凸基式で基部が弧をなし刃部が張るもの（11・12・104・105）に分けることができる（1～12は第22図、103～116は第19図）。特に無茎平基式で短い三角形のもの、無茎平基式で長い三角形のもの、凸基式で基部が茎状をなす菱形のもの、凸基式で基部が弧をなし刃部が張るものについては複数の個体が存在し、安定した製作環境にあった可能性が指摘できる。しかし、剥片との接合関係など、時間的制約で十分な調査が行えなかったこともあり、技術工程復元に関する検討は今後の課題としたい。

石材の産出地では、打製石鏃・打製石錐・打製石剣・スクレイパー、剥片はすべてサヌカイト製で、やや白色が強く、摂理面の多い二上山産の石材であると考えられる。石包丁は、大形のものが滋賀県産の粘盤岩製とみられ（被熱しているため不明瞭であるが）、他に和歌山県内の三波川変成帯のうち、変成度の低い無点紋結晶片岩帯に産出する石墨片岩と、滋賀県産の粘盤岩製の小形品がある。太型蛤刃石斧・石皿・磨石・敲石は細粒砂岩もしくは中粒砂岩を主とする堆積岩が用いられ、磨石には花崗岩製のものもある。

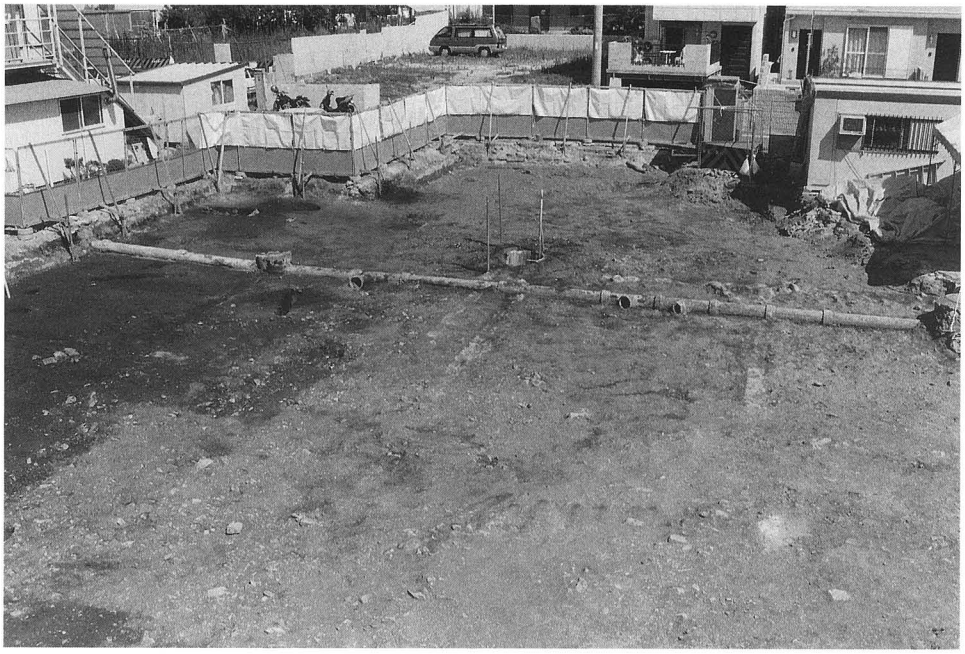
主要参考文献

井藤暁子　1987「畿内の櫛描紋土器」『弥生文化の研究』第4巻

斉野裕彦　1994「弥生時代の大型直縁刃石器（下）」『弥生文化博物館研究報告　第3集』

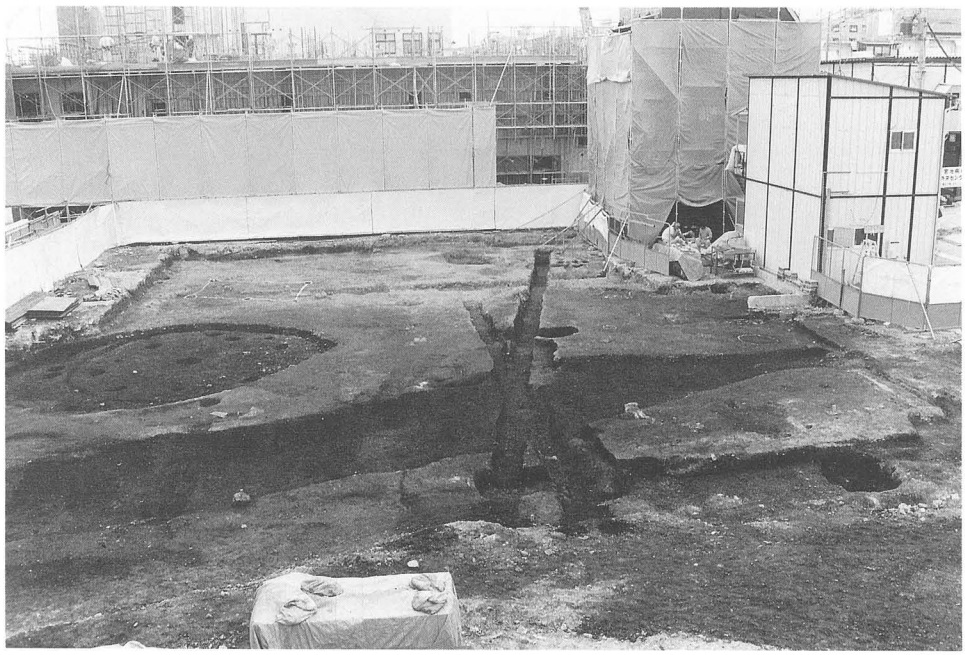
蜂屋晴美　1983「終末期石器の性格とその社会」『藤澤一夫先生古希記念　古文化論叢』

森田克行　1990「摂津地域」『弥生土器の様式と編年―近畿編Ⅱ』



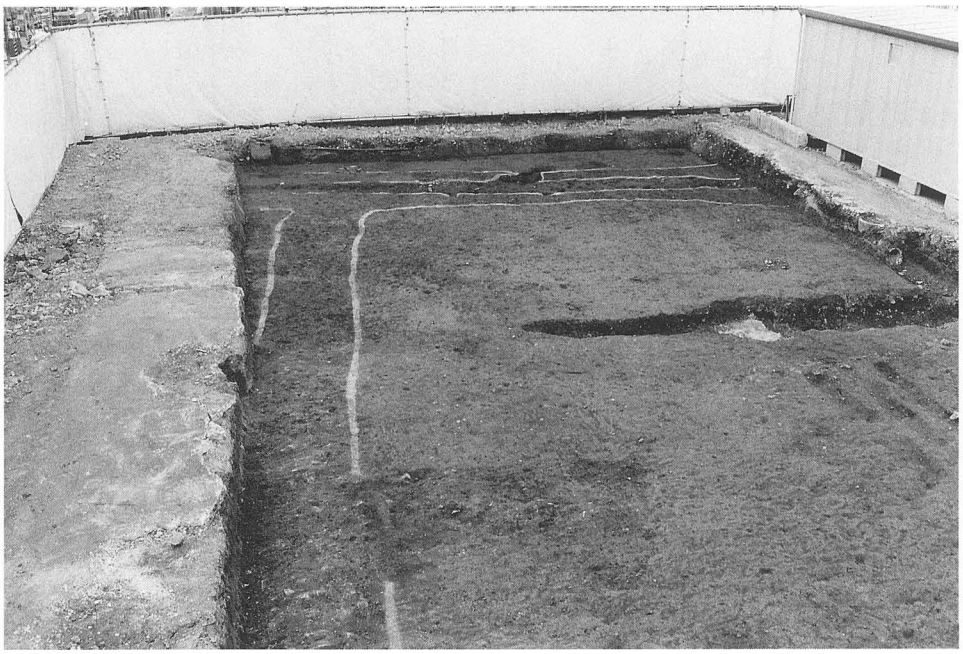
第Ⅰ期全景

第Ⅱ期全景

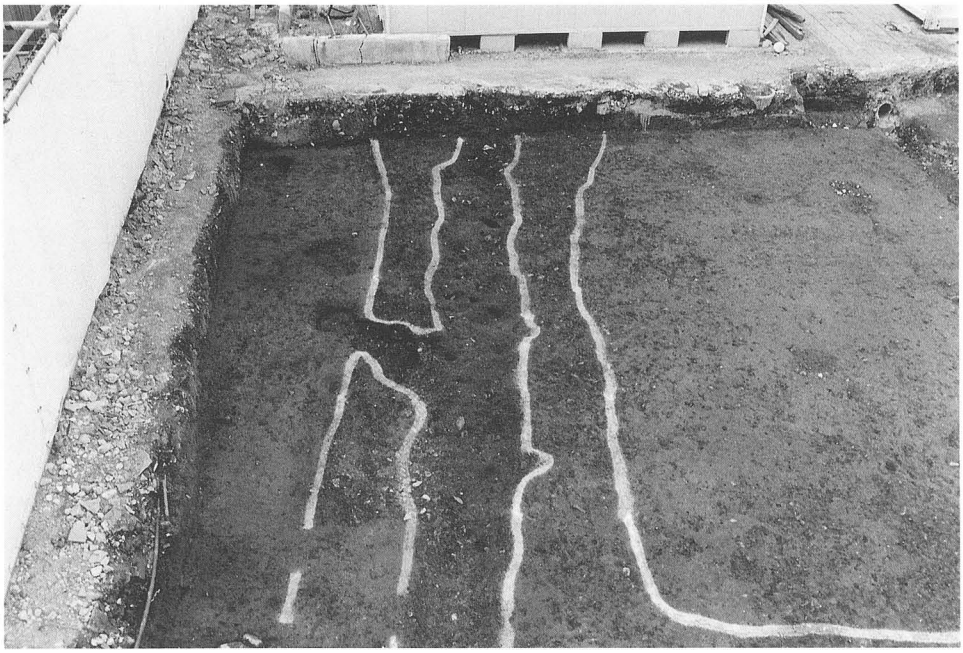


第Ⅱ・Ⅲ期全景

図版 2



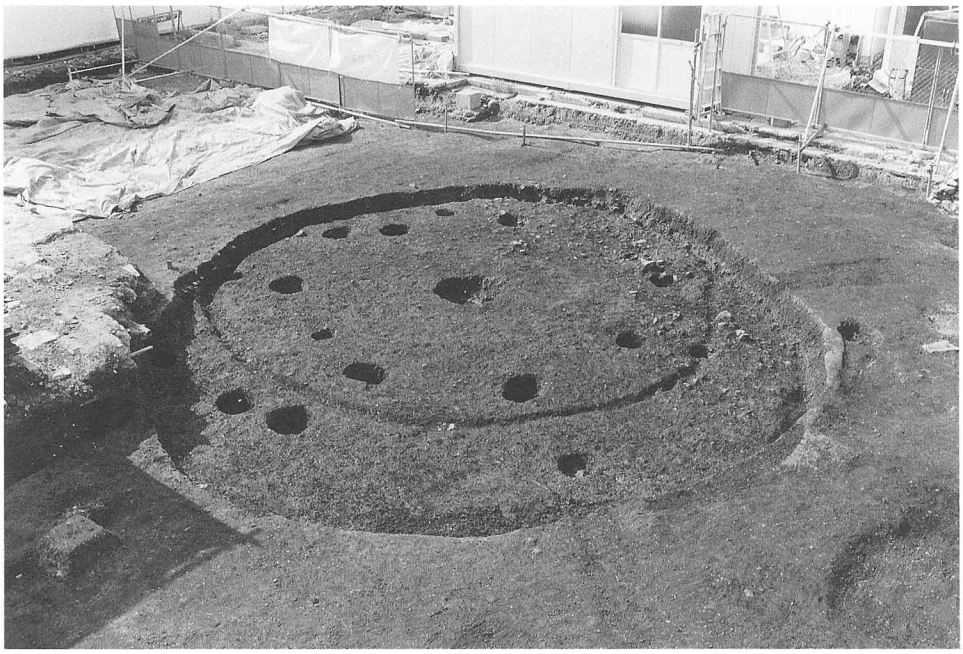
第１遺構面水田跡



大畦畔と水路跡

用水路底面の状況

第１・２号住居跡



第１・２号住居跡

第１・２号住居跡

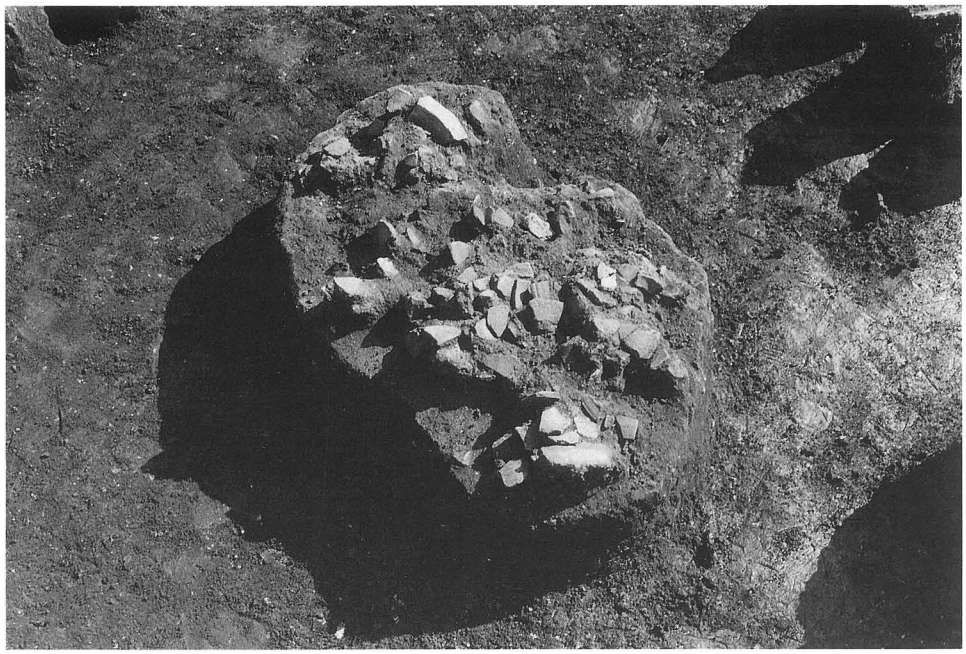
図版 4

第１・２号住居跡掘り方

第１号住居跡遺物出土状況

第１号住居跡

上層の遺物出土状況



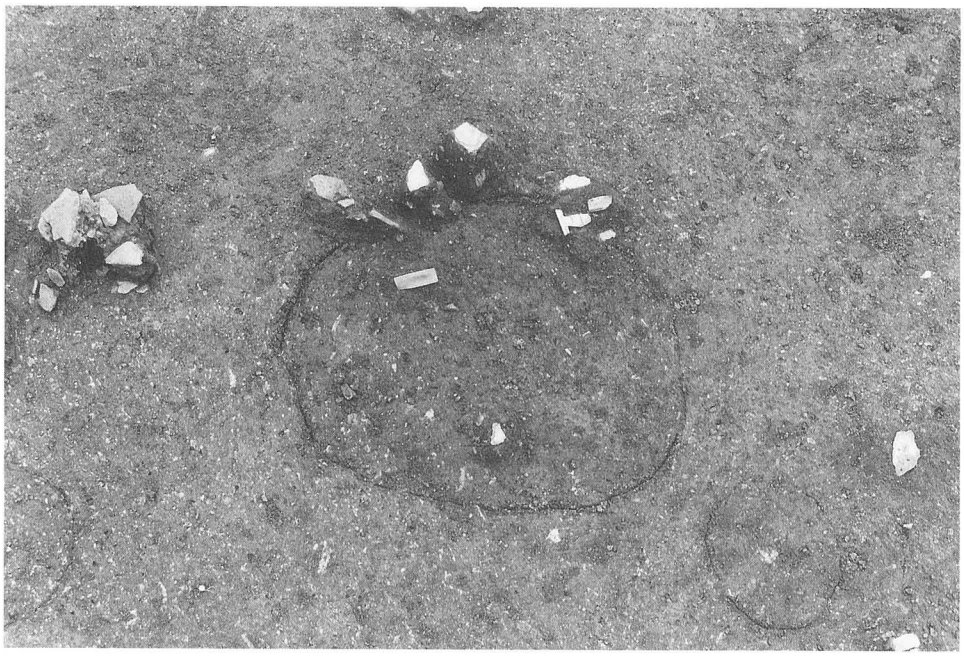
第１号住居跡
遺物の出土単位

第１号住居跡
下層の遺物出土状況

第１号住居跡
下層の遺物出土状況

図版 6

第 1 号住居跡
下層の遺物出土状況



第 1 号住居跡
中央土坑確認状況

第 1 号住居跡
中央土坑遺物出土状況

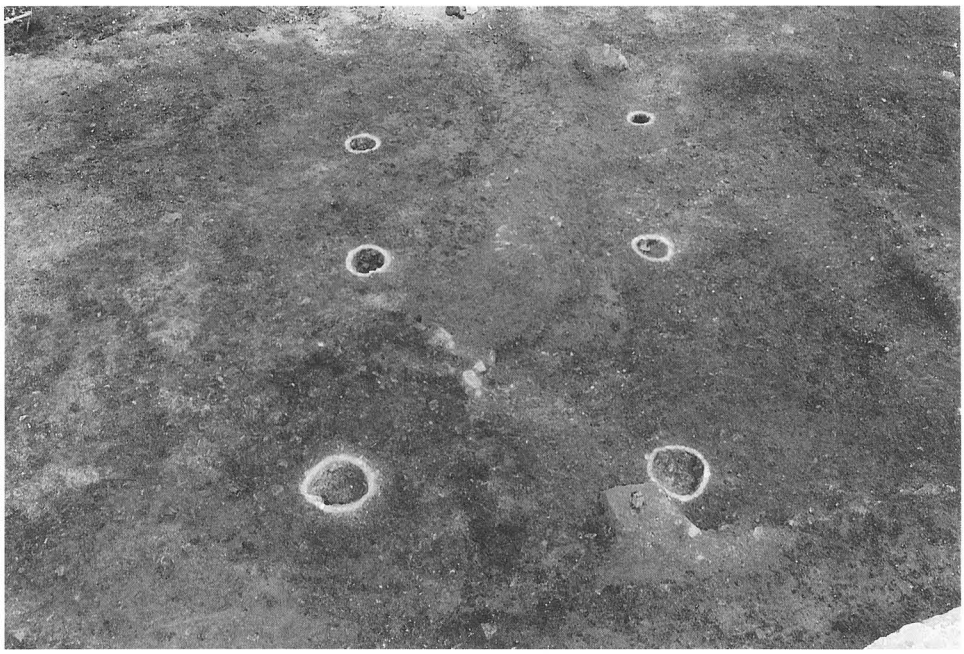
第１号住居跡中央土坑

第１号住居跡
中央土坑に切られた
第２号住居跡中央土坑

第１号掘立柱建物跡と
第１号溝跡

図版 8

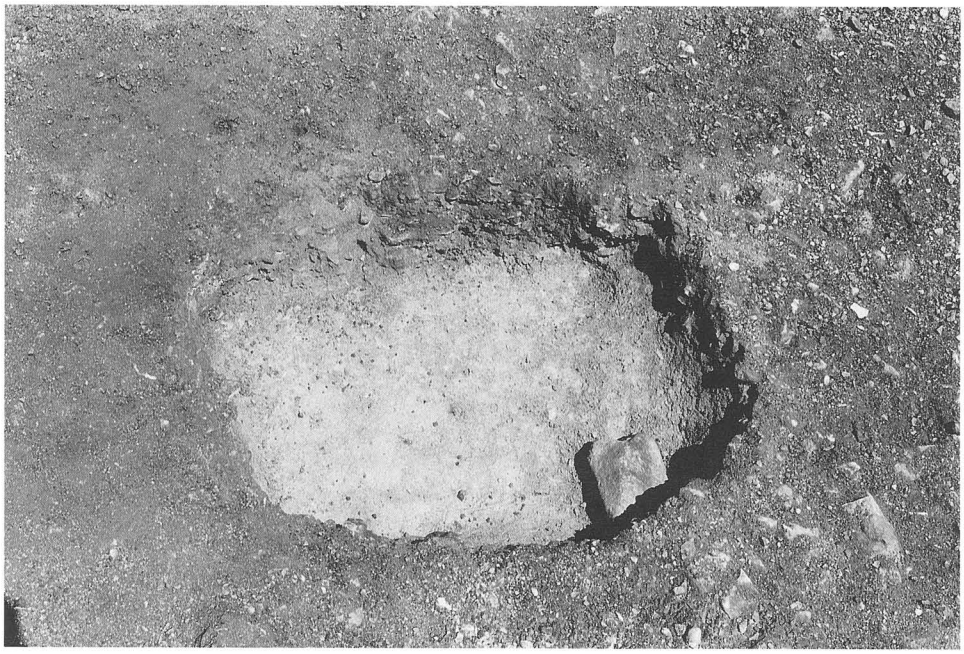
第 2 号掘立柱建物跡



第 3 号掘立柱建物跡

ピット群

第 2 号土坑



第 3 号土坑

第 3 ・ 4 ・ 5 号溝跡

図版10

第４号溝跡

第４号溝跡

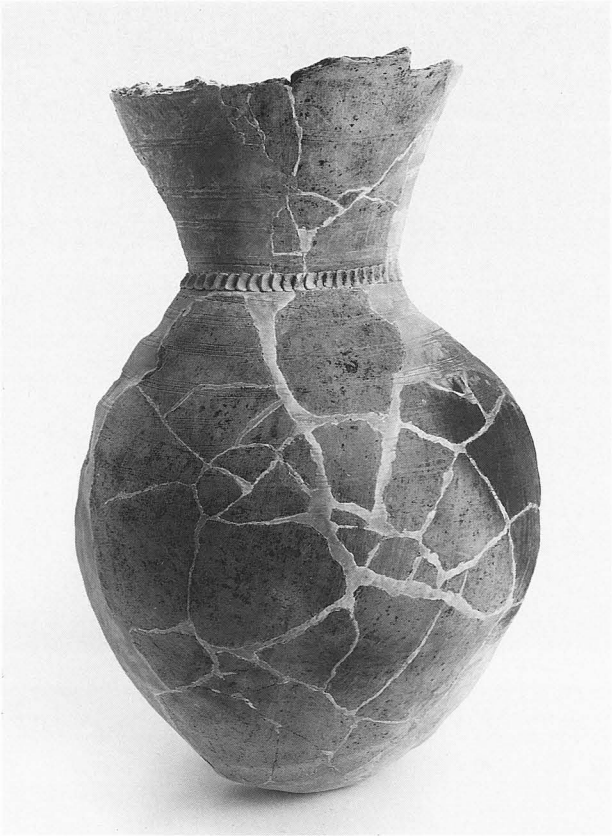
第４号溝跡
下層の遺物出土状況

第４号溝跡
下層の遺物出土状況

倒木痕断面

発掘調査参加者

図版12



第１号住居跡22

第１号住居跡16

第１号住居跡23

第１号住居跡15

第１号住居跡48